小林市文化財調査報告書第６集

二原遺跡１区・２区
宮地遺跡１区
宮地遺跡２区
奈佐木城跡

二原遺跡

宮地遺跡１区

宮地遺跡２区

奈佐木城跡

小林市教育委員会
平成23（2011）年３月

二原遺跡1区・2区　宮地遺跡1区　宮地遺跡2区　奈佐木城跡　正誤表

訂正箇所	誤	正
例言7行目	平成8月12日	平成10年8月12日
例言8行目	平成11月1日	平成11年11月1日
55頁　1行目	広台内に	高台内に

序　文

小林市内には、古墳時代の地下式横穴墓を多数検出した東二原地下式横穴墓群に代表されるように、多くの貴重な遺跡の存在が知られています。教育委員会では、文化財保護事業の一環として、市の貴重な文化遺産である遺跡を保護するとともに、失われていく遺跡の記録保存に努めています。

本書では、平成21年度に小林市教育委員会が発掘調査を実施した二原遺跡の調査成果ならびに旧須木村教育委員会が実施した宮地遺跡及び奈佐木城跡の調査成果を報告しております。これらの発掘調査の成果は、平成22年度に実施した「小林の歴史展」で公開し、多くの方々にお越しいただき、古代のロマンに触れていただきました。教育委員会では今後も文化財の保護と活用に努めてまいりたいと考えております。

最後になりましたが、発掘調査に従事していただきました市民の皆様をはじめ、関係各機関の方々には多大なご理解とご協力をいただきました。心よりお礼申し上げます。

平成23年3月

小林市教育委員会　教育長　佐藤勝美

例　言

1　本書は、平成21年度に小林市教育委員会が発掘調査を実施した二原遺跡、旧須木村教育委員会（須木村は平成18年3月に小林市と合併、以下「旧」省略）が発掘調査を実施した宮地遺跡1区・2区及び奈佐木城跡の発掘調査報告書である。

2　各遺跡の調査期間及び調査主体は下記の通りである。

二原遺跡1区　平成21年8月28日～平成21年9月18日　調査主体：小林市教育委員会
二原遺跡2区　平成22年1月13日～平成22年3月2日　調査主体：小林市教育委員会
宮地遺跡1区　平成10年5月6日～平成8月12日　調査主体：須木村教育委員会
宮地遺跡2区　平成11年9月7日～平成11月1日　調査主体：須木村教育委員会
奈佐木城跡　平成12年12月6日～平成13年2月26日　調査主体：須木村教育委員会

3　報告書刊行に向けた整理作業は平成22年度に小林市教育委員会が実施した。

4　本書の編集は秦広之が行い、執筆については各遺跡の例言に記載している。

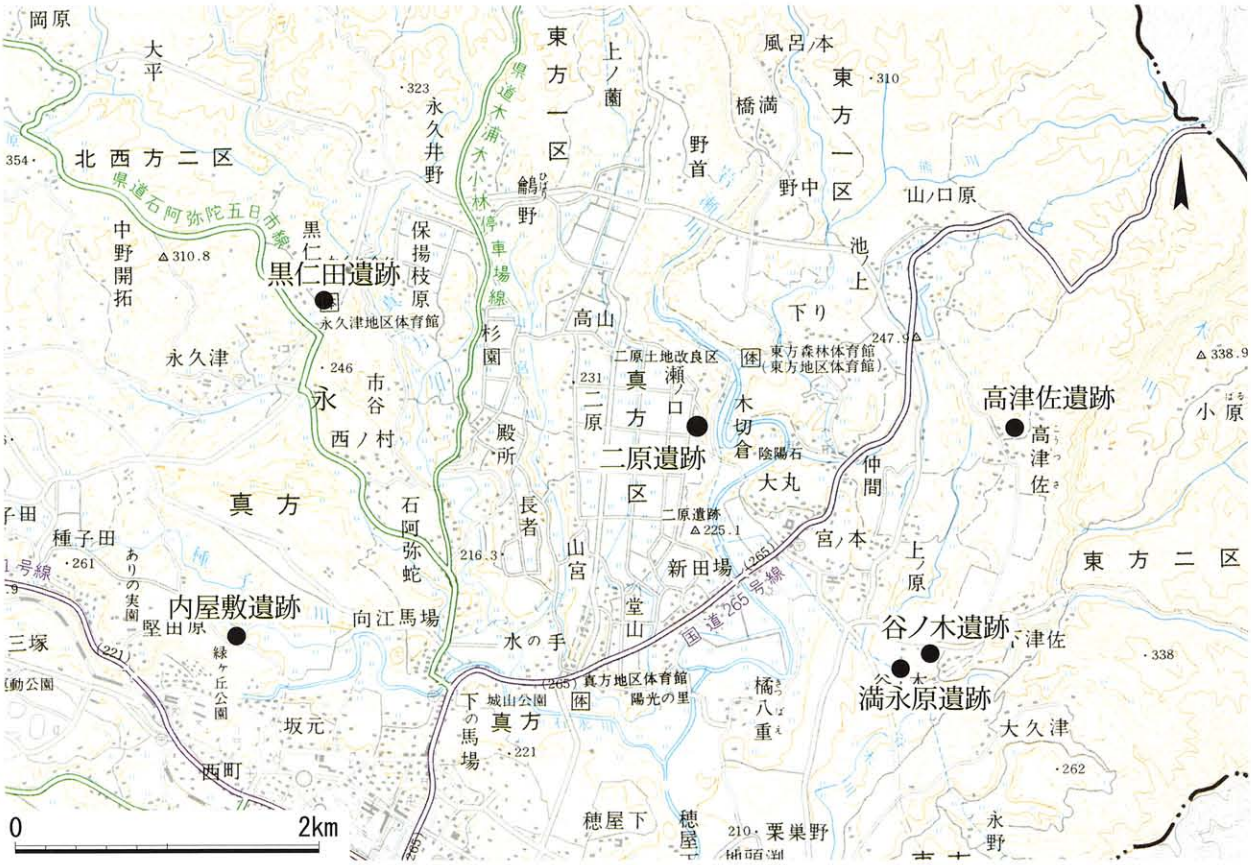
5　報告書作成にあたっては下記の方々よりご助言・ご協力をいただいた。

石川悦雄（宮崎県立総合博物館）　桒畑光博・山下大輔（都城市教育委員会）
福田泰典（宮崎県立西都原考古博物館）

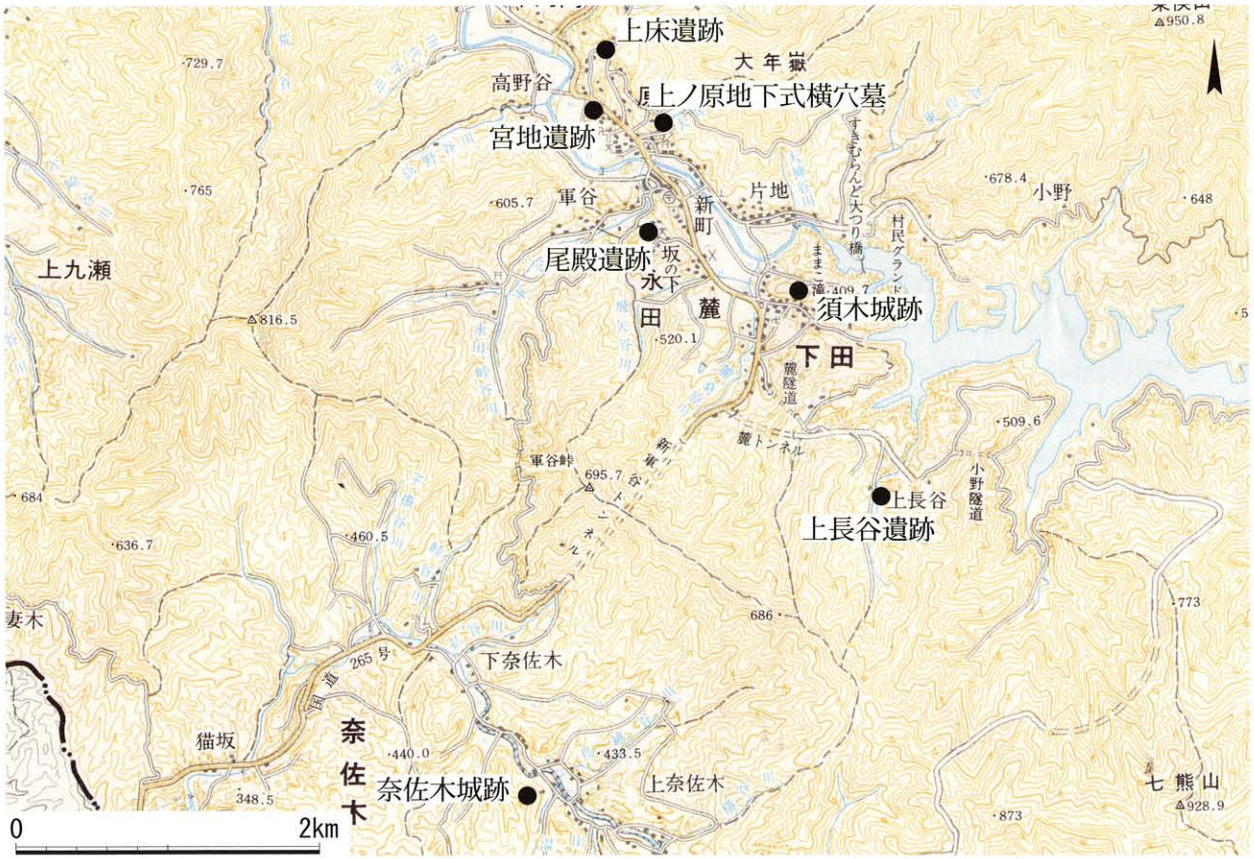
6　発掘調査で出土した遺物とすべての記録は小林市教育委員会で保管している。

目　次

二原遺跡1・2区・・1
宮地遺跡1区・・27
宮地遺跡2区・・43
奈佐木城跡・・・51



二原遺跡及び周辺の遺跡（1/50,000）　国土地理院の承認を得て、同院発行の５万分の１地形図を複製したものを使用



須木地区の遺跡（1/50,000）　国土地理院の承認を得て、同院発行の５万分の１地形図を複製したものを使用

二原遺跡１区・２区

市道二原・下津佐線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

例言

1　本報告は、市道二原・下津佐線道路改良工事に伴い小林市教育委員会が平成21年度に実施した小林市真方字東二原所在の二原遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、小林市教育委員会が調査主体となり実施した。

3　二原遺跡の現地調査から報告書作成までの作業に従事したものは下記のとおりである。

発掘作業：

遺構実測：落合賢一　秦広之　株式会社埋蔵文化財サポートシステム

遺構写真撮影：落合賢一　秦広之

自然科学分析：株式会社古環境研究所

遺物整理：内畠万喜　下野やす子

遺物実測：下野やす子　株式会社埋蔵文化財サポートシステム

製図（デジタルトレース）：内畠万喜

遺物写真撮影及び加工：内畠万喜

4　本報告の執筆については下記のとおりである。

第１・３・４章：秦広之　第２章：増谷理絵　第５章：株式会社古環境研究所

5　土層と遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を参考にした。

6　本報告で使用した方位は座標北である。

7　遺構の表記に使用した略号は以下のとおりである。

SC：土坑　SI：集石遺構　SX：不明遺構

第１章　調査の経過

第１節　調査の経緯

二原地区では小林市建設課による市道二原・下津佐線拡幅工事が計画されていた。開発予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「二原遺跡群」内であったため、平成21年８月に小林市教育委員会が確認調査を実施した。その結果、開発予定地内において縄文時代早期の土器や石器、集石遺構が確認されたため、市建設課と遺跡の取り扱いについて協議を行い、工事により掘削を受ける780㎡について本調査を実施することとなった。本調査は工事の工程を考慮して２度に分けて行い、１次調査（１区:210㎡）を平成21年８月28日から９月18日、２次調査（２区:570㎡）を平成22年１月13日から３月２日まで実施した。

第２節　調査組織

調査主体　小林市教育委員会
調査協力　小林市建設課
　　宮崎県教育委員会

調査組織
小林市教育委員会

教育長		佐藤勝美（平成21・22年度）
社会教育課長		嶽本強（平成21年度）
		大角良弘（平成21・22年度）
社会教育主幹		芹田直茂（平成21・22年度）
		天辰より子（平成21・22年度：文化財担当）
庶務担当	主事	高原百合香（平成21年度）
	主査	加藤義和（平成22年度）
調査担当	主事	落合賢一（平成21年度：発掘調査）
	主任技師	増谷理絵（平成22年度：報告書の執筆）
	委託職員	秦広之（平成21・22年度：発掘調査及び報告書の執筆・編集）

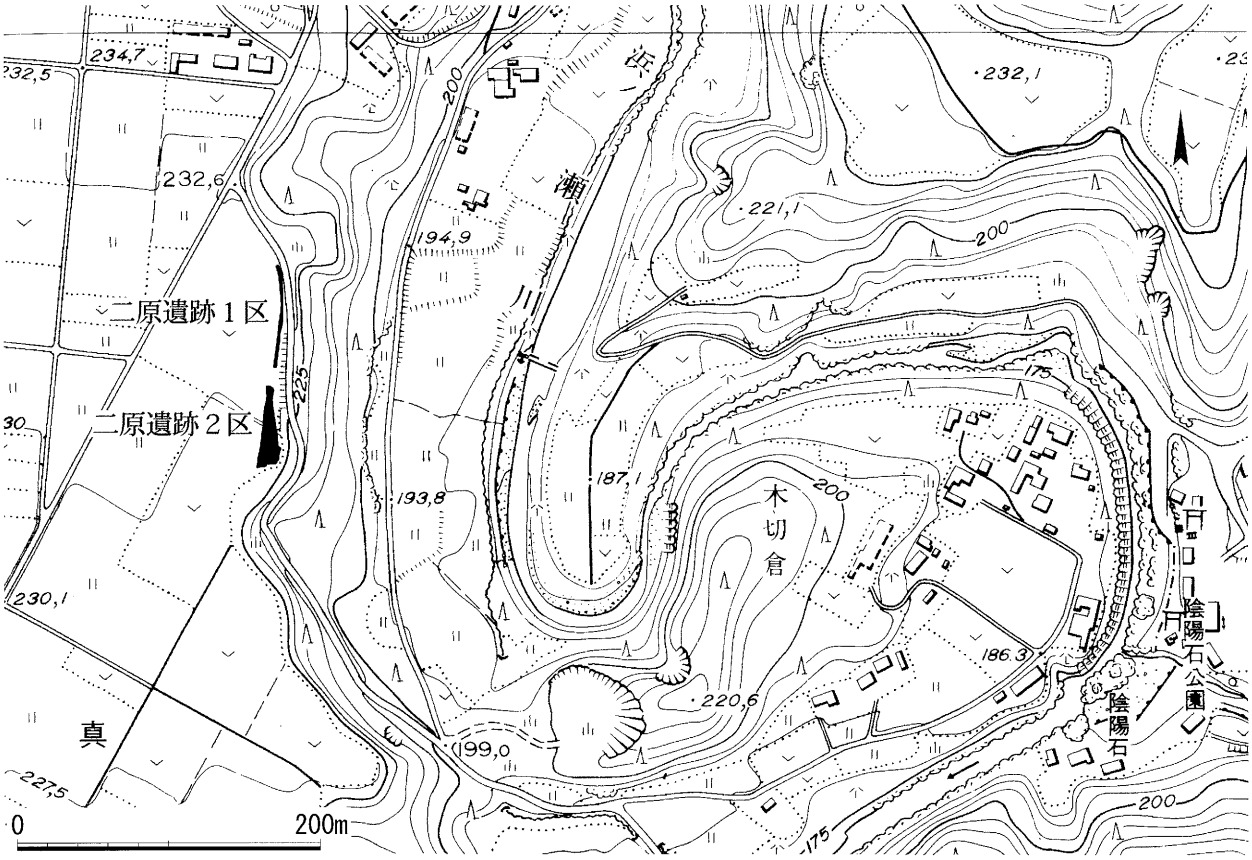


図 1-1　二原遺跡１区・２区調査位置図（1/5000）

第２章　遺跡の立地と環境

調査地は、小林市街地の北東部にある広大な二原台地の北東端部に位置する。標高 220 ～ 230 mの台地の周囲には浜ノ瀬川が台地を取り囲むように北から南東方向へと流れている。

調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地「二原遺跡群」として認識されており、弥生・古墳時代の散布地あるいは古墳として周知されていた。台地の東部には、東二原地下式横穴墓群が存在し、過去に地下式横穴墓 16 基が調査され、人骨が合計 21 体、そのほか鉄鏃や刀子などの鉄製品、骨鏃や貝輪、小型の鏡などが副葬品として出土している。出土遺物などから東二原地下式横穴墓群はおおよそ 5 世紀末～ 6 世紀前半（約 1500 年前）にかけて造られたものと考えられている。遺跡の東部には、周溝をもつ直径 20 mほどの円墳 1 基が存在し、この地域一帯を治めていた首長の墓ではないかと考えられている。現在、東二原地下式横穴墓群は当時の社会を知るうえで貴重な遺跡であるとして、平成 4 年 10 月 26 日に市指定史跡とされ、地元の協力を得て遺跡公園として整備されている。また、その台地南部には、新田場地下式横穴墓群も存在し、地下式横穴墓 9 基が確認され、剣や刀、鉄鏃、鉇、曲刃鎌、鉄斧、釣針などが出土しており、二原台地一帯が遺跡のある地域として認識度が高い。

引用参考文献
『小林市遺跡詳細分布調査報告書』 1993　小林市教育委員会
『東二原地下式横穴墓群　下の平地下式横穴墓群』 1993　小林市教育委員会
『宮崎県史　資料編　考古 2』 1993　宮崎県

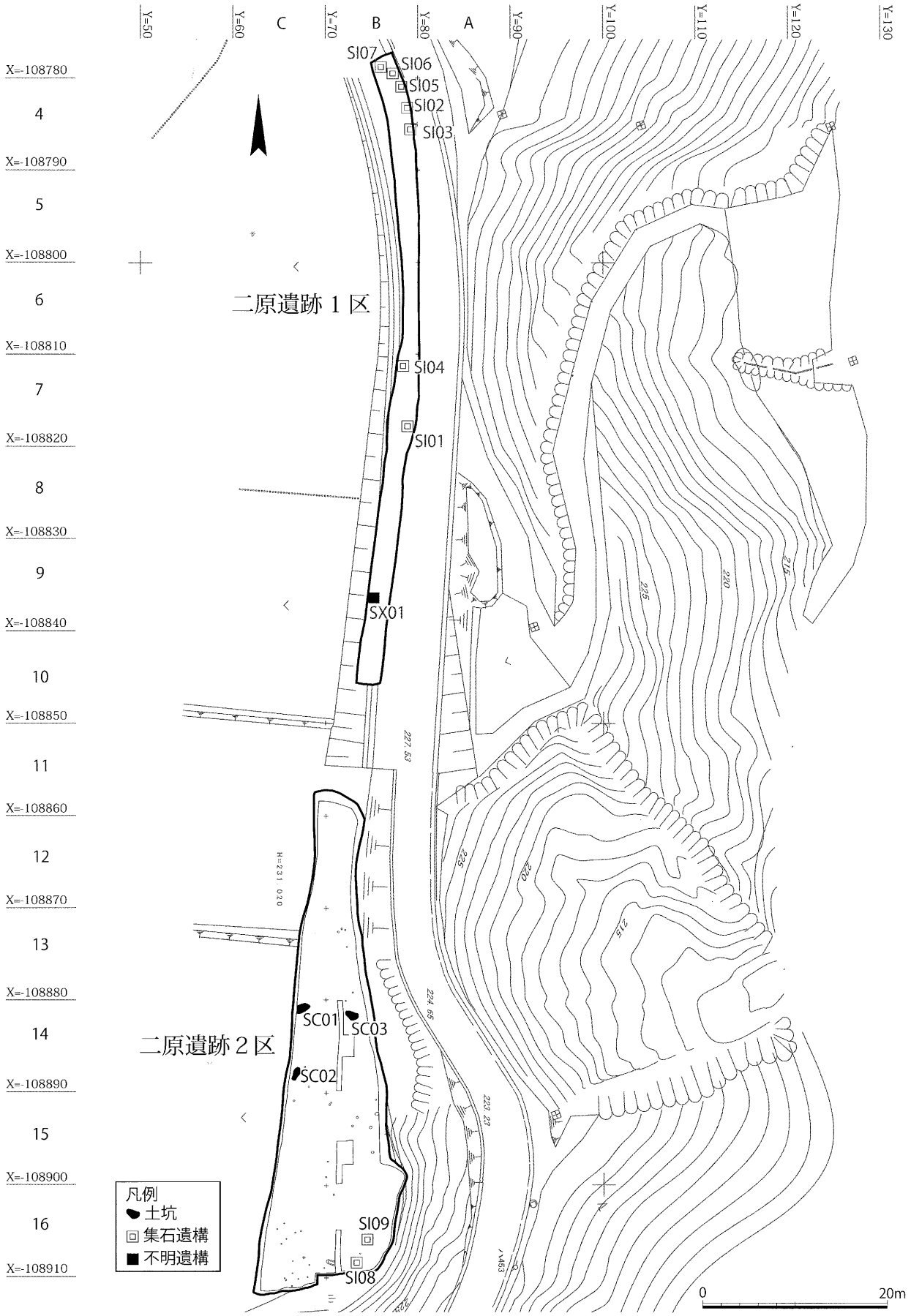


図 1-2　二原遺跡１区・２区遺構配置図（1/600）

第３章　二原遺跡１区・２区発掘調査の成果

第１節　調査の概要（図１－２）

遺跡は、小林市真方字東二原に所在し、標高 230m 前後の平坦な台地の縁辺部に位置する。遺跡の東側には、岩瀬川が蛇行を繰り返しながら流れているが、この川が形成した谷までの距離が 70m 程度であるのに対して、比高差は 40m とかなりの急傾斜で落ち込んでおり、遺跡はその落ち際付近に立地する。

遺跡の基本土層は、アカホヤ火山灰層の上位には、黒色土層が堆積し、事前の確認調査では、この層位より遺構及び遺物は確認されなかった。アカホヤ火山灰層（基本土層Ⅱ層）を挟んで、その下位に黒褐色土層（基本土層Ⅲ層）が堆積し、さらにその下位に褐色土層（基本土層Ⅳ層）が堆積していた。遺物は黒褐色土層（基本土層Ⅲ層）から褐色土層（基本土層Ⅳ層）の上部にかけて出土した。褐色土層（基本土層Ⅳ層）の下位には、黄褐色土層（基本土層Ⅴ層：小林軽石層）が確認され、一部その下位まで掘り下げて遺物の有無を確かめてみたが、遺構及び遺物は確認されなかった。

今回の発掘調査で検出された遺構は、縄文時代早期の集石遺構９基、土坑３基、不明遺構を１基検出した。遺物は縄文時代早期の貝殻円筒系土器である前平式の出土が多く、押型文土器や縄文時代草創期の土器も少量ながら出土し、これらに伴うと思われる石鏃・削器などの石器が出土した。

第２節　遺構と遺物

集石遺構

SI01（図１－３）

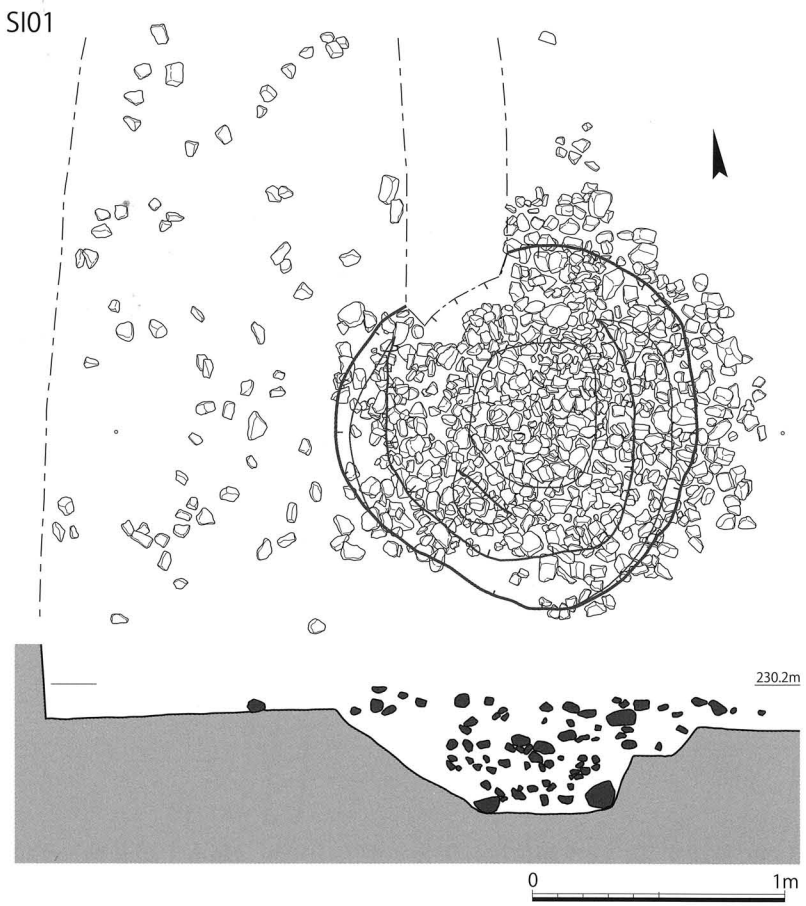
１区の中央部 B7 区画に位置する。出土層位は、アカホヤ火山灰層（基本土層Ⅱ層）下位の黒褐色土層（基本土層Ⅲ層）中の下部で確認され、礫の集中範囲は 1.7 × 1.7m で、周囲には SI01 の構成礫と思われる礫が疎らに拡がる。この集石遺構には、1.4 × 1.4m の円形の掘り込みが伴い、深さ 0.4m を測る。掘り込みの底部にまで、礫が密集して堆積していた。構成する礫の総数は 4608 点を数え、総重量は 294685.3g を測る。礫１個当たりの平均重量は 63.9g と焼成による小礫化が進んでおり、ほとんどの礫には熱を受けた痕跡が確認される。利用された礫の種類ついて、石材鑑定の分析委託を行い、砂岩・流紋岩・チャート・頁岩・粘板岩の利用が判明している。

SI02（図１－４）

１区の北端 B4 区画に位置する。出土層位は、アカホヤ火山灰層（基本土層Ⅱ層）下位の黒褐色土層（基本土層Ⅲ層）中の上部で確認され、礫の範囲は長軸 1.9m、短軸 0.8m+ α で東側は調査区外へと拡がる。掘り込みは確認されていない。この遺構が確認された範囲は、全体の半分程度であるが、礫の総数は 1177 点を数え、総重量は 80087.0g を測る。ほとんどの礫には、熱を受けた痕跡が確認される。遺物が出土しておらず厳密な時期認定はできないが、この遺構を取り除いた下層（黒褐色土：基本土層Ⅲ層の下部）より、縄文時代早期前葉の前平式が出土しており、この時期以降の縄文時代早期の所産と考えられる。

SI03（図１－４）

１区の北端 B4 区画に位置する。出土層位は、アカホヤ火山灰層（基本土層Ⅱ層）下位の黒褐色土層（基本土層Ⅲ層）中の上部で確認され、礫の範囲は長軸 1.1m、短軸 0.8m で規模は小さい。いずれの礫も熱を受けた痕跡が認められ、総数は 474 点を数え、総重量は 34897.1g を測る。遺物が出土しておらず厳密な時期認定はできな



SI01 付近土層図

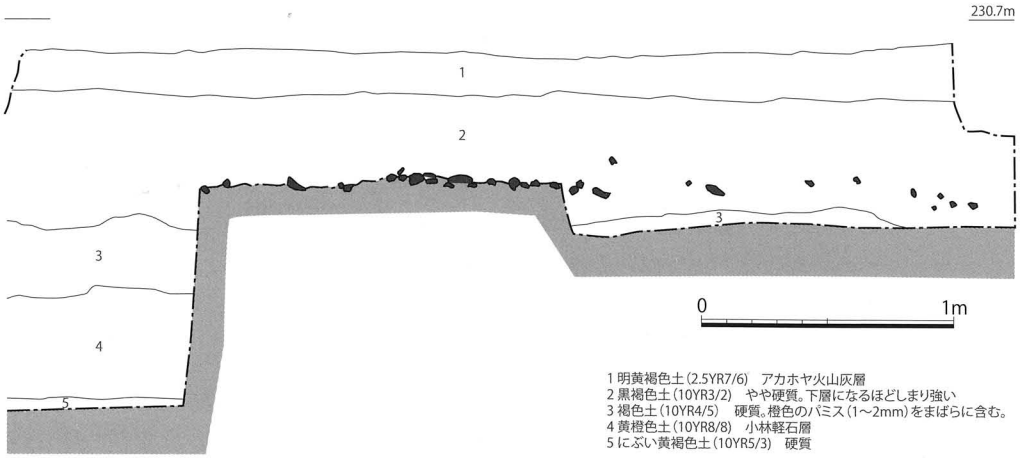
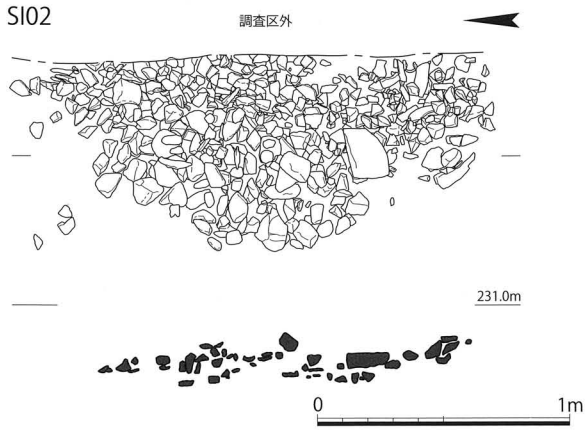
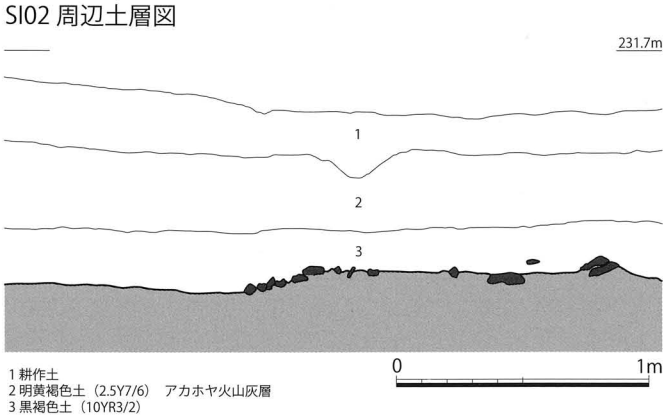
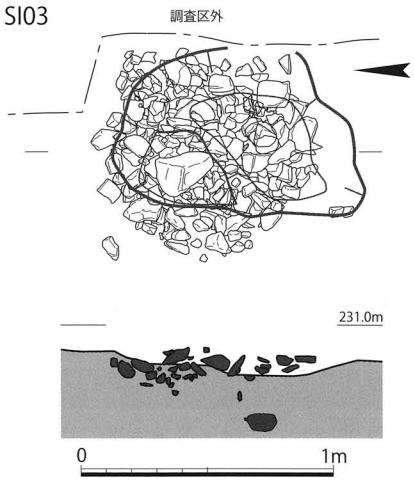


図 1-3　SI01 集石遺構（1/30）







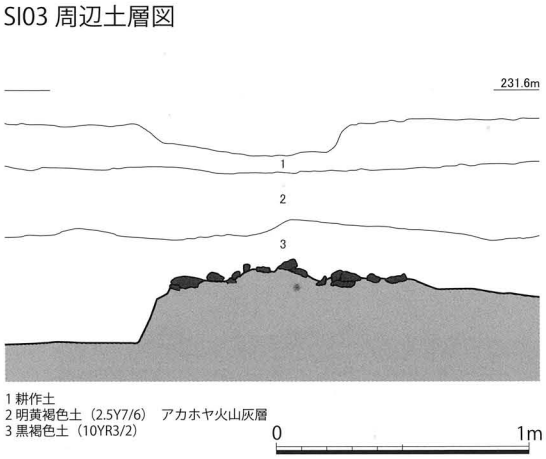


図 1-4　SI02・03 集石遺構（1/30）

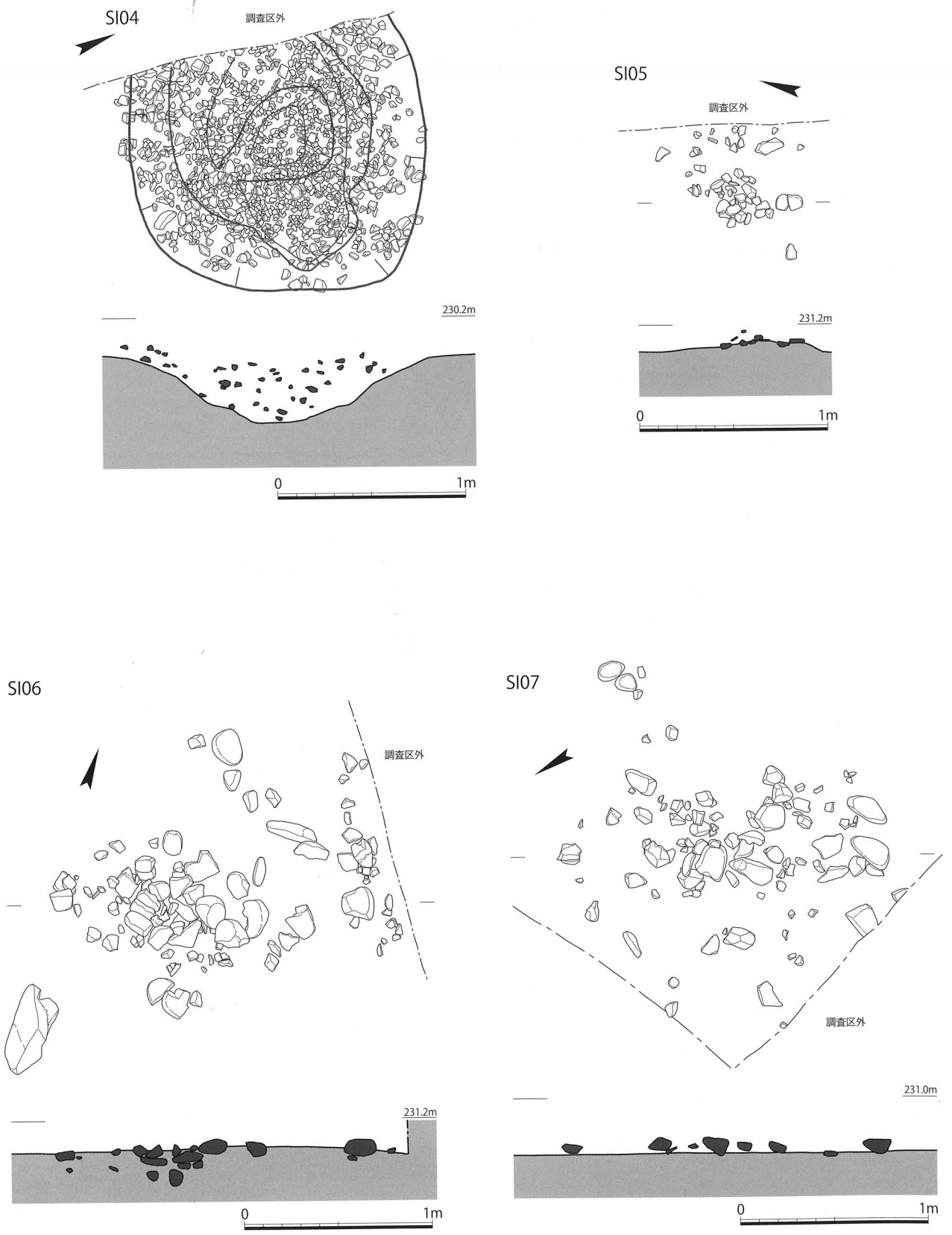
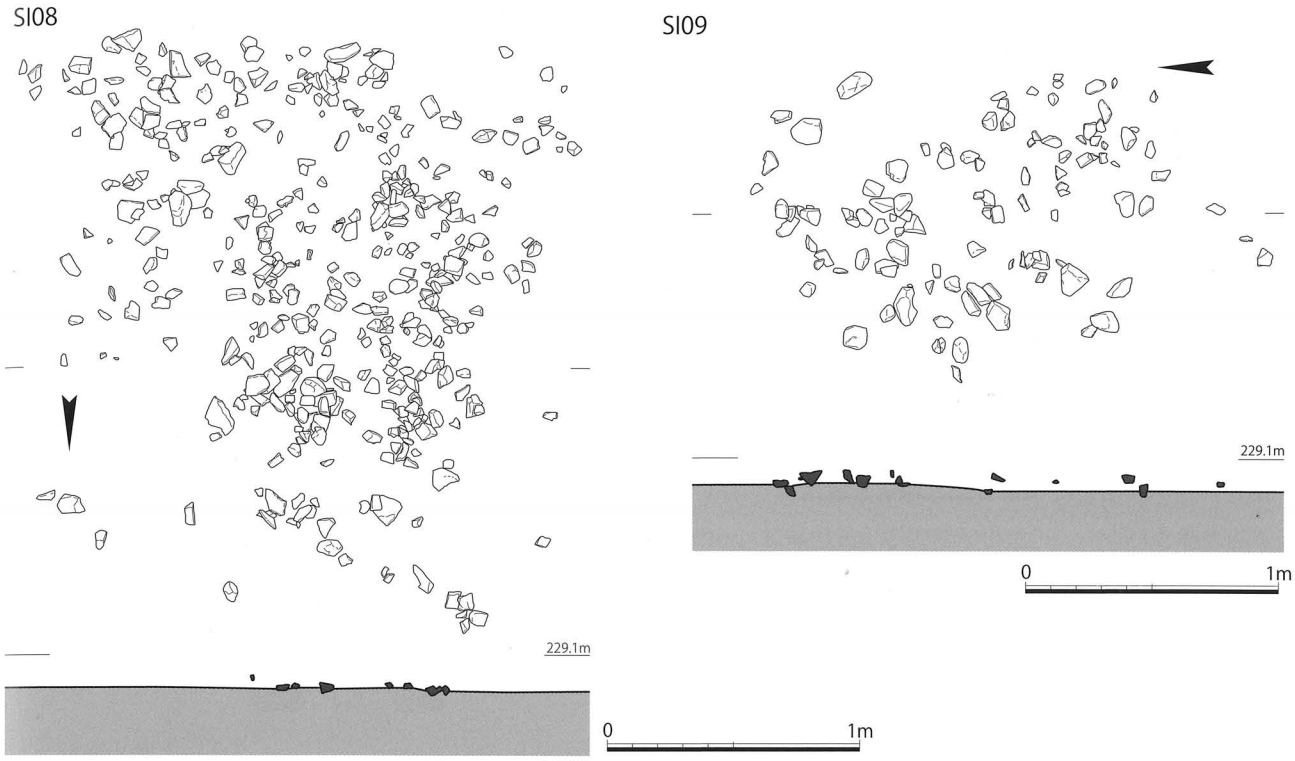


図 1-5　SI04・05・06・07 集石遺構（1/30）



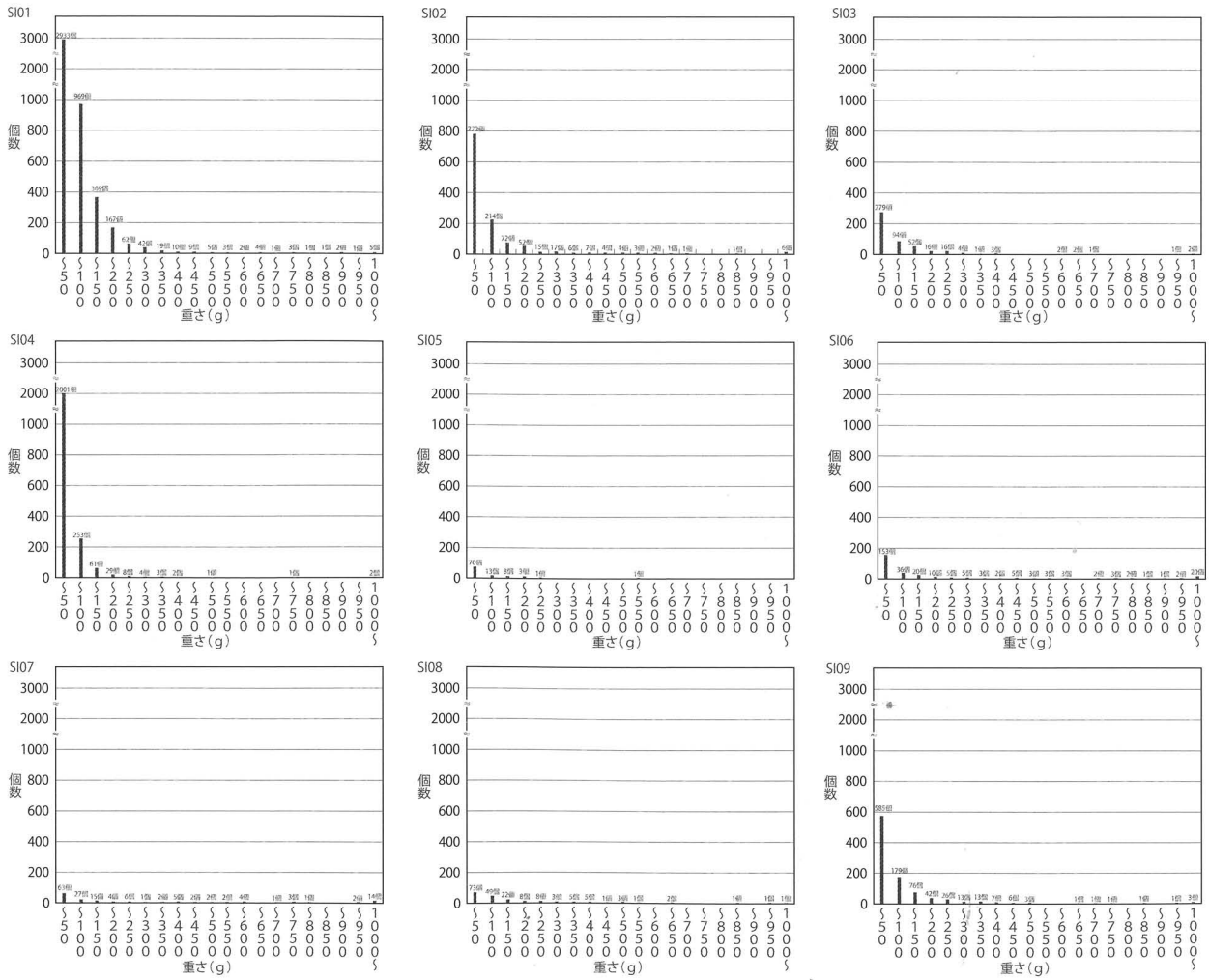


図 1-6　SI08・09 集石遺構（1/30）及び集石遺構構成礫集計

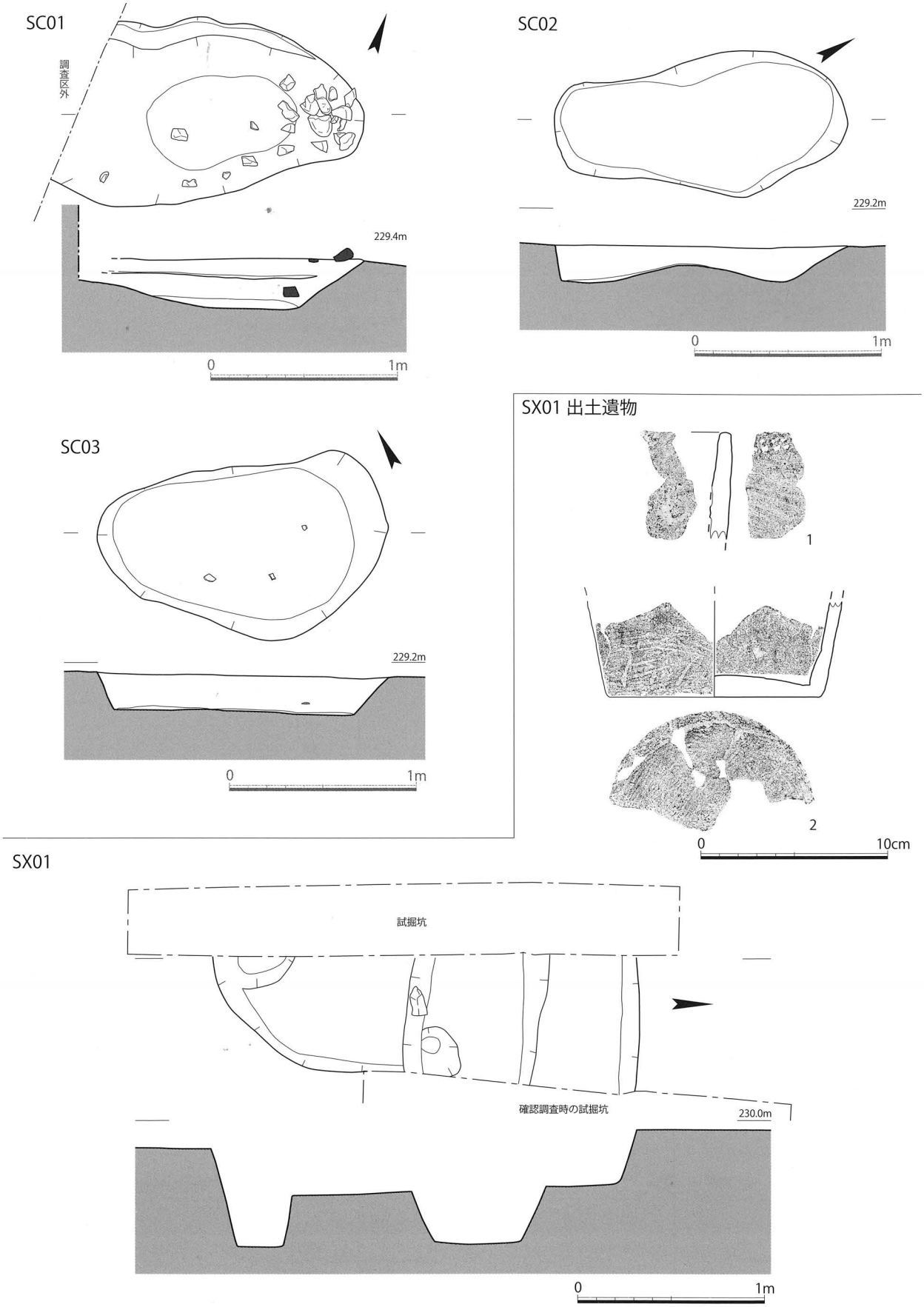


図 1-7　SC01・02・03 土坑及び SX01 不明遺構（1/30）・出土遺物（1/3）

いが、SI02 と同様に、この遺構を取り除いた下層（黒褐色土：基本土層Ⅲ層の下部）より、縄文時代早期前葉の前平式が出土しており、この時期以降の縄文時代早期の所産と考えられる。

SI04（図１－５）

１区の中央部 B4 区画に位置する。出土層位は、アカホヤ火山灰層（基本土層Ⅱ層）下位の黒褐色土層（基本土層Ⅲ層）中の下部で確認され、長軸 1.6m、短軸 1.4m+ α で、周囲には SI04 の構成礫と思われる礫が疎らに拡がる。この集石遺構には、1.6 × 1.3+ α m の円形の掘り込みが伴い、深さ 0.4m を測り、掘り込みの底部にまで、礫が密集して堆積していた。直接伴う遺物が出土していないが、検出面より前平式と思われる条痕土器が出土しており、縄文時代早期前葉頃の所産と考えられる。

SI05（図１－５）

１区の北端 B4 区画に位置する。出土層位は、アカホヤ火山灰層（基本土層Ⅱ層）下位の黒褐色土層（基本土層Ⅲ層）中の上部で確認され、構成する礫の範囲は長軸 0.9m、短軸 0.8m で規模は小さい。いずれの礫も熱を受けた痕跡が認められ、総数は 96 点、総重量は 4398.6g を測る。掘り込みは確認されていない。遺物が出土しておらず厳密な時期認定はできないが、集石を取り除いた下層（黒褐色土：基本土層Ⅲ層の下部）より、縄文時代早期前葉の前平式が出土しており、この時期以降の縄文時代早期の所産と考えられる。

SI06（図１－５）

１区の北端 B3 区画に位置する。出土層位は、アカホヤ火山灰層（基本土層Ⅱ層）下位の黒褐色土層（基本土層Ⅲ層）中の上部で確認され、礫の範囲は長軸 2.3m、短軸 1.5m で、SI07 と隣接する。明確な掘り込みは確認されていないが、検出面から 0.3m まで礫が重なり合うように出土しており、掘り込みを伴う可能性がある。礫の総数は 283 点を数え、総重量は 82488.9g を測る。礫１個当たりの平均重量は 291.4g と他の集石遺構に比べ、焼成による小礫化が進んでいない。ほとんどの礫には、熱を受けた痕跡が確認される。遺物が出土しておらず厳密な時期認定はできないが、隣接する SI02・03 などと同一面より検出されていることから縄文時代早期中葉から後葉の所産と考えられる。

SI07（図１－５）

１区の北端 B3 区画に位置する。出土層位は、アカホヤ火山灰層（基本土層Ⅱ層）下位の黒褐色土層（基本土層Ⅲ層）中の上部で確認され、礫の範囲は長軸 2.0m、短軸 1.8m で、SI06 と隣接する。掘り込みは確認されていない。礫の総数は 154 点を数え、総重量は 49145.3g を測る。礫１個当たりの平均重量は 319.1g と他の集石遺構に比べ、焼成による小礫化が進んでいない。ほとんどの礫には、熱を受けた痕跡が確認される。遺物が出土しておらず厳密な時期認定はできないが、隣接する SI02・03 などと同一面より検出されていることから前平式以降の縄文時代早期の所産と考えられる。

SI08（図１－６）

２区の南端 B16 区画に位置する。出土層位は、アカホヤ火山灰層（基本土層Ⅱ層）下位の黒褐色土層（基本土層Ⅲ層）で確認され、礫の範囲は長軸 2.5m、短軸 2.3m で、SI09 と隣接する。掘り込みは確認されていない。礫の総数は 183 点を数え、総重量は 21555g を測る。ほとんどの礫には、熱を受けた痕跡が確認される。遺物が出土しておらず厳密な時期認定はできないが、検出された層位から縄文時代早期の所産と考えられる。

SI09（図１－６）

２区の南端B16区画に位置する。出土層位は、アカホヤ火山灰層（基本土層Ⅱ層）下位の黒褐色土層（基本土層Ⅲ層）で確認され、礫の範囲は長軸2.0m、短軸1.3mで、SI08と隣接する。掘り込みは確認されていない。礫の総数は958点を数え、総重量は68922gを測る。ほとんどの礫には、熱を受けた痕跡が確認される。遺物が出土しておらず厳密な時期認定はできないが、検出された層位から縄文時代早期の所産と考えられる。

土坑

土坑は２区より３基確認され、いずれもアカホヤ火山灰（基本土層Ⅱ層）下位の褐色土層（基本土層Ⅳ層）上面で検出され、縄文時代早期の遺構と考えられる。

SC01（図１－７）

２区の中央部C14区画に位置する。検出面は、アカホヤ火山灰（基本土層Ⅱ層）下位の褐色土層（基本土層Ⅳ層）上面で確認され、平面形は長軸1.5m+α、短軸1.0mの不整楕円形で西側は調査区外へ延び、深さは0.3mを測る。土坑の東側部分には、熱を受けたと思われる礫が底部から上部にかけて出土した。遺物は出土していない。

SC02（図１－７）

２区の中央部C14区画に位置する。検出面は、アカホヤ火山灰（基本土層Ⅱ層）下位の褐色土層（基本土層Ⅳ層）上面で確認され、平面形は長軸1.6m、短軸0.8mの不整楕円形で、深さは0.2mを測る。遺物は縄文時代早期と思われる土器が数点出土したが、小片のため図示しなかった。

SC03（図１－７）

２区の中央部B14区画に位置する。検出面は、アカホヤ火山灰（基本土層Ⅱ層）下位の褐色土層（基本土層Ⅳ層）上面で確認され、平面形は長軸1.5m、短軸0.9mの不整楕円形で、深さは0.2mを測る。遺物は出土しなかった。

不明遺構

SX01（図１－７）

１区の南端B9区画に位置する。検出面は、アカホヤ火山灰（基本土層Ⅱ層）下位の褐色土層（基本土層Ⅳ層）上面で確認され、平面形は長軸2.3m、短軸0.7m+αで、東西が調査区外へと拡がるため形状は不明である。深さは0.6mを測る。遺物は縄文時代早期の岩本式の口縁部及び底部が出土した。

SX01出土遺物（図１－７）

１の口唇部には不明瞭ながら刻みが観察され、口縁部には貝刺突を施す。内外面ともに丁寧なナデが行われる。２は平底の底部で、内外面及び底部・内底部ともに丁寧なナデ調整が行われる。

包含層出土遺物

二原遺跡１区・２区出土土器（図１－８・９）

Ⅰ類（３）１点のみの出土で、直線気味に立ち上がる口縁部に小型の貝を利用した貝殻殻表圧痕文が観察される。

図 1-8　二原遺跡１区・２区出土遺物１（1/3）

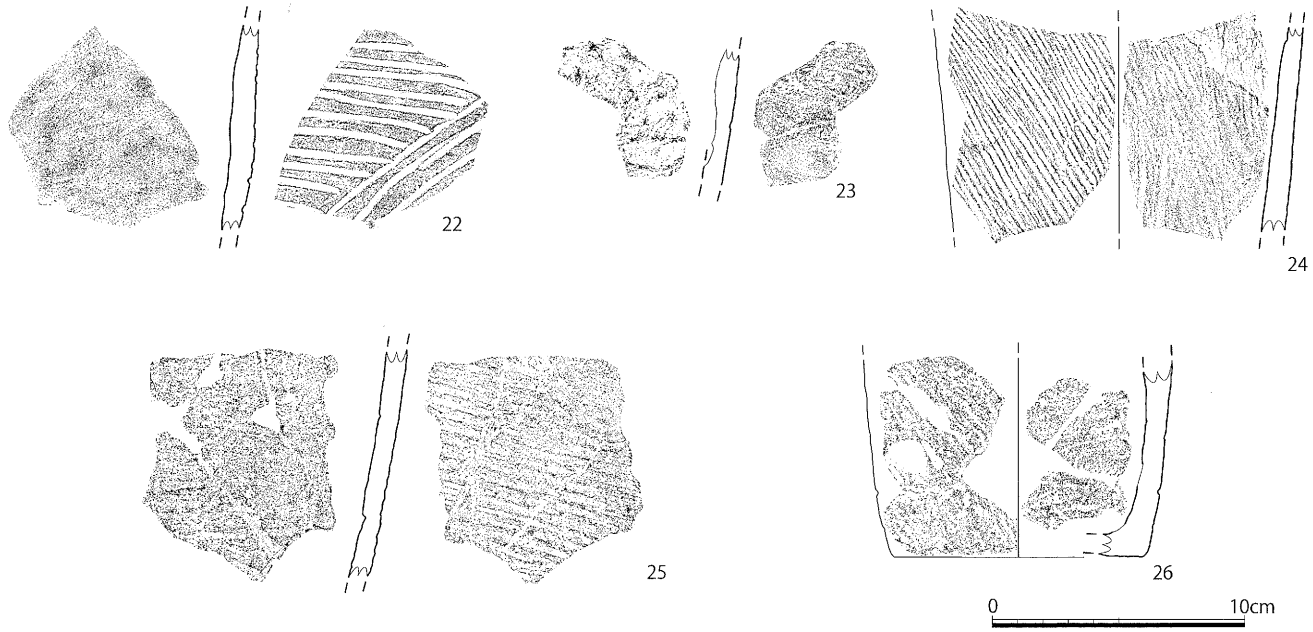


図 1-9　二原遺跡１区・２区出土遺物２（1/3）

Ⅱ類（４）口縁部外面及び口唇部に刺突を施文するもので、４の内外面には丁寧なナデ調整がなされる。口縁部内面は摘み上げるように口唇部に向かって斜めに傾斜する。

ⅢＡ類（５）口縁部外面に２段の刺突を行うもので、５の内外面は丁寧なナデ調整がなされる。

ⅢＢ類（６～13）口縁部外面に１段の刺突を施文するもの。６は器面が荒れており不鮮明であるが、口縁部を若干肥厚させている可能性がある。７～13は外面に貝殻条痕調整を顕著に残している。12は口唇部を平坦になるよう面取りが観察される。

Ⅳ類（14～16）押型文土器で、14・15は山形押型文を施文するもので、小破片のため傾きは不明である。16は楕円押型文である。

Ⅴ類（17・18）外反気味に立ち上がる口縁部から頸部にかけて数条の突帯を廻らし、その突帯部分を刻むものである。18は口唇部にも刺突が観察され、内面は丁寧なナデ調整がなされる。17・18は同一個体の可能性がある。

Ⅵ類（19～21）縄文を施文するもので、内面はナデ調整である。

Ⅶ類（22）外面に沈線文で施文するもので、数条の沈線を組み合わせた文様が施文されている。内面はナデ調整。

Ⅷ類（23）内外面ナデ調整のもの。

Ⅸ類（24・25）外面に貝殻条痕調整が顕著に認められる胴部破片を纏めた。ⅢＢ類の胴部破片と考えられる。

Ⅹ類（26）底部。26は外面に斜方向の貝殻条痕調整が認められる。

二原遺跡１区・２区出土石器（図１－10・11）

細石核（27）黒曜岩を用いた細石核で、アカホヤ火山灰層下位の縄文時代遺物包含層より１点出土した。

細石刃（28～31）アカホヤ火山灰層下位の縄文時代遺物包含層から出土したものである。黒曜岩製。

石鏃（32～38）32は正三角形を呈するもので、抉りはほとんど認められない。34～38は二等辺三角形を呈するもので、34～36・38は基部の抉りが浅いのに対して、37は深く抉る。

削器（39・40・43）39・40は剥片の縁辺部を加工したもので、ともに黒曜岩を用いている。43は砂岩の剥片の縁辺部を加工したものである。

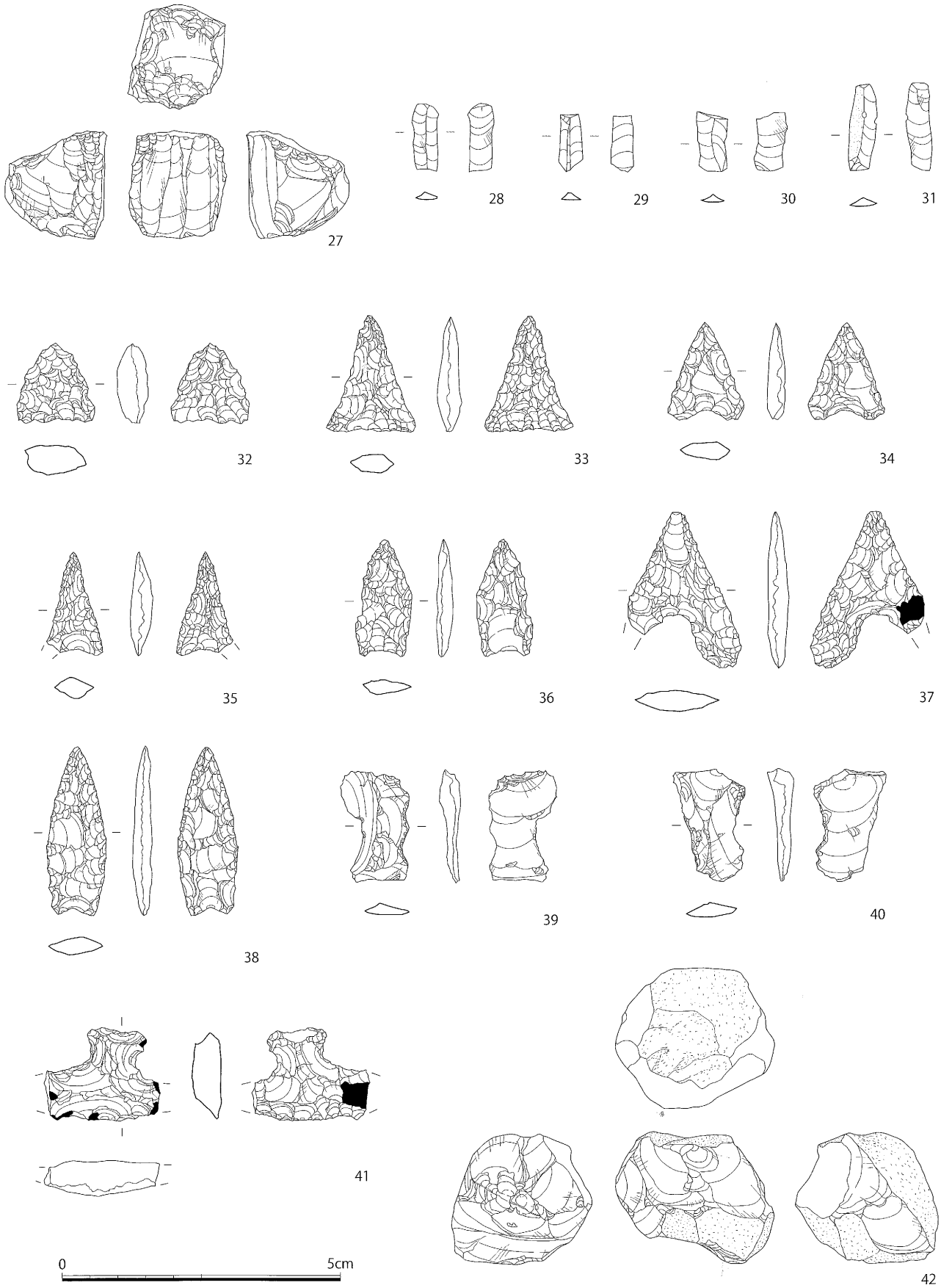


図 1-10　二原遺跡１区・２区出土遺物３（1/1）

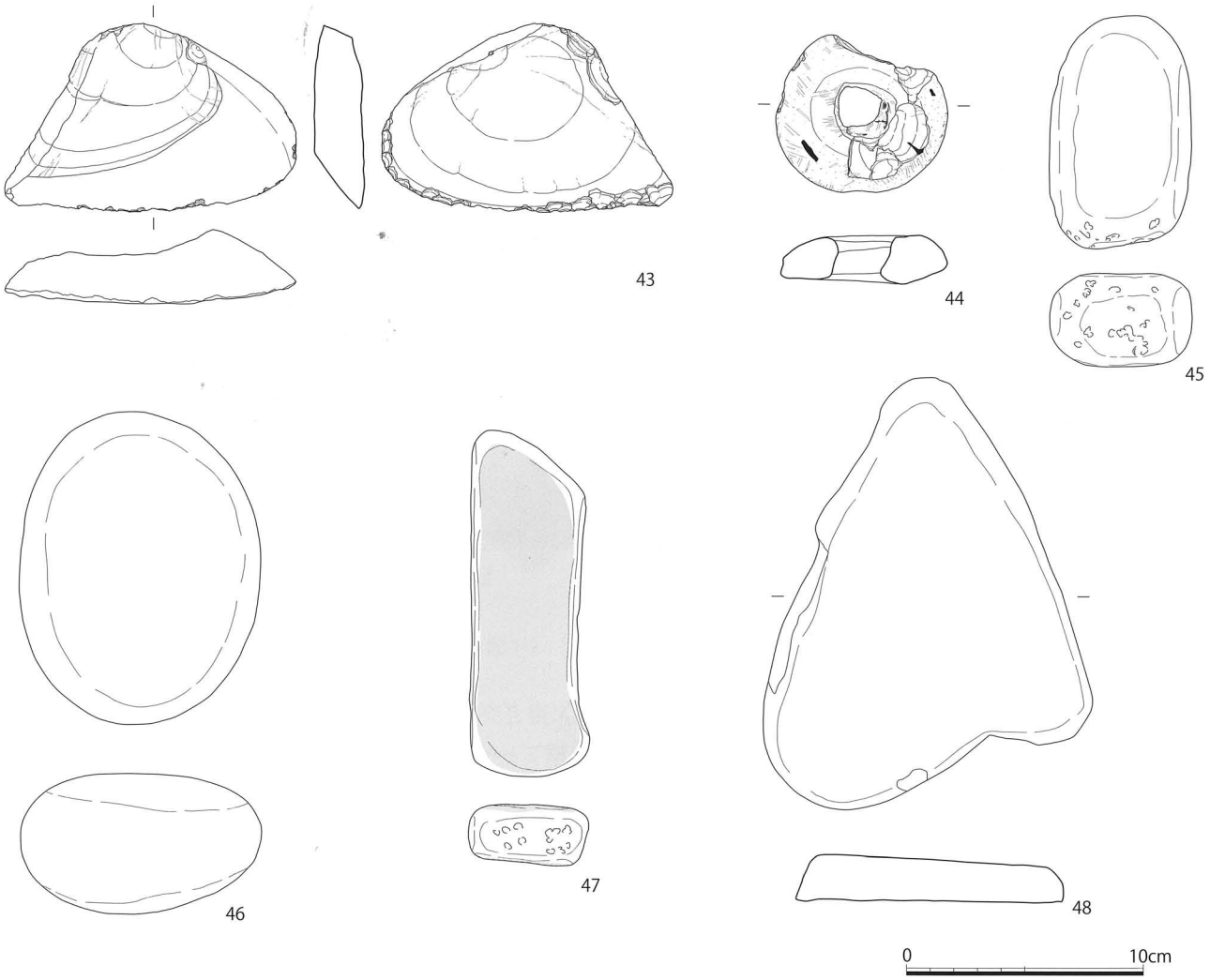


図 1-11　二原遺跡１区・２区出土遺物４（1/3）

石匙（41）41 は黒曜岩を用いた横長の石匙で、両端が欠損する。

石核（42）42 は打面展開を繰り返した黒曜岩の残核である。

環状石器（44）中央部の孔は人為的なものではないと思われ、縁辺部にも刃部を形成したような加工は見受けられない。図示した１点のみの出土である。

磨石・敲石（45 ～ 47）46 は磨石で両面に摩滅痕が観察される。47 は扁平な棒状の磨石で両面に摩滅痕が観

表 1-1　二原遺跡出土黒曜岩の分類

分類		特徴	推定産地
黒曜岩Ⅰ	a	透明度が高く、光に透かすと淡茶色、不純物をほとんど含まないものがある一方、細かな気泡状の不純物が含まれ、透明度が若干低いものも含まれる。	桑ノ木津留群: 分析201002・05・08・10に類似
	b	透明度が低く、細かな気泡状の不純物が多量に含まれ、光沢のある灰白色。	桑ノ木津留群:分析201003・07に類似
	c	透明度が低く、光に透かすと薄墨色を呈する。	桑ノ木津留群:分析201004・06・09に類似
黒曜岩Ⅱ		透明度が低く、不純物が多く含まれる。	大口日東群:分析201001に類似
黒曜岩Ⅲ		灰白色で透明度が低いもの。	姫島
黒曜岩Ⅳ		青灰色で不純物が少ないもの	西北九州

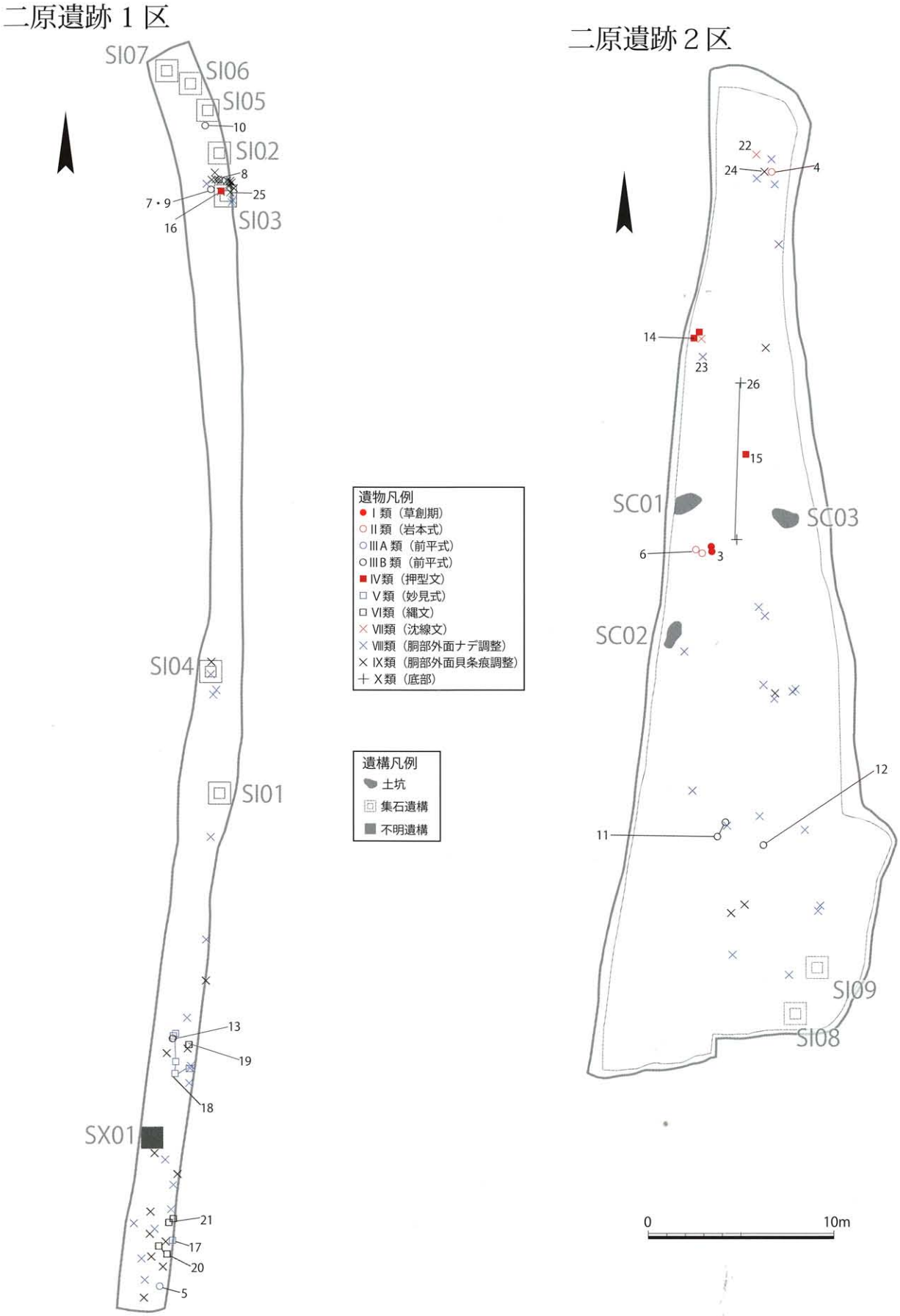


図 1-12　二原遺跡１区・２区縄文土器出土分布図（1/300）

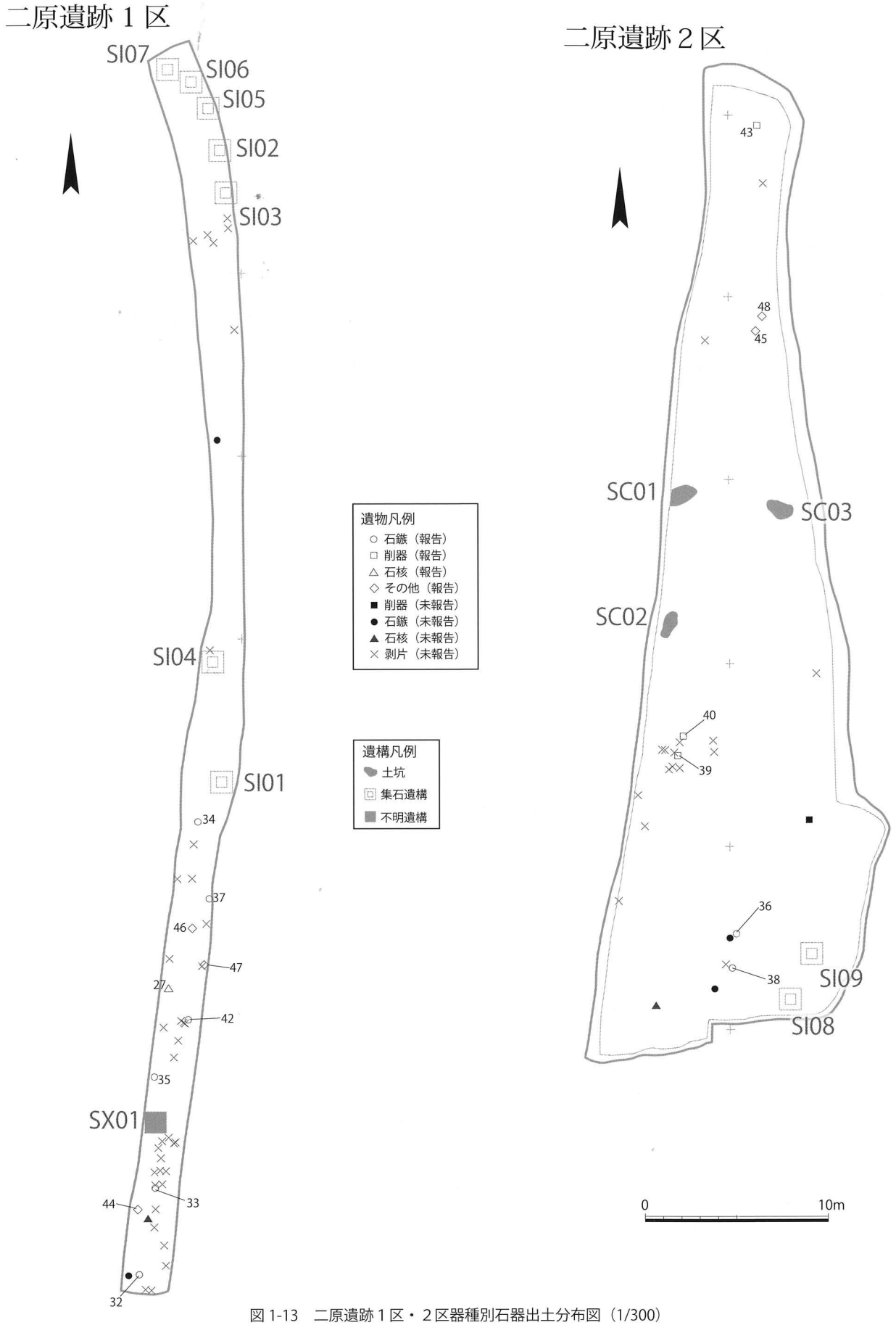


図 1-13　二原遺跡１区・２区器種別石器出土分布図（1/300）

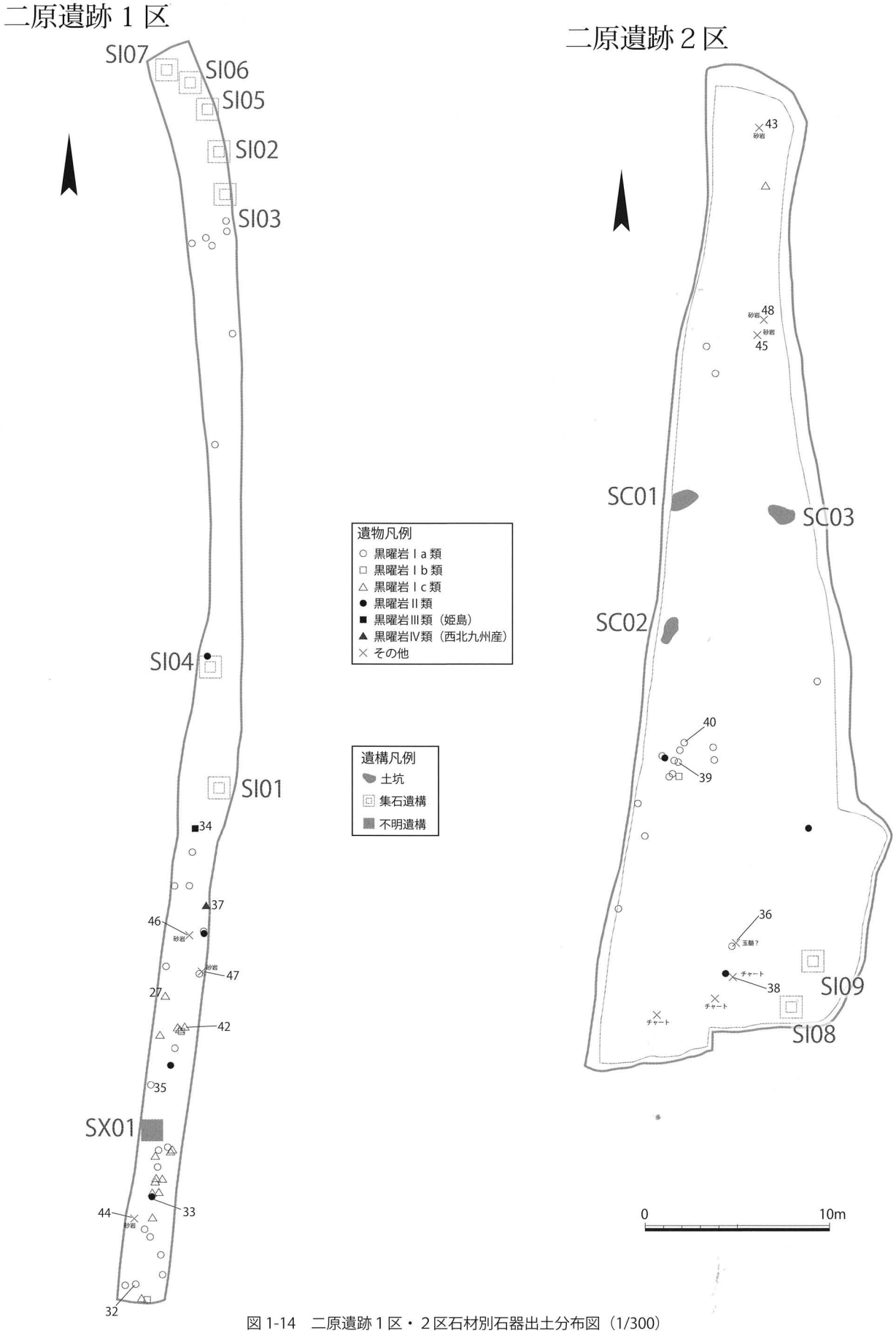


図 1-14　二原遺跡１区・２区石材別石器出土分布図（1/300）

察される他、小口側面には敲打痕のような細かな剥離も認められることから敲石として利用された可能性もある。

石皿（48）片面のみに摩滅痕が認められ、石皿として利用されたものと考えられる。

表 1-2　出土遺物観察表（土器）

遺物番号	出土位置	種別 器種	寸法(cm)			調整	色調	備考
			口径	底径	器高			
1	1区 SX01	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:ナデ→貝刺突 内:ナデ	外:10YR2/2黒褐 内:10YR2/2黒褐	－
2	1区 SX01	縄文土器 深鉢	－	11.6	－	外:貝条痕→ナデ 内:ナデ	外:5YR5/6明赤褐 内:7.5YR5/4にぶい褐	－
3	2区 C14	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:ナデ→貝刺突 内:ナデ	外:7.5YR6/4にぶい橙 内:5YR5/6明赤褐	－
4	2区 B12	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:ナデ→刺突 内:ナデ	外:10YR5/4にぶい黄褐 内:10YR5/4にぶい黄褐	－
5	1区 B10	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:ナデ→刺突 内:ナデ	外:5YR4/3にぶい赤褐 内:5YR4/4にぶい赤褐	－
6	2区 C14	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:ナデ→刺突 内:ナデ	外:5YR5/6明赤褐 内:5YR5/6明赤褐	－
7	1区 B4	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:貝条痕→刺突 内:剥離	外:10YR4/3にぶい黄褐 内:10YR5/6黄褐	－
8	1区 B4	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:貝条痕→刺突 内:貝条痕	外:7.5YR5/4にぶい褐 内:7.5YR5/4にぶい褐	－
9	1区 B4	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:貝条痕→刺突 内:貝条痕	外:5YR5/4にぶい赤褐 内:5YR5/6明赤褐	－
10	1区 B4	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:貝条痕→刺突 内:ナデ	外:7.5YR3/2黒褐 内:10YR6/4にぶい黄橙	－
11	2区 C16	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:貝条痕→貝刺突 内:ナデ	外:5YR5/4にぶい赤褐 内:5YR5/4にぶい赤褐	－
12	2区 B16	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:貝刺突→刺突 内:ナデ	外:10YR4/3にぶい黄褐 内:10YR4/2灰黄褐	－
13	1区 B9	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:貝条痕→刺突 内:剥離	外:10YR3/2黒褐 内:10YR4/2灰黄褐	－
14	2区 C13	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:山形押型文(横方向) 内:ナデ	外:7.5YR6/4にぶい橙 内:7.5YR6/4にぶい橙	－
15	2区 B13	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:山形押型文(縦方向) 内:ナデ	外:5YR5/4にぶい赤褐 内:10YR5/4にぶい黄褐	－
16	1区 B4	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:楕円押型文(横方向) 内:ナデ	外:5YR5/4にぶい赤褐 内:5YR4/4にぶい赤褐	－
17	1区 B10	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:ナデ→刻目突帯文 内:ナデ	外:10YR4/3にぶい黄褐 内:10YR4/2灰黄褐	－
18	1区 B9	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:ナデ→刻目突帯文 内:ナデ	外:10YR7/4にぶい黄橙 内:10YR6/4にぶい黄橙	－
19	1区 B9	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:縄文 内:ナデ	外:7.5YR6/4にぶい橙 内:7.5YR5/3にぶい褐	－
20	1区 B10	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:縄文 内:ナデ	外:7.5YR5/4にぶい褐 内:7.5YR3/2黒褐	－
21	1区 B10	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:縄文 内:ナデ	外:10YR6/4にぶい黄橙 内:10YR3/3暗褐	－
22	2区 B11	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:ナデ→沈線 内:ナデ	外:10YR6/3にぶい黄橙 内:10YR3/3暗褐	－
23	2区 C13	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:ナデ 内:ナデ	外:5YR6/6橙 内:5YR5/4にぶい赤褐	－
24	2区 B12	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:貝条痕 内:貝条痕→ナデ	外:7.5YR6/4にぶい橙 内:7.5YR5/4にぶい褐	－
25	1区 B4	縄文土器 深鉢	－	－	－	外:貝条痕 内:貝条痕→ナデ	外:10YR4/3にぶい黄褐 内:10YR5/4にぶい黄褐	－
26	2区 C13	縄文土器 深鉢	－	(9.8)	－	外:貝条痕→ナデ 内:ナデ	外:10YR6/4にぶい黄橙 内:10YR4/2灰黄褐	－

表 1-3　出土遺物観察表（石器）

遺物番号	出土位置	器種	石材	寸法（mm）			重量（g）	備考
				長さ	幅	厚さ		
27	1区 B8	細石核	黒曜岩	19.5	17.5	18.0	7.3	－
28	1区	細石刃	黒曜岩	11.0	4.5	1.2	0.1	－
29	1区	細石刃	黒曜岩	10.5	4.0	1.2	0.1	－
30	1区	細石刃	黒曜岩	10.5	6.0	1.5	0.1	－
31	1区	細石刃	黒曜岩	16.0	5.0	2.0	0.1	－
32	1区 B10	石鏃	黒曜岩	14.5	14.5	5.5	0.9	－
33	1区 B10	石鏃	黒曜岩	21.0	16.0	4.5	0.8	－
34	1区 B7	石鏃	黒曜岩	17.5	13.5	3.5	0.6	－
35	1区 B9	石鏃	黒曜岩	18.5	10.0	4.0	0.5	片脚部欠損
36	1区 B16	石鏃	玉髄	21.0	10.0	3.0	0.6	－
37	1区 B8	石鏃	黒曜岩	28.0	20.5	4.0	1.4	片脚部欠損
38	2区 B16	石鏃	チャート	30.5	11.0	3.5	1.1	－
39	2区 C15	削器	黒曜岩	20.0	12.0	4.0	0.6	－
40	2区 C15	削器	黒曜岩	20.0	12.5	4.5	0.8	－
41	2区 B12	石匙	黒曜岩	16.5	21.0	6.5	1.9	両端部欠損
42	1区 B9	石核	黒曜岩	23.5	28.5	25.5	16.1	風化著しい
43	2区 B12	削器	砂岩	80.0	122.5	31.5	240.0	－
44	1区 B10	環状石器	砂岩	73.5	67.5	21.0	90.0	－
45	2区 B13	敲石	砂岩	95.0	60.5	40.0	322.5	－
46	1区 B8	磨石	砂岩	133.0	100.0	60.0	1063.6	－
47	1区 B8	敲石・磨石	砂岩	143.5	49.5	25.0	321.7	－
48	2区 B13	石皿	砂岩	173.0	137.5	19.5	647.1	－

第３章　まとめ

今回の調査では、縄文時代早期の集石遺構が９基確認され、掘り込みの有無や構成礫の密集度の違いなどの形態差が観察されている（表 1-4）。集石遺構に伴う遺物が出土していないため、具体的な時期を限定するのは難しいが、１区の中央部で確認されたSI01・04は、黒褐色土層（基本土層Ⅲ層）中の下部で検出され、付近からは縄文時代早期前葉の前平式が出土している。これに対して、１区の北側で確認されたSI02・03・05・06・07は、黒褐色土層（基本土層Ⅲ層）中の上部で検出され、集石遺構を取り除いた黒褐色土層（基本土層Ⅲ層）中の下部より前平式が出土した。このことにより、１区で検出した７基の集石遺構の内、SI01・04は縄文時代早期前葉の前平式段階、それ以外に関しては、前平式段階以降の縄文時代早期の遺構であると考えられる。

遺物に関しては、２区の中央部より縄文時代草創期と考えられる貝殻表圧痕文を施す土器が出土した。小林市内ではこれまで縄文時代草創期の遺物は出土しておらず、今回の発掘調査により初めてその存在が確認された（註１）。縄文時代早期の遺物では、早期前葉の前平式の出土が多く主体を占めていた。ほとんどのものが平口縁であるが、13は波状口縁となる可能性がある。なお胴部に文様を施文するものや角筒土器は出土していない。石器に関しては、アカホヤ火山灰層下位の縄文時代遺物包含層中より、黒曜岩製の細石核や細石刃が出土している。この細石核（27）と縄文時代草創期土器（３）との分布は離れており、直接の関係性はないものと思われるが、付近に細石刃核を伴う集落遺跡が存在する可能性ある。剥片石器石材は黒曜岩製のものが多く、玉髄やチャートなども少量出土した。黒曜岩の産地に関しては、自然化学分析の結果を参考にすると、桑ノ木津留産が最も多く、姫島産や西北九州産の黒曜岩も確認された。

今回の二原遺跡１区・２区の発掘調査では、狭く限られた調査範囲であったが、縄文時代早期の集落遺構をはじめ、小林市において初例となる縄文時代草創期の土器が出土するなど多くの成果を得ることできた。

註１　平成22年３月に実施した小林市野尻町三ヶ野山字西原所在の西原遺跡の確認調査において、小林軽石層直上の黄褐色土層（小林軽石を多量に含む）より無文土器が出土している。出土層位から縄文時代草創期の可能性が高いものと考えられる。

参考文献
上杉彰紀・深野信之 2004「前平式土器および志風頭式土器の検討」『南九州縄文通信 No.15』南九州縄文研究会
山下大輔 2009「南九州の押型文土器編年に関する一考察」『南の縄文・地域文化論考上巻』南九州縄文研究会・新東晃一代表還暦記念論文集刊行会
山下大輔編 2010『狭ヶ久保第１遺跡』都城市文化財調査報告書第97集　都城市教育委員会

表 1-4　集石遺構観察表

遺構名	層位	集石規模（m）	礫個数（点）	礫総重量（g）	礫平均重量（g）	掘り込みの有無	備考
SI01	黒褐色土層下部	1.7×1.7	4608	294685.3	63.9	有	－
SI02	黒褐色土層上部	1.9×0.8+α	1177	80087.0	68.0	無	集石遺構を取り除いた下より前平式が出土
SI03	黒褐色土層上部	1.1×0.8	474	34897.1	73.6	有	集石遺構を取り除いた下より前平式が出土
SI04	黒褐色土層下部	1.6×1.4+α	2365	76633.1	32.4	有	周囲より前平式と思われる胴部片が出土
SI05	黒褐色土層上部	0.9×0.8	96	4398.6	45.8	無	集石遺構を取り除いた下より前平式が出土
SI06	黒褐色土層上部	2.3×1.8	283	82488.9	291.4	無	－
SI07	黒褐色土層上部	2.0×1.8	154	49145.3	319.1	無	－
SI08	黒褐色土層	2.5×2.3	183	21555.0	117.8	無	－
SI09	黒褐色土層	2.0×1.3	958	68922.0	71.9	無	－

第５章　二原地区発掘調査事業に伴う自然科学分析

株式会社 古環境研究所

第１節　蛍光Ｘ線分析（黒曜石の産地推定）

１　はじめに

物質にＸ線を照射すると、その物質を構成している元素に固有のエネルギー（蛍光Ｘ線）が放出され、この蛍光Ｘ線を分光して波長と強度を測定することで、物質に含まれる元素の種類と量を調べることができる。この方法を用いて、指標となる特定の元素の検出パターンの比較から石器（黒曜石など）の産地推定や土器（須恵器など）の生産地推定が行われている。この方法は、石器や土器などの貴重な考古遺物を非破壊で分析することができるが、表面が汚れたものや風化したものは正確な測定ができない。

２　試料

試料は、二原遺跡１区から出土した黒曜石 10 点（201001 ～ 201010）である。試料の詳細を表 1-5 に示す。

３　分析方法

（１）測定法

試料を超音波洗浄器で洗浄した後、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（EDX，セイコーインスツルメンツ卓上型蛍光Ｘ線分析計，SEA-2110L）を用いて測定を行った。測定の条件は、マイラーフィルム使用、測定時間 240 秒、照射径 10mm、管電圧 50kV、試料室内真空、管電流自動設定、Si(Li) 半導体検出器である。

測定元素は、Al（アルミニウム）、Si（ケイ素）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Ti（チタン）、Mn（マンガン）、Fe（鉄）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）、Y（イットリウム）、Zr（ジルコニウム）の 11 元素である。

（２）産地推定法

１）判別図法

蛍光Ｘ線強度から算出した産地推定の指標を二次元プロットし、原石と試料の領域を比較することにより産地推定を行う方法で、視覚的に確認できてわかりやすい方法である。図 1-15 は横軸に Rb 分率（Rb 強度× 100/ Ａ）、縦軸に Mn 強度× 100/Fe 強度、図 1-16 は横軸に Sr 分率（Sr 強度× 100/ Ａ）、縦軸に log(Fe 強度 /K 強度) をプロットしたものである。なお、Ａ＝ Rb 強度 +Sr 強度 +Y 強度 +Zr 強度である。

２）判別分析

判別図法による産地推定結果を確実にするため、多変量解析の判別分析を行った。これは、原石の各産地群の中心と個々の試料の類似度をマハラノビス距離として算出し、各産地に属する確率を計算する方法である。既知の産地のどれに類似しているかを判別する方法であり、未知の産地の判別はできない。

表 1-5 の第１候補産地と第２候補産地は、判別分析により推定された産地の第１候補と第２候補である。判別群は候補産地記号（判別図法による産地と通常は一致）、距離は試料から候補産地までのマハラノビス距離（値が小さいほど候補産地と類似性が高い）、確率は試料が候補産地に属する確率（１に近いほど類似性が高い）である。

４　結果および考察

二原遺跡１区から出土した黒曜石 10 点（201001 ～ 201010）について蛍光Ｘ線分析による産地推定を行った。その結果、201001 の１点は大口日東群、201002 ～ 201010 の９点は人吉桑ノ木津留群と推定された。なお、判別図２において 201003 と 201009 の２点が原石の人吉桑ノ木津留群（HYKK 群）より下にプロットされてい

るが、これは石器表面の風化によるものと思われる。

文献
望月明彦（1999）蛍光Ｘ線分析による綾瀬市報恩寺遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定．綾瀬市史研究，６，p.1-12.
望月明彦（2002）黒耀石分析科学の現状と展望．黒耀石文化研究 創刊号．明治大学人文科学研究所，p.95-102.
望月明彦（2004）用田大河内遺跡出土黒曜石の産地推定．用田大河内遺跡．かながわ考古学財団調査報告，167，p.511-517.

表 1-5　二原遺跡出土黒曜石の産地推定結果

分析番号	調査名	出土位置	判別図判別群	判別分析						推定産地
				第１候補産地			第２候補産地			
				判別群	距離	確率	判別群	距離	確率	
201001	二原遺跡１区	No.76	OGNT	OGNT	3.94	1.0000	KMSH	50.38	0	大口日東群
201002	二原遺跡１区	No.99	HYKK	HYKK	9.49	1.0000	AX	131.26	0	人吉桑ノ木津留群
201003	二原遺跡１区	No.105	HYKK	HYKK	7.50	1.0000	AX	184.82	0	人吉桑ノ木津留群
201004	二原遺跡１区	No.38	HYKK	HYKK	0.73	1.0000	AX	152.89	0	人吉桑ノ木津留群
201005	二原遺跡１区	黒褐色土	HYKK	HYKK	5.87	1.0000	AX	151.6	0	人吉桑ノ木津留群
201006	二原遺跡１区	黒褐色土	HYKK	HYKK	5.15	1.0000	AX	199.89	0	人吉桑ノ木津留群
201007	二原遺跡１区	黒褐色土	HYKK	HYKK	3.78	1.0000	AX	147.36	0	人吉桑ノ木津留群
201008	二原遺跡１区	黒褐色土	HYKK	HYKK	2.25	1.0000	AX	163.29	0	人吉桑ノ木津留群
201009	二原遺跡１区	黒褐色土	HYKK	HYKK	8.08	1.0000	AX	132.54	0	人吉桑ノ木津留群
201010	二原遺跡１区	黒褐色土	HYKK	HYKK	5.89	1.0000	AX	171.68	0	人吉桑ノ木津留群

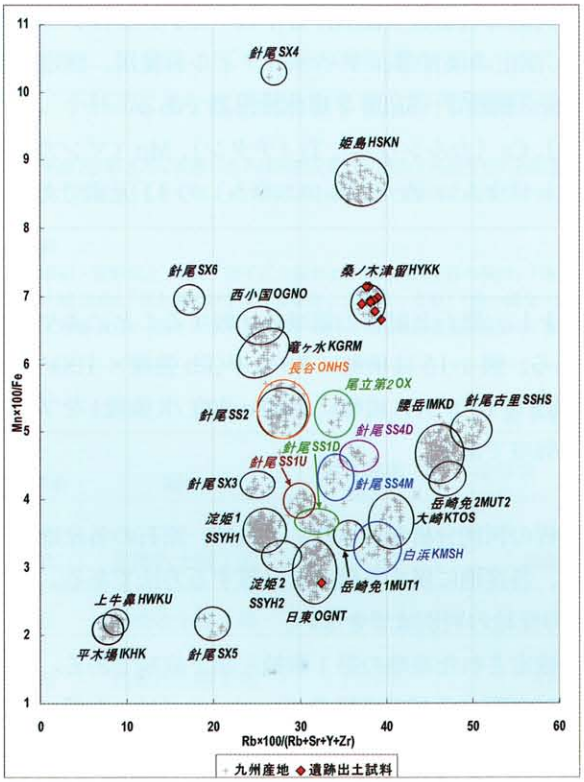


図 1-15　黒曜石産地の判別図１

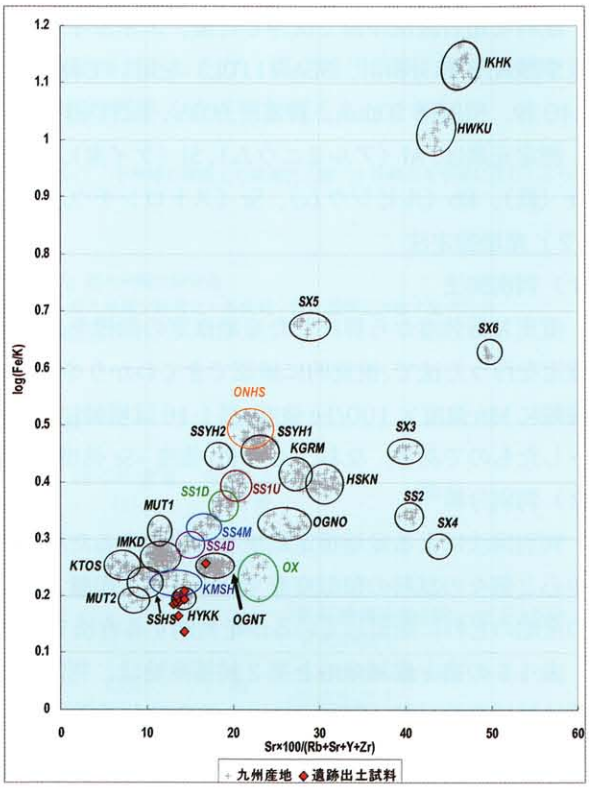


図 1-16　黒曜石産地の判別図２

図 1-17　分析試料

第２節　樹種同定

１　はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

２　試料

試料は、各遺構から採取された炭化材５点（201011 ～ 201015）である。試料の詳細を表 1-6 に示す。

３　方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって 50 ～ 1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４　結果

表 1-6 に結果を示し、以下に同定根拠となった特徴を記す。

コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus　ブナ科　写真１・２・３

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、１～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ 15 m、径 60cm ぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

５　所見

樹種同定の結果、各遺構から採取された炭化材５点は、いずれもコナラ属コナラ節と同定された。コナラ属コナラ節は、温帯を中心に広く分布する落葉高木で、日当たりの良い山野に生育する。ここでは、二次林要素でもあるコナラや暖温帯性のナラガシワなどが考えられる。

文献

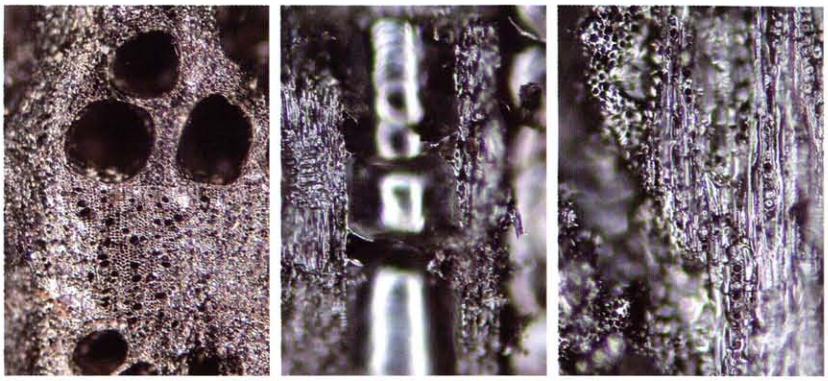
島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．文永堂出版，290p.

島地 謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．雄山閣，296p.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史．植生史研究特別１号．植生史研究会，242p.

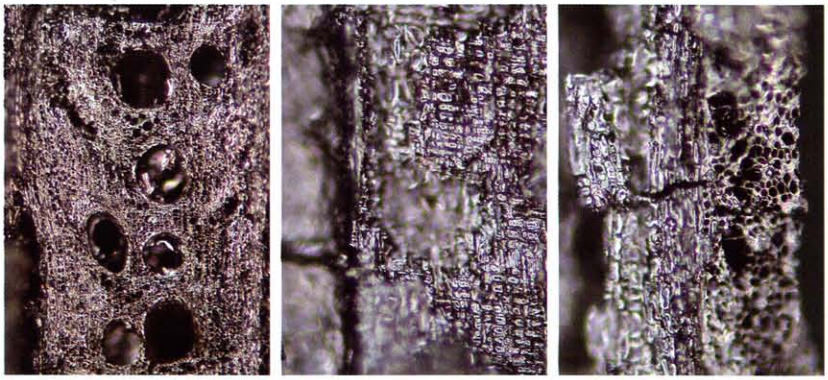
表 1-6　二原遺跡における樹種同定結果

分析番号	地区名	遺構	結果（学名／和名）	
201011	１区	SI01	*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節
201012	１区	SI02	*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節
201013	１区	SI04	*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節
201014	１区	SI04	*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節
201015	１区	SP01	*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節



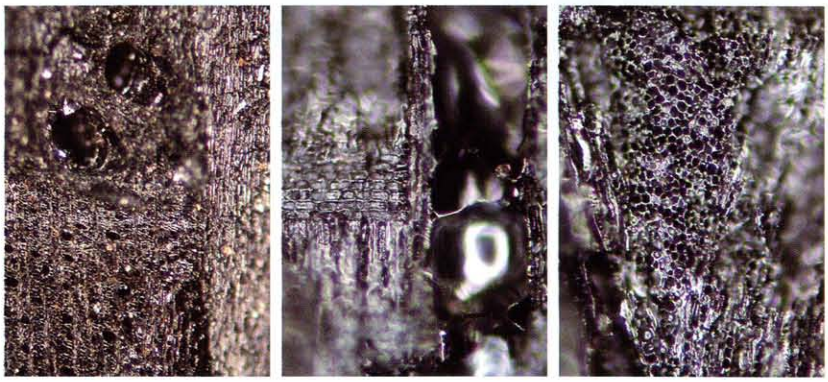
横断面 ▬▬▬ ：0.4mm　放射断面 ▬▬▬ ：0.2mm　接線断面 ▬▬▬ ：0.2mm

１．201012　コナラ属コナラ節



横断面 ▬▬▬ ：0.4mm　放射断面 ▬▬▬ ：0.2mm　接線断面 ▬▬▬ ：0.2mm

２．201014　コナラ属コナラ節



横断面 ▬▬▬ ：0.4mm　放射断面 ▬▬▬ ：0.2mm　接線断面 ▬▬▬ ：0.2mm

３．201015　コナラ属コナラ節

図 1-18　二原遺跡１区・２区における樹種同定顕微鏡写真

宮地遺跡１区

村立中央保育園改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

例言

1　本報告は、村立保育園改築工事に伴い須木村教育委員会が平成10年度に実施した小林市須木中原字上ノ原所在の宮地遺跡１区の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、須木村教育委員会が調査主体となり実施した。

3　宮地遺跡１区の現地調査から報告書作成までの作業に従事したものは下記のとおりである。

発掘作業：

遺構実測・写真撮影：柏野勝重
空中写真撮影：株式会社スカイサーベイ
遺物整理：内畠万喜　下野やす子
遺物実測：下野やす子　ジパング・サーベイ
製図（デジタルトレース）：内畠万喜
遺物写真撮影及び加工：内畠万喜

4　本報告の執筆については秦広之が行った。

5　遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を参考にした。

6　本報告で使用した方位は座標北である。

7　遺構の表記に使用した略号は以下のとおりである。

SA：竪穴住居

第１章　調査の経過

第１節　調査の経緯

平成９年度に須木村保健福祉課による村立中央保育園の移転工事が計画されていた。開発予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「宮地遺跡」内であったため、平成９年８月に宮崎県教育委員会が確認調査を実施した。調査の結果、開発予定地内において弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居や縄文時代早期の焼礫群が確認されたため、県教育委員会文化課と村教育委員会で遺跡の取り扱いについて協議を行い、村立保育園予定地 3,000㎡の内、工事によって破壊が予想される 1,500㎡について本発掘調査を実施することになった。

現地発掘調査は、村保健福祉課の委託を受けた村教育委員会が、平成 10 年５月６日から同年８月 12 日まで実施した。報告書刊行に向けた整理作業は、平成 22 年度に小林市教育委員会が実施した。

第２節　調査組織

平成 10 年度の組織（発掘調査実施年度）

調査主体　須木村教育委員会

調査協力　宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

須木村教育委員会

教育長　長嶺護

教育総務課長　田中宗史

生涯学習課長補佐　栗原一夫

調査担当　嘱託　柏野勝重（発掘調査）

平成 22 年度の組織（報告書刊行年度）

小林市教育委員会

教育長　佐藤勝美

社会教育課長　大角良弘

社会教育主幹　芹田直茂

天辰より子（文化財担当）

庶務担当　主査　加藤義和

調査担当　主任技師　増谷理絵

委託職員　秦広之

第２章　遺跡の立地と環境

宮地遺跡は蛇行を繰り返しながら南東へ流れる本庄川の左岸に位置し、大年嶽から派生する丘陵の裾野に立地する。標高は 384m 前後で、本庄川と遺跡の立地する丘陵の間には水田が広がる。遺跡から東 400m の位置には、10 基の地下式横穴墓を検出した上ノ原地下式横穴墓群、隣接して縄文時代早期の集石遺構や古墳時代の竪穴住居を検出した大年谷遺跡などが所在する。宮地遺跡から北 700m には、縄文時代から中世の遺物が出土した上床遺跡が存在し、南東 800m には古墳時代の土師器が出土した尾殿遺跡が所在する。なお尾殿遺跡から発見された完形の土師器壺は小林市指定文化財に指定されている。

参考文献

岩永哲夫編 1992『大年谷遺跡』須木村文化財調査報告書第１集　須木村教育委員会

須木村教育委員会編 1994『須木村遺跡詳細分布調査報告書』須木村文化財調査報告書第２集　須木村教育委員会

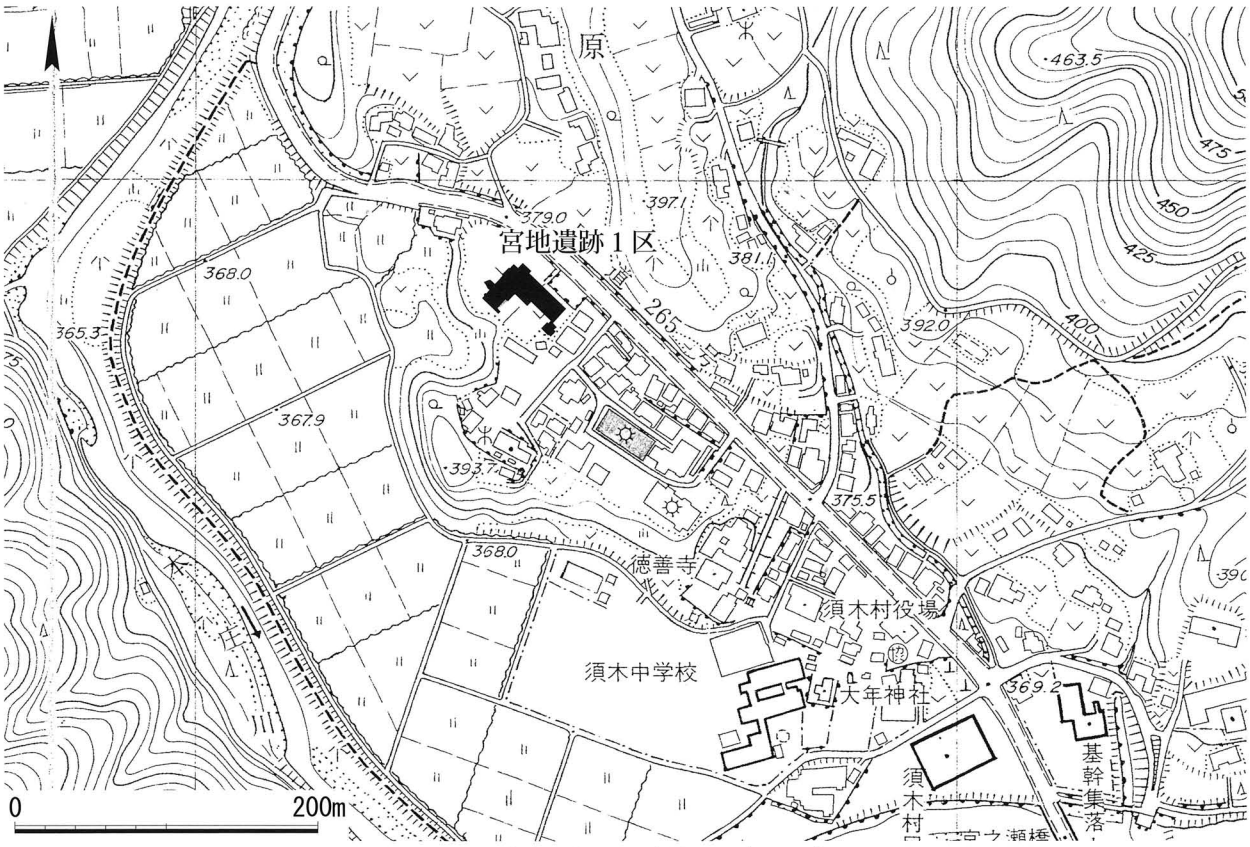


図 2-1　宮地遺跡１区調査位置図（1/5000）

第３章　宮地遺跡１区の成果

第１節　宮地遺跡１区の調査概要（図２－２・３）

宮地遺跡１区は、本庄川の左岸、標高 384m 前後に位置する。発掘調査は、平成 10 年５月７日に表土を重機によって掘削することから始め、同年８月 12 日まで約３ヶ月間実施した。遺構の検出はアカホヤ火山灰層上面で行い、弥生時代後期から古墳時代初頭と考えられる竪穴住居を４棟検出したほか、調査区西側では北西－南東方向へ延びる溝状遺構及び周辺より小穴を多数確認している。この溝状遺構及び小穴についての所産時期は不明である。アカホヤ火山灰層下位の調査では、茶褐色土層（第５層）より縄文時代早期の土器や石器が出土したほか、調査区西側では熱を受けたと思われる赤化した礫群が確認され、集石遺構を２基検出した。

第２節　第１面（アカホヤ火山灰層上面）の調査

竪穴住居

SA01（図２－４）

SA01 は調査区の南端に位置し、アカホヤ火山灰層上面で検出した。平面形は、長軸 5.3m、短軸 4.7m の方形で、深さ 0.5m を測る。床面は平坦で、中央部に主柱穴と考えられる小穴を２基確認した。遺物は縄文土器及び古墳時代前期の土師器が出土している。

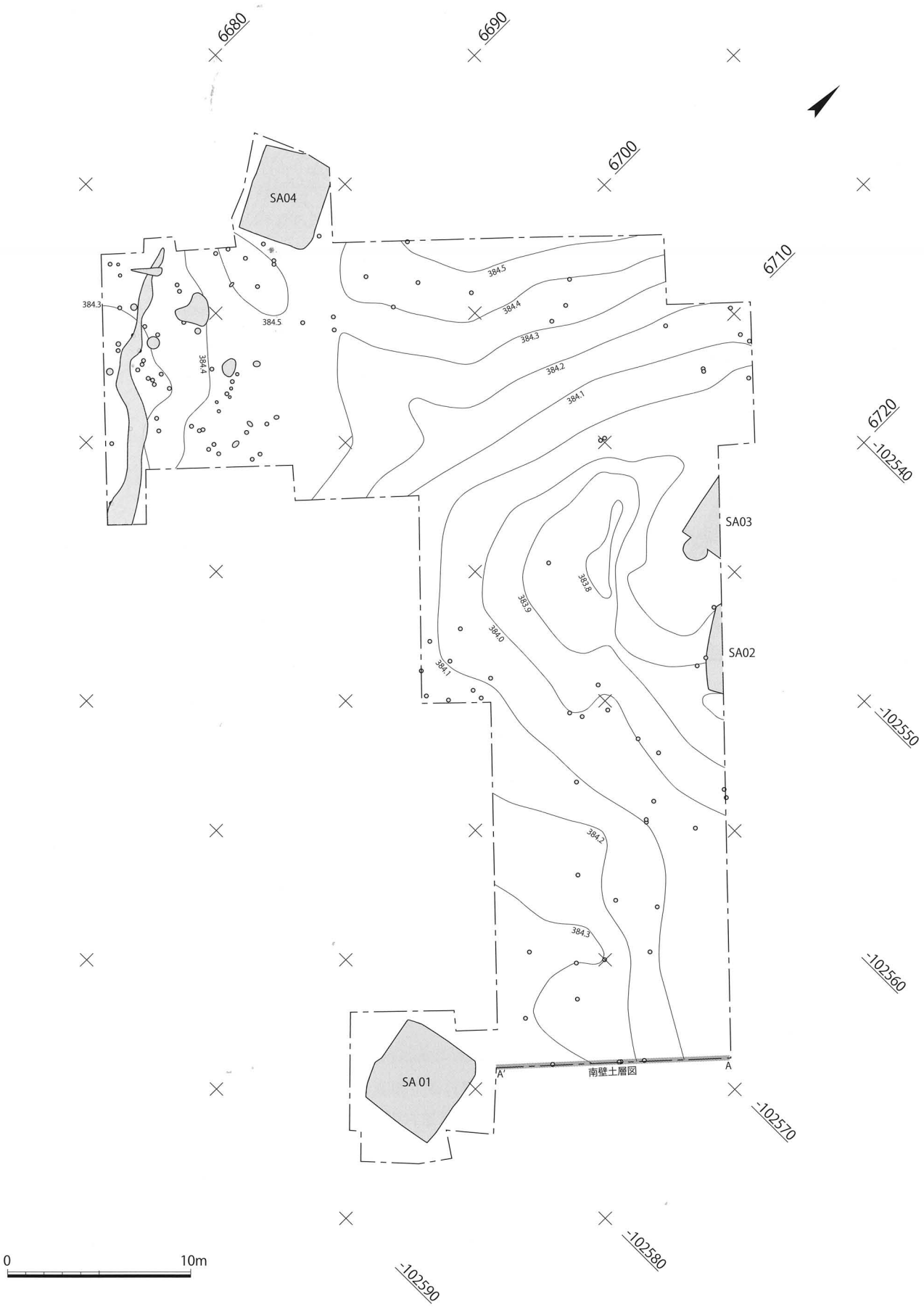


図 2-2　宮地遺跡１区遺構配置図（1/300）

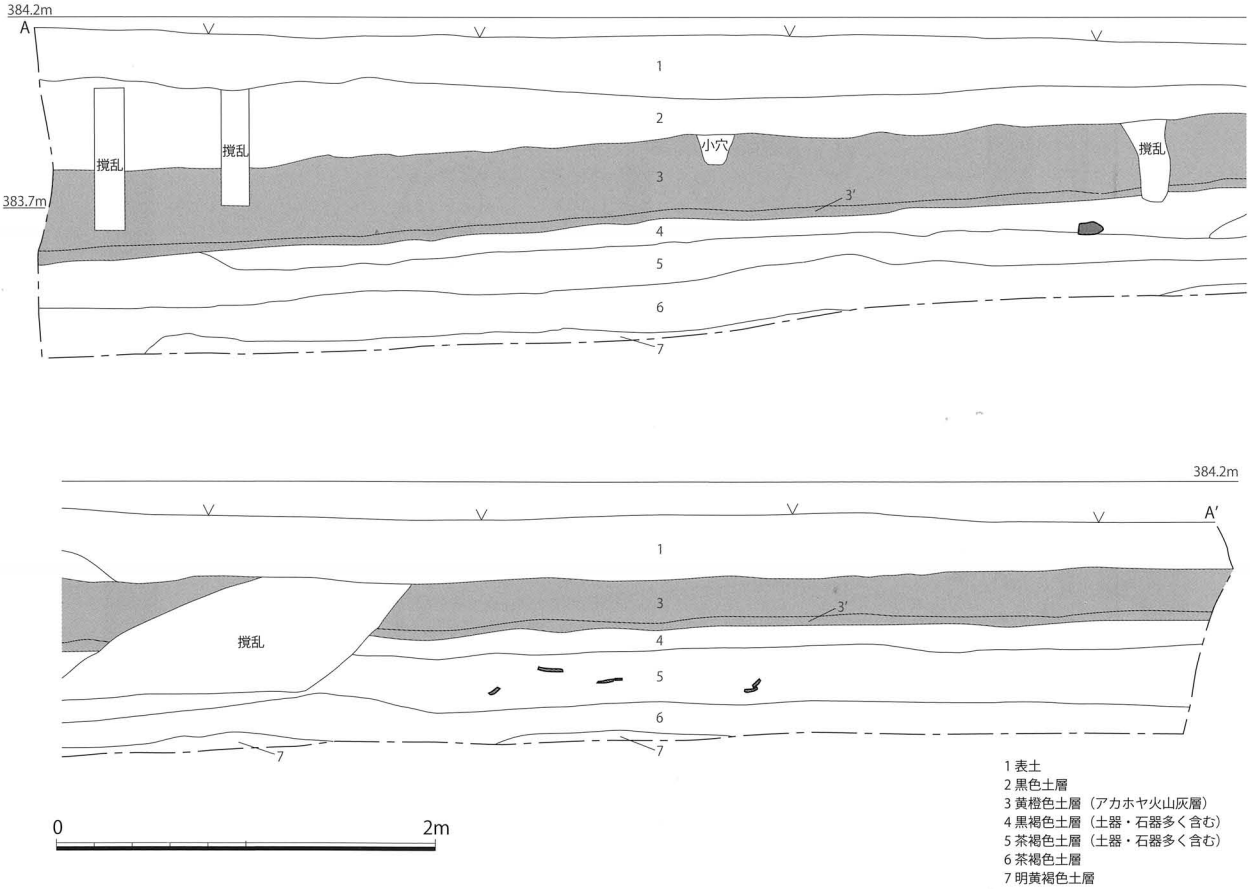


図 2-3　宮地遺跡１区南壁土層図（1/40）

SA01 出土遺物（図２－６）

１・２は口縁部付近に２条の刻目突帯文を持つ土器であり、縄文時代早期末の西之薗式の可能性がある。３・４は太目の突帯に刻みを施すもので、刻み部分には布目の痕跡が確認される。５は頸部から口縁部にかけて外反する甕で、胎土に２mm 程の砂礫を多く含む。６は口縁部が外反する甕。７は外反する口縁部の内外面に赤色顔料が塗布されている壺。８・９は高坏である。10・11 は平底の底部である。

SA02（図２－４）

SA02 は調査区の東端に位置し、アカホヤ火山灰層上面で検出した。平面形は大部分が調査区外へと延びるため判然としないが、方形もしくは不整方形となる可能性がある。確認できる部分では長軸 4.7m、深さ 0.2m を測る。遺物は、弥生土器及び古墳時代の土師器と思われる小片が少量出土しているが、図示できるものはなかった。

SA03（図２－５）

SA03 は調査区の東端に位置し、アカホヤ火山灰層上面で検出した。隣接する SA02 と同様に、この遺構の大部分が調査区外へと延び判然としないが、確認できる部分の長軸は 3.2m+ α、短軸は 2.3m+ α で、平面形は方形となる可能性が高い。深さは 0.2m を測る。床面は平坦で、西側の壁に沿って壁溝が確認された。なお、南側に 1.0 ～ 1.3m 程の円形の土坑が隣接するが、SA03 との関連は不明である。遺物は、弥生土器及び古墳時代の土師器と思われる小片が少量出土しているが、図示できるものはなかった。

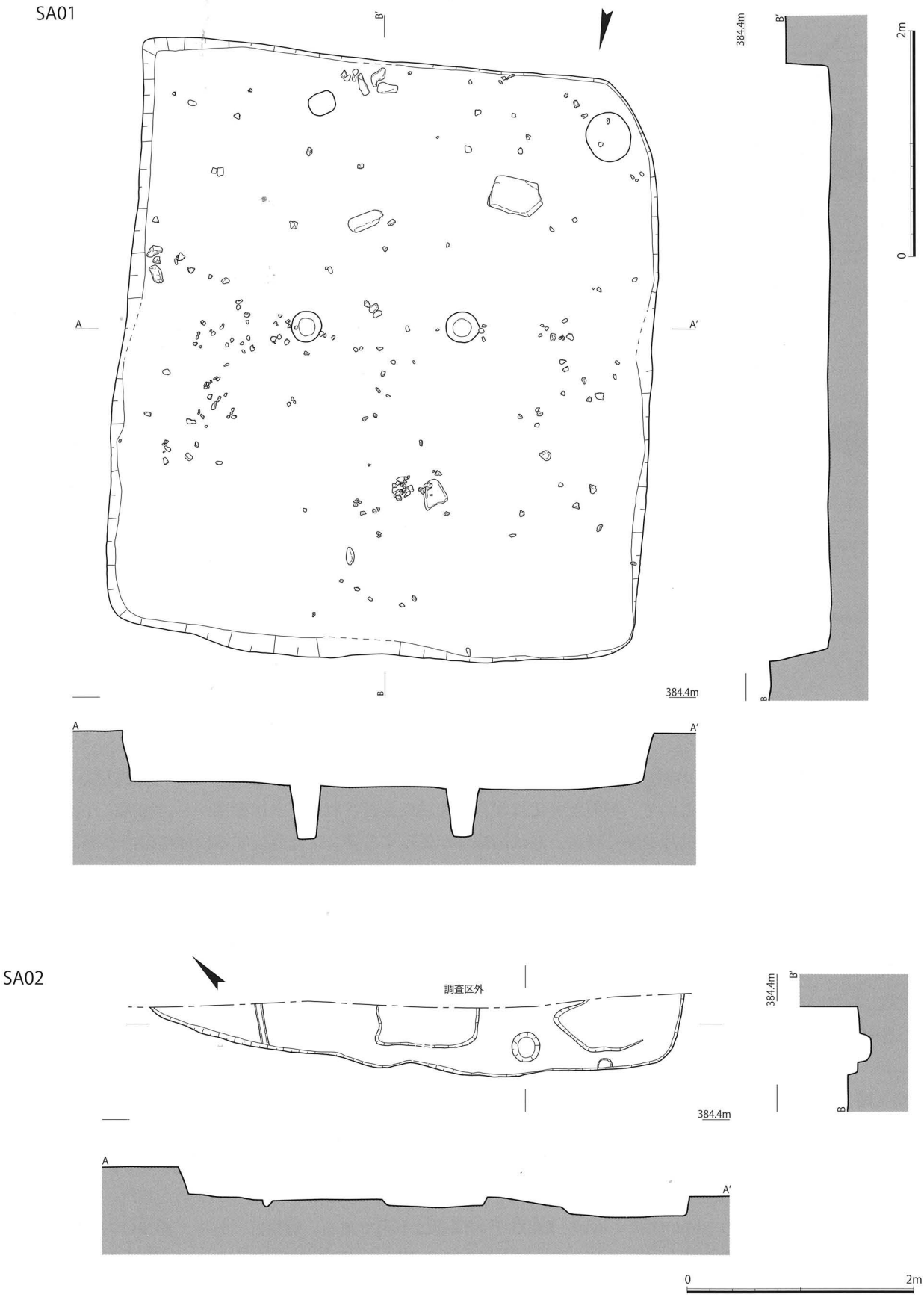
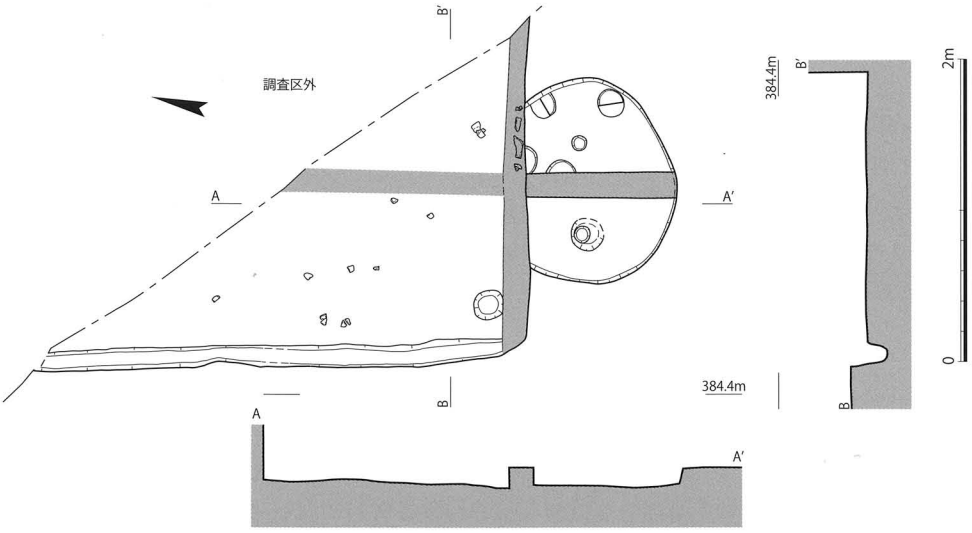


図 2-4　SA01・02 竪穴住居（1/50）

SA03



SA04

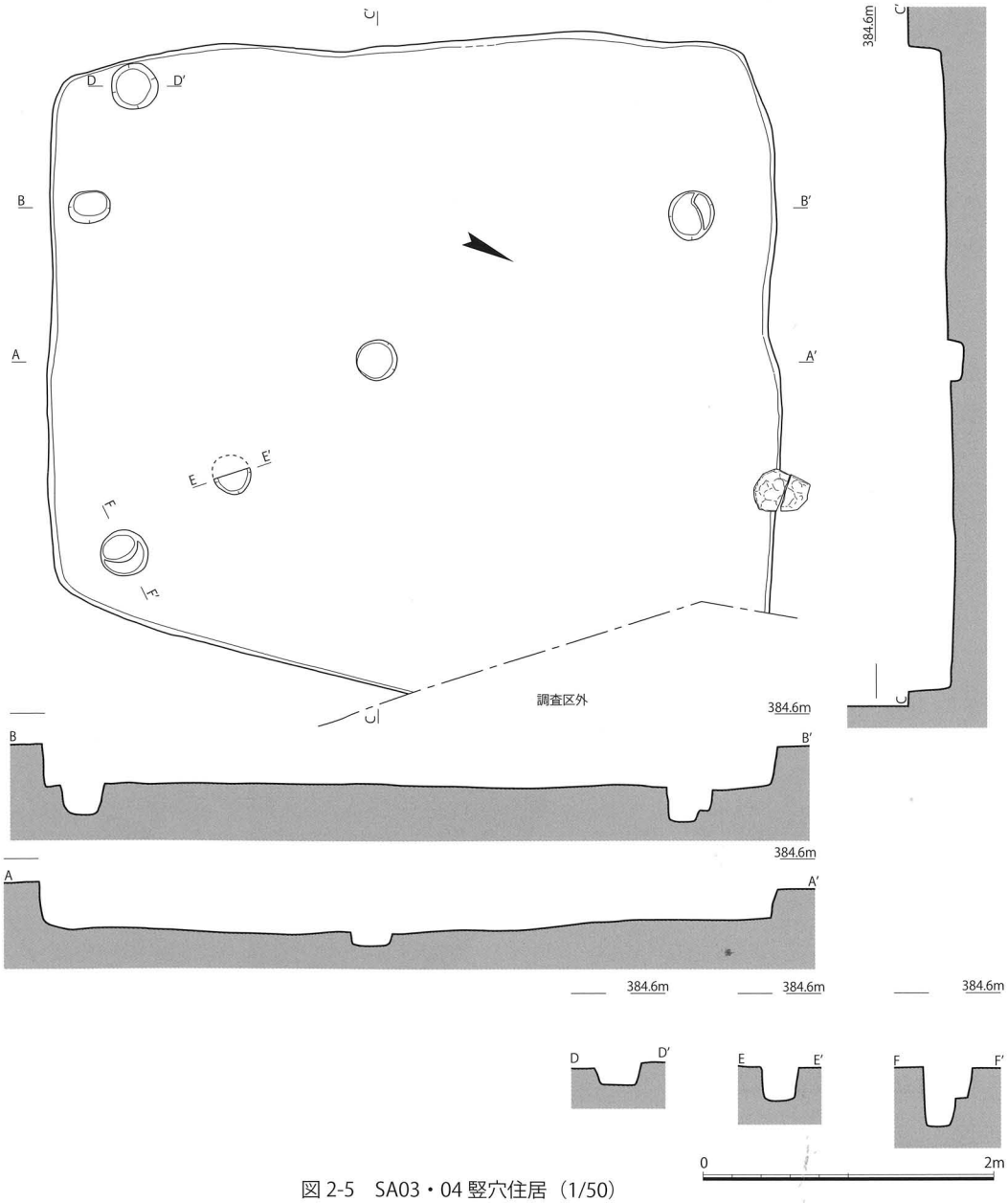
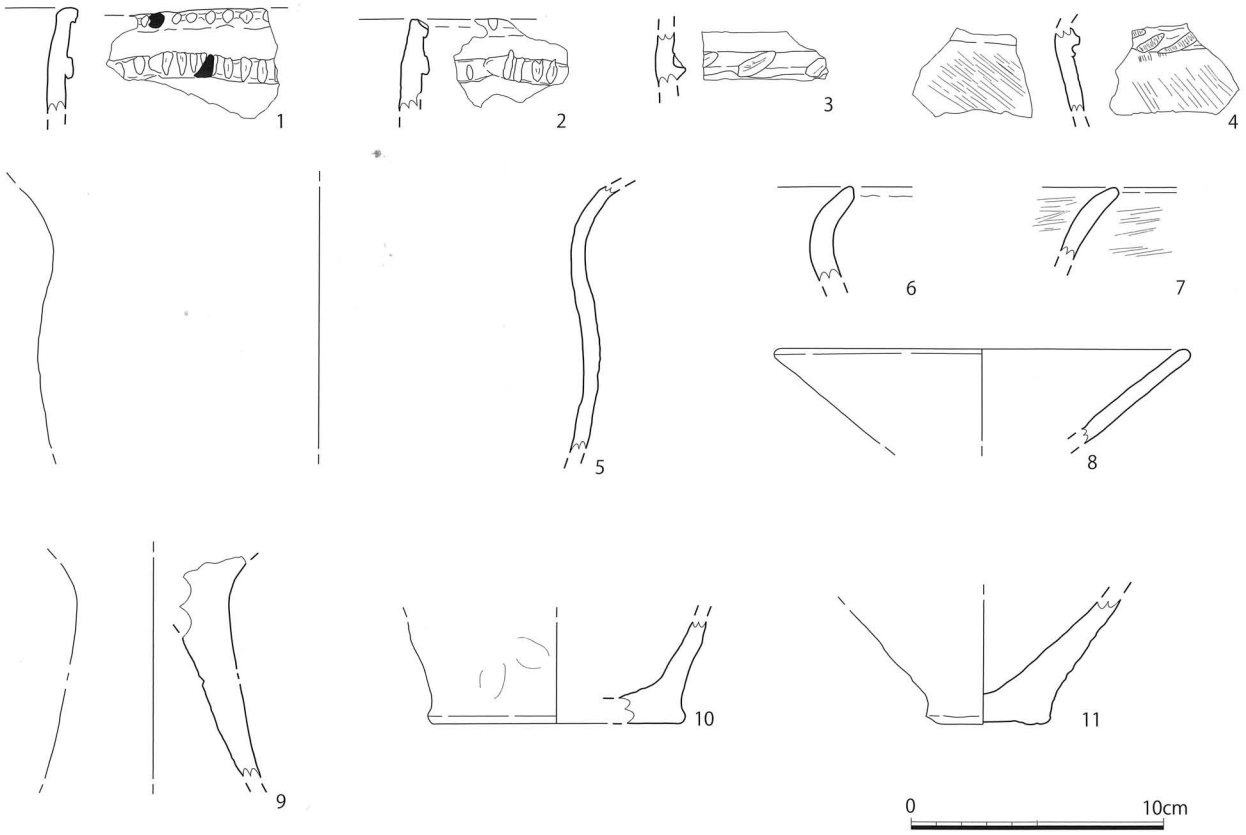


図 2-5　SA03・04 竪穴住居（1/50）

SA01



SA04

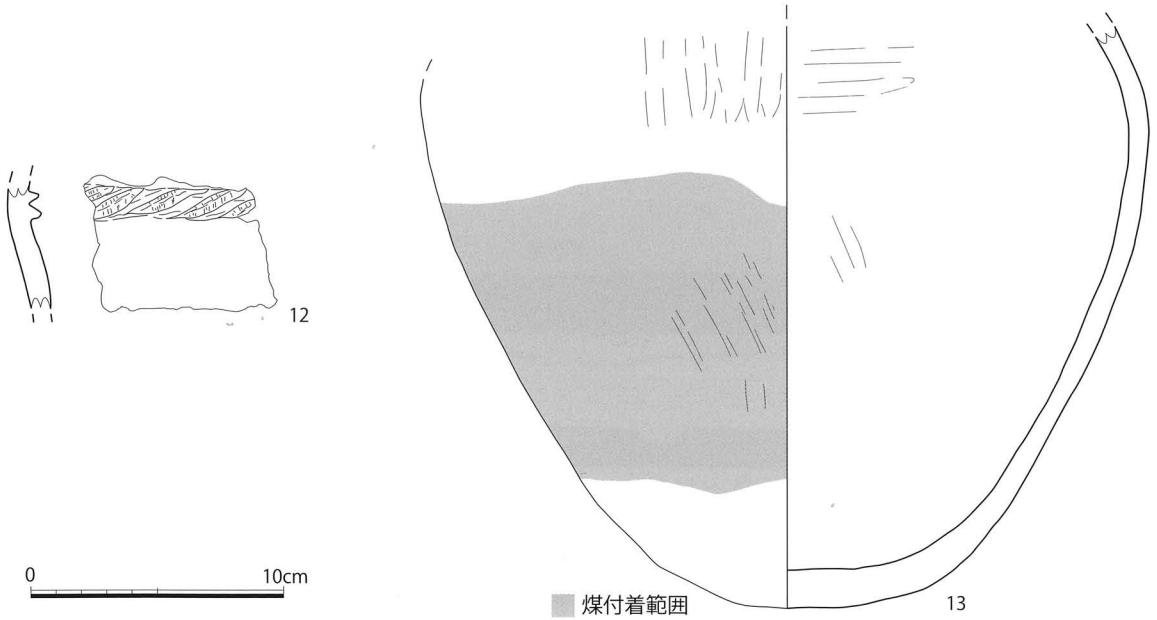


図 2-6　宮地遺跡 1 区 SA01・04 竪穴住居出土遺物（1/3）

SA04（図２－５）

SA04 は調査区の西端に位置し、アカホヤ火山灰層上面で検出した。平面形は長軸 5.0m、短軸 4.5m+ α の方形で、深さ 0.4m を測る。床面は平坦で、柱穴と考えられる小穴が５基確認され、中央部には床面を浅く掘り窪め設置された埋甕が確認された。埋土中には炭化物が多く含まれることから焼失住居の可能性が高く、その分布は SA04 中央部から遺構外の北東側周辺に顕著に認められ、倒壊方向を示している可能性がある。遺物は埋甕の他に古墳時代の土師器が少量出土した。

SA04 出土遺物（図２－６）

12 は太目の突帯に刻みを施すもので、刻目には布目痕が認められる。床面中央部の埋甕付近から出土した。13 は床面中央部から出土した埋甕である。頸部より上部を打ち欠いたように欠損している。内外面にはケズリの痕跡が観察される。胴部には煤が多量に付着しているが、底部及び胴部上半には煤は付着していない。底部は丸底である。

第３節　第２面（縄文時代遺物包含層）の調査

集石遺構

宮地遺跡１区からは、２基の集石遺構を検出している。いずれも調査区の西北隅で隣接する状態で確認された。この２基の集石遺構を確認した周辺には、集石遺構の構成礫と考えられる熱を受けた痕跡を持つ礫が多数出土しているが、確認された２基の集石遺構の他には有機的な纏まりを持つものを確認することはできなかった。

SI01（図２－７）

SI01 は、調査区の北西隅で確認され、長軸 1.2m、短軸 0.7m の範囲に集中する。礫の検出レベルはほぼ水平であり、一部に熱を受けたと考えられる赤化したものが認められた。この遺構の周辺からは縄文時代早期の山形押型文が出土した。

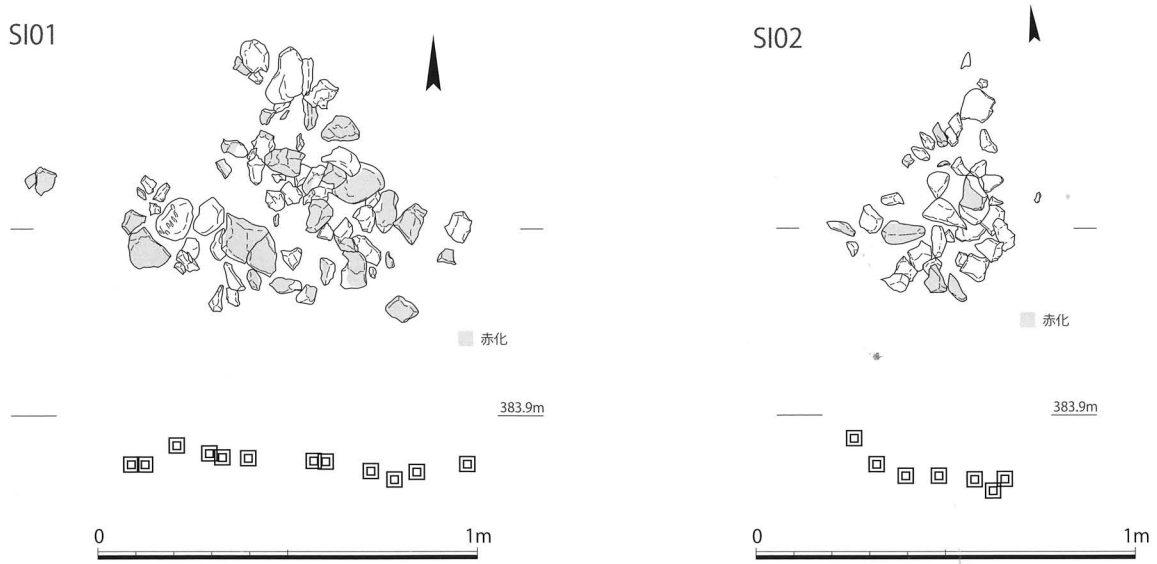


図 2-7　SI01・02 集石遺構（1/20）

SI02（図２－７）

SI02は、調査区の北西隅で確認され、0.5～0.6mの範囲に集中する小規模な集石遺構である。熱を受けたと考えられる赤化した礫も認められる。この遺構に伴う掘り込み及び遺物は確認されなかった。

縄文時代包含層出土遺物

土器（図２－８・９）

Ⅰ類（14～20）口縁部が外反し、胴部がやや張る器形になるものと思われる。外面及び口縁部内面には小粒の楕円押型文が施文され、外面は縦方向、口縁部内面には横方向に回転させる。調査区の西側に分布する。

Ⅱ類（21～29）山形押型文を施文するもの。21は口縁部が直行気味に立ち上がるもので、外面に小粒な山形押型文を施文するが、内面は無文である。22～24は口縁部が外反気味に立ち上がる器形で、外面は横方向の幅広な山形押型文、内面には縦方向の幅広な山形押型文を施文する。29は壺形の器形で、口縁部から頸部にかけて縦方向の山形押型文を施文する。出土位置は、壺形土器が調査区中央部、それ以外はSI01周辺から出土した。

Ⅲ類（30～32）縦方向に施文する幅広な山形押型文の一部が菱形状になるもの。30は胴部で「く」の字に屈曲する器形である。調査区東側で出土した。

Ⅳ類（33～39）微隆起線文で描出されるもので、33の外面は斜方向、内面口縁部は横方向に施文される。34は外面のみに斜方向に施文され、内面はナデ調整。39は「く」の字に屈曲する胴部で、屈曲部以下はナデ調整となる。調査区東側で出土した。

Ⅴ類（40・41）櫛歯状の工具で浅く施文された条線文を描出するもので、屈曲する胴部から口縁部に向かって大きく外反しながら立ち上がる器形になるものと思われる。40はやや蛇行気味に施文し、41は鋸歯状の文様を描出する。調査区東側から出土した。

Ⅵ類（42・43）縄文を施文する胴部破片で、調査区中央部より出土した。

Ⅶ類（44・45）変形撚糸文を施文するもの。

Ⅷ類（46）外反する口縁部に、数条の貝殻腹縁刺突文を施文する。調査区西側から出土した。

Ⅸ類（47）厚手の無文土器。調査区西側で出土した。

Ⅹ類（48）底部破片で、緩やかな上げ底となる。

石器（図２－９）

石鏃（49～54）49～51は正三角形に近いもので、基部の抉りは浅い。51はやや湾曲気味もしくは五角形気味に縁辺部を形成する。52～54は二等辺三角形に近い形状で、基部の抉りは深い。53は縁辺部を鋸歯状に形成する。

削器（55）黒曜岩の剥片の縁辺部を加工して形成したもの。

異形石器（56）白色のチャート剥片の縁辺部を加工して形成され、上端は丸みを帯び、基部には抉りを入れて脚部を作り出す。トロトロ石器と呼称される資料で、調査区西側から１点のみ出土した。

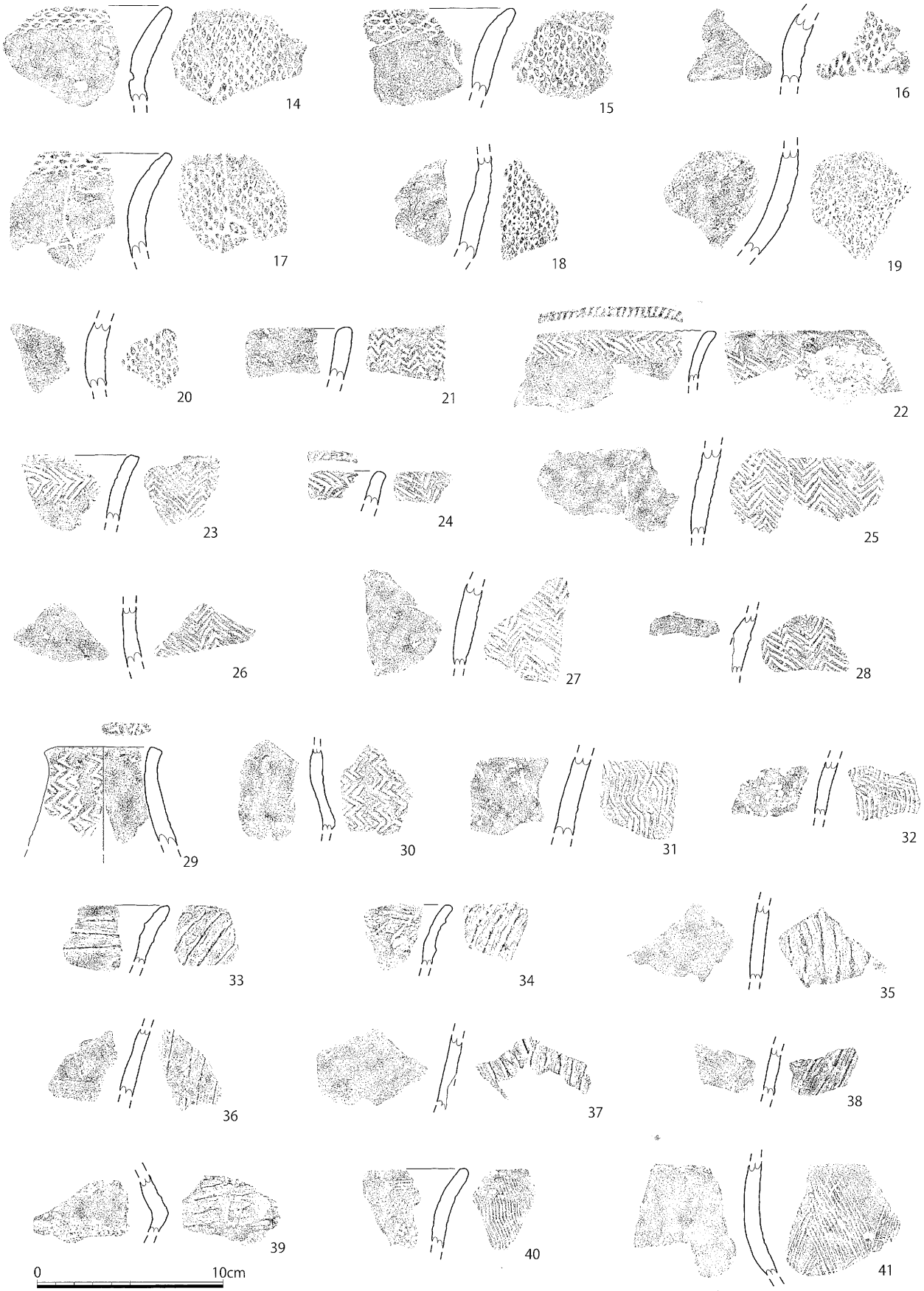
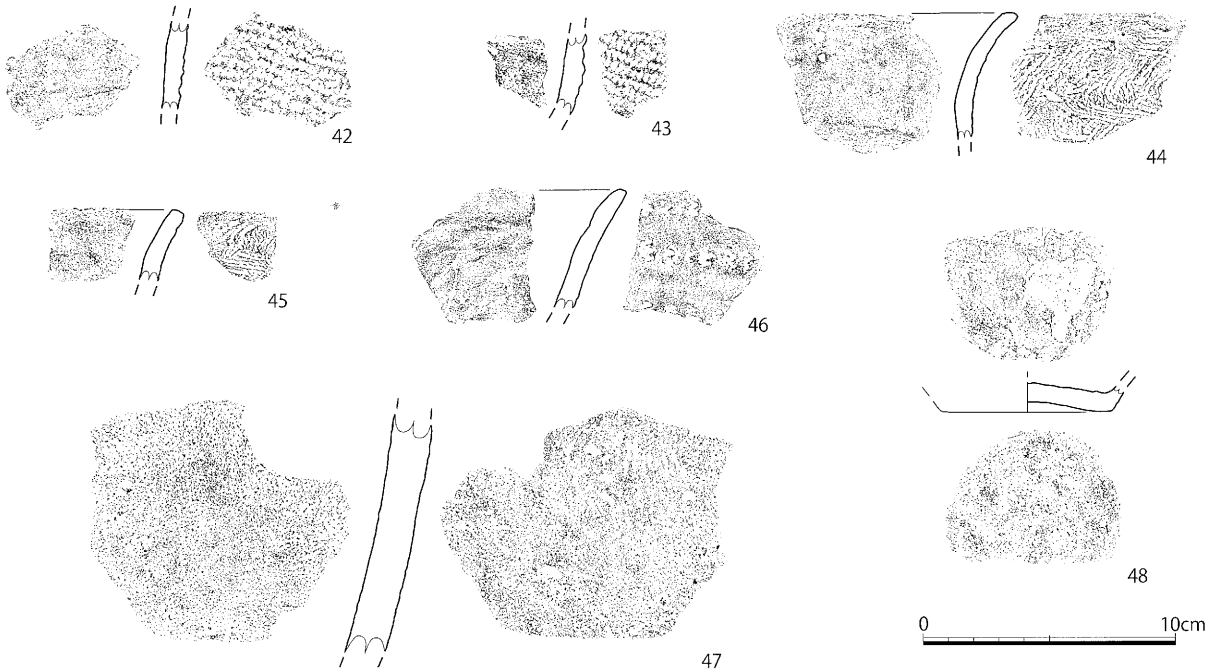


図 2-8　縄文時代包含層出土遺物 1 （1/3）



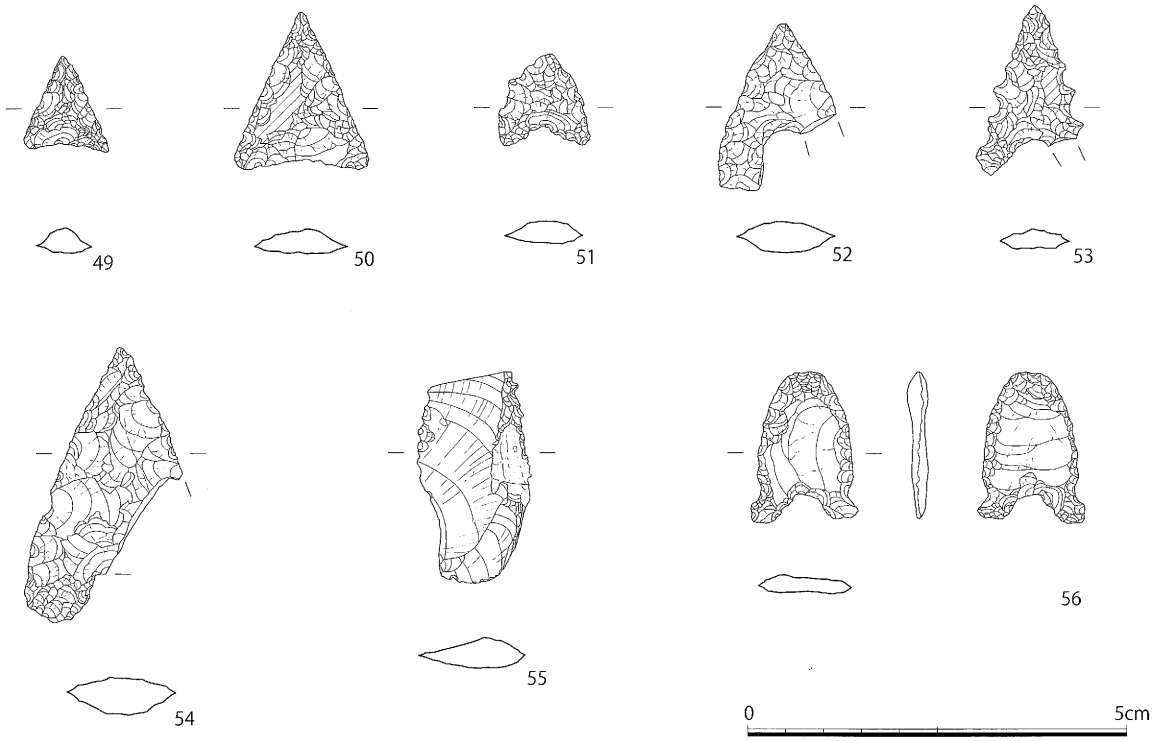


図 2-9　縄文時代包含層出土遺物２（42 ～ 48：1/3　49 ～ 56：1/1）

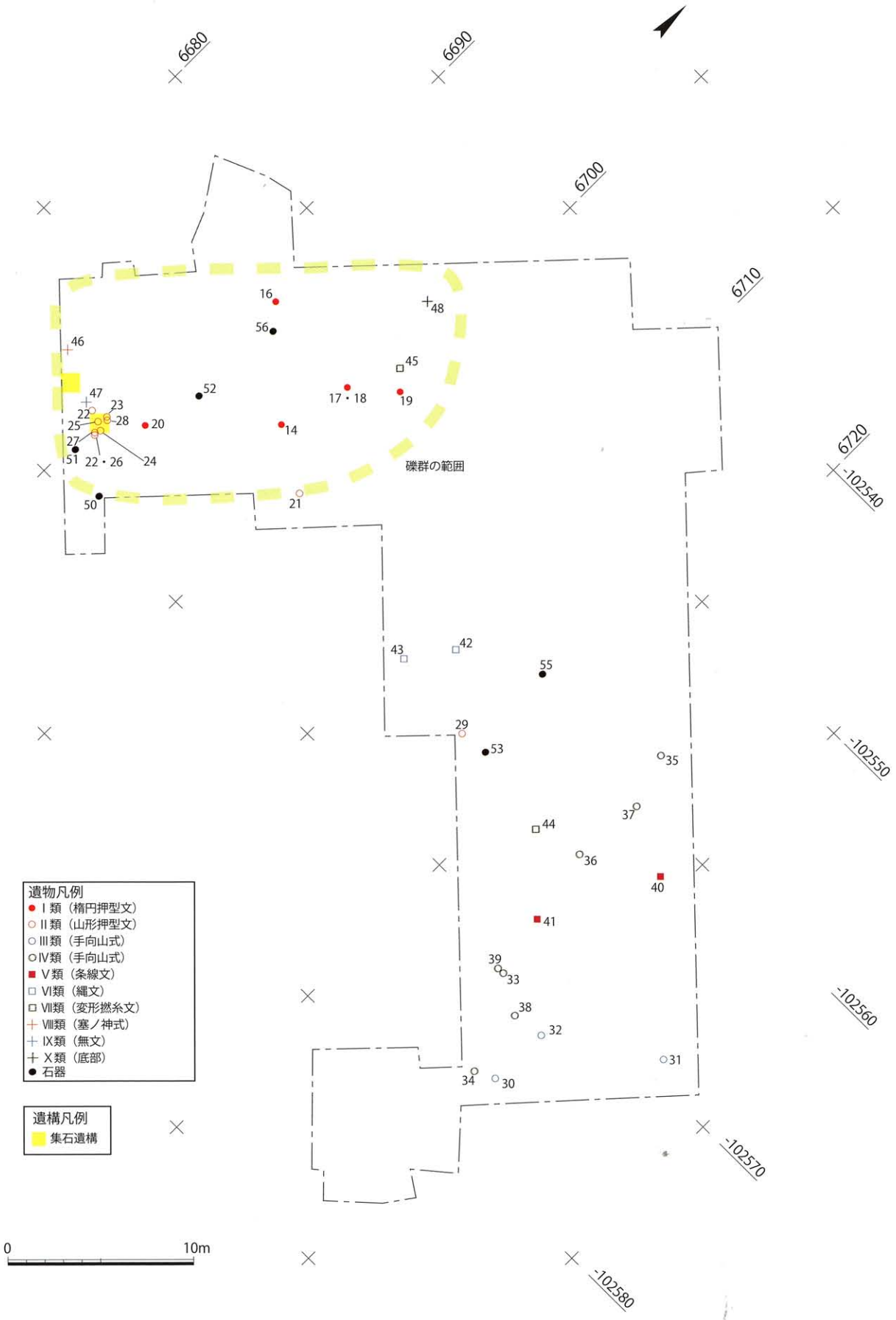


図 2-10　縄文時代包含層出土遺物分布図（1/300）

表 2-1　宮地遺跡１区出土遺物観察表（土器）

遺物番号	出土位置	種別 器種	寸法(cm) 口径	底径	器高	調整	色調	備考
1	SA01	弥生土器 甕	–	–	–	外:ナデ・刻目突帯文 内:ナデ	外:5YR4/3にぶい赤褐 内:5YR3/2暗赤褐	–
2	SA01	弥生土器 甕	–	–	–	外:ナデ・刻目突帯文 内:ナデ	外:5YR4/3にぶい赤褐 内:5YR3/2暗赤褐	–
3	SA01	弥生土器・土師器 甕	–	–	–	外:刻目突帯文・ナデ 内:ナデ	外:2.5YR4/4にぶい赤褐 内:2.5YR4/6赤褐	–
4	SA01	弥生土器・土師器 甕	–	–	–	外:ハケ目・刻目突帯文 内:ハケ目	外:7.5YR6/3にぶい褐 内:7.5YR4/2灰褐	–
5	SA01	弥生土器・土師器 甕	–	–	–	外:ナデ 内:ナデ	外:5YR5/4にぶい赤褐 内:7.5YR6/4にぶい橙	–
6	SA01	弥生土器・土師器 甕	–	–	–	外:ナデ 内:ナデ	外:10YR3/2黒褐 内:10YR5/3にぶい黄褐	–
7	SA01	弥生土器・土師器 壺	–	–	–	外:ミガキ 内:ミガキ	外:2.5YR4/6赤 内:2.5YR4/6赤	–
8	SA01	弥生土器・土師器 甕	(16.5)	–	–	外:ナデ 内:ナデ	外:7.5YR6/6橙 内:7.5YR7/6橙	–
9	SA01	弥生土器・土師器 甕	–	–	–	外:ナデ 内:ナデ	外:7.5YR6/4にぶい橙 内:7.5YR7/4にぶい橙	–
10	SA01	弥生土器 底部	–	(10.2)	–	外:ナデ 内:ナデ	外:7.5YR6/4にぶい橙 内:7.5YR4/2灰褐	–
11	SA01	弥生土器・土師器 底部	–	4.8	–	外:ナデ 内:ナデ	外:5YR5/3にぶい赤褐 内:5YR2/2黒褐	–
12	SA04	土師器 甕	–	–	–	外:ナデ→刻目突帯文 内:ナデ	外:5YR4/3にぶい赤褐 内:7.5YR4/4褐	–
13	SA04	土師器 甕	–	(8.0)	–	外:ケズリ・ナデ 内:ケズリ	外:5YR5/6明赤褐 内:7.5YR6/4にぶい橙	–
14	西区	縄文土器 深鉢	–	–	–	外:楕円押型文(縦方向) 内:ナデ→楕円押型文(横方向)	外:10YR6/4にぶい黄橙 内:2.5Y6/4にぶい黄	–
15	西区	縄文土器 深鉢	–	–	–	外:楕円押型文(縦方向) 内:ナデ→楕円押型文(横方向)	外:7.5YR 6/4にぶい橙 内:10YR6/4にぶい黄橙	–
16	西区	縄文土器 深鉢	–	–	–	外:楕円押型文(縦方向) 内:ナデ	外:10YR6/4にぶい黄橙 内:10YR6/3にぶい黄橙	–
17	西区	縄文土器 深鉢	–	–	–	外:楕円押型文(縦方向) 内:ナデ→楕円押型文(横方向)	外:10YR6/4にぶい黄橙 内:10YR6/4にぶい黄橙	–
18	西区	縄文土器 深鉢	–	–	–	外:楕円押型文(縦方向) 内:ナデ	外:7.5YR5/4にぶい褐 内:7.5YR5/2灰褐	–
19	東区	縄文土器 深鉢	–	–	–	外:楕円押型文(縦方向) 内:ナデ	外:7.5YR6/4にぶい橙 内:7.5YR4/3褐	–
20	西区	縄文土器 深鉢	–	–	–	外:楕円押型文(縦方向) 内:ナデ	外:7.5YR6/4にぶい橙 内:7.5YR3/3暗褐	–
21	西区	縄文土器 深鉢	–	–	–	外:山形押型文(横方向) 内:ナデ	外:7.5YR5/3にぶい褐 内:5YR6/4にぶい橙	–
22	西区	縄文土器 深鉢	–	–	–	外:山形押型文(横方向) 内:ナデ→山形押型文(縦方向)	外:7.5YR5/4にぶい褐 内:7.5YR6/4にぶい橙	–
23	西区	縄文土器 深鉢	–	–	–	外:山形押型文(横方向) 内:山形押型文(縦方向)	外:10YR5/2灰黄褐 内:10YR5/3にぶい黄褐	–
24	西区	縄文土器 深鉢	–	–	–	外:山形押型文(横方向) 内:山形押型文(縦方向)	外:10YR5/2灰黄褐 内:10YR6/3にぶい黄褐	–
25	西区	縄文土器 深鉢	–	–	–	外:山形押型文(横方向) 内:ナデ	外:10YR6/3にぶい黄橙 内:10YR4/2灰黄褐	–
26	西区	縄文土器 深鉢	–	–	–	外:山形押型文(横方向) 内:ナデ	外:7.5YR5/3にぶい褐 内:10YR5/3にぶい黄褐	–
27	西区	縄文土器 深鉢	–	–	–	外:山形押型文(横方向) 内:ナデ	外:7.5YR4/3褐 内:10YR6/4にぶい黄橙	–
28	西区	縄文土器 深鉢	–	–	–	外:山形押型文(横方向) 内:ナデ	外:7.5YR6/4にぶい橙 内:7.5YR6/4にぶい橙	–
29	南区	縄文土器 壺	–	–	–	外:山形押型文(縦方向) 内:ナデ	外:7.5YR6/4にぶい橙 内:7.5YR6/4にぶい橙	–
30	南区	縄文土器 深鉢	–	–	–	外:山形押型文(縦方向) 内:ナデ	外:7.5YR4/3褐 内:10YR4/3にぶい黄褐	–
31	南区	縄文土器 深鉢	–	–	–	外:山形押型文(縦方向) 内:ナデ	外:10YR4/2灰黄褐 内:10YR5/3にぶい黄褐	–
32	南区	縄文土器 深鉢	–	–	–	外:山形押型文(縦方向) 内:ナデ	外:7.5YR6/4にぶい褐 内:10YR6/4にぶい黄橙	–
33	南区	縄文土器 深鉢	–	–	–	外:微隆起線文 内:微隆起線文	外:10YR3/2黒褐 内:7.5YR4/3褐	–
34	南区	縄文土器 深鉢	–	–	–	外:微隆起線文 内:ナデ	外:10YR5/2灰黄褐 内:10YR4/2灰黄褐	–
35	南区	縄文土器 深鉢	–	–	–	外:微隆起線文 内:ナデ	外:7.5YR5/4にぶい褐 内:7.5YR5/3にぶい褐	–
36	南区	縄文土器 深鉢	–	–	–	外:微隆起線文 内:ナデ	外:7.5YR4/3褐 内:10YR4/1褐灰	–
37	南区	縄文土器 深鉢	–	–	–	外:微隆起線文 内:ナデ	外:7.5YR6/4にぶい橙 内:10YR5/3にぶい黄褐	–

表 2-1　宮地遺跡１区出土遺物観察表（土器）

遺物番号	出土位置	種別 器種	寸法(cm)			調整	色調	備考
			口径	底径	器高			
38	南区	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:微隆起線文 内:ナデ	外:7.5YR6/4にぶい橙 内:7.5YR5/3にぶい褐	-
39	南区	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:微隆起線文 内:ナデ	外:7.5YR5/4にぶい褐 内:7.5YR4/2灰褐	-
40	南区	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:条線文 内:ナデ	外:7.5YR6/4にぶい橙 内:7.5YR6/4にぶい橙	-
41	南区	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:ナデ→条線文 内:ナデ	外:10YR4/2灰黄褐 内:10YR3/2黒褐	-
42	南区	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:縄文 内:ナデ	外:5YR6/4にぶい橙 内:5YR3/2暗赤褐	-
43	南区	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:縄文 内:ナデ	外:7.5YR5/4にぶい褐 内:7.5YR5/4にぶい褐	-
44	南区	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:変形撚糸文 内:ナデ	外:2.5Y6/4にぶい黄 内:10YR6/3にぶい黄橙	-
45	東区	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:変形撚糸文 内:ナデ	外:10YR3/2黒褐 内:10YR3/2黒褐	-
46	西区	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:ナデ→貝刺突 内:ナデ	外:7.5YR5/4にぶい褐 内:5YR5/4にぶい赤褐	-
47	西区	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:ナデ 内:ナデ	外:10YR7/4にぶい黄橙 内:10YR6/2灰黄褐	-
48	東区	縄文土器 深鉢	-	6.8	-	外:ナデ 内:ナデ	外:10YR7/4にぶい黄橙 内:10YR5/2灰黄褐	-

表 2-2　宮地遺跡１区出土遺物観察表（石器）

遺物番号	出土地区	層位	器種	石材	寸法（mm）			重量（g）	備考
					長さ	幅	厚さ		
49	西区	-	打製石鏃	黒曜岩	12.7	11.2	3.3	0.3	-
50	西区	-	打製石鏃	チャート	20.7	17.8	4.1	1.0	-
51	東区	-	打製石鏃	チャート	12.0	12.0	2.8	0.4	-
52	西区	-	打製石鏃	無斑晶質安山岩	22.0	15.6	4.3	1.0	脚部欠損
53	南区	-	打製石鏃	チャート	22.5	14.1	2.9	0.6	脚部欠損
54	西区	-	打製石鏃	チャート	36.4	20.8	5.4	2.9	脚部欠損
55	南区	-	削器	黒曜岩	27.8	15.0	4.4	1.7	-
56	西区	-	異形石器(トロトロ石器)	チャート	20.0	14.1	2.7	0.7	-

第４章　まとめ

アカホヤ火山灰層上面においては、弥生時代終末～古墳時代前期頃の遺物が出土する竪穴住居を４棟検出した。いずれの竪穴住居も平面形は方形と考えられるがSA02・03に関しては、大部分が調査区外へと延びるため詳細は不明である。調査区南東で検出したSA01は中央部に主柱穴と考えられる２本の小穴が確認され、埋土中より弥生時代終末～古墳時代初頭頃の遺物が出土した。竪穴住居床面中央部に一対２本の小穴を配する事例は、市内では細野に所在する水落遺跡で数棟確認されており、埋土中より弥生時代後期の遺物が出土し、平面形は隅丸方形や不整円形を呈している。調査区北西で検出したSA04では、床面中央部より埋甕が出土し、埋甕の付近より古墳時代前期の甕が出土した。古墳時代の竪穴住居に埋甕を設置する事例は、市内では真方字餅田に所在する餅田遺跡で確認されており、古墳時代後期の遺物が出土し、平面形は宮地遺跡１区と同様に方形を呈する。

アカホヤ火山灰層下位の調査では、調査区の西側において熱を受け赤化した礫を伴う礫群が確認され、このうち礫の集中が著しいものを集石遺構と認定した。確認した集石遺構は、２基ともに調査区の西端に位置し、付近からは縄文時代早期の押型文土器が多数出土しており、これに近い時期の可能性がある。土器の分布は各類ごとに纏まって出土しており、押型文土器であるⅠ類・Ⅱ類は調査区西部の礫群が認められる部分において出土した。Ⅲ類・Ⅳ類の手向山式と考えられる土器は、調査区の東部から出土し、押型文土器とは分布が異なる。また櫛歯状の条線を持つⅤ類もⅢ・Ⅳ類と同様の場所から出土した。石器に関しては石鏃が多く出土する一方で、磨石・石皿等の採集に関わる石器や石錘など漁労に関する石器は希薄であった。異形石器（トロトロ石器）は１点確認され、押型文土器が分布する部分において出土した。

参考文献
小林市教育委員会編 1992『水落遺跡』小林市文化財調査報告書第５集
小林市教育委員会編 2001『市谷遺跡群』小林市文化財調査報告書第 13 集
都城市教育委員会編 2010『萩ヶ久保第１遺跡』都城市文化財調査報告書第 97 集
山下大輔 2009「南九州の押型文土器編年に関する一考察」『南の縄文・地域文化論考上巻』南九州縄文研究会・新東晃一代表還暦記念論文集刊行会
横手浩二郎 1998「手向山式土器の細分と編年試案」『九州の押型文土器』九州縄文研究会

宮地遺跡２区

西諸広域消防須木分遺所に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

例言

1　本報告は、西諸広域消防須木分遺所改築工事に伴い須木村教育委員会が平成 11 年度に実施した小林市須木中原字上ノ原所在の宮地遺跡２区の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、須木村教育委員会が調査主体となり実施した。

3　宮地遺跡２区の現地調査から報告書作成までの作業に従事したものは下記のとおりである。

発掘作業：

遺構実測・写真撮影：柏野勝重
空中写真撮影：株式会社スカイサーベイ
遺物整理：内畠万喜　下野やす子
遺物実測：下野やす子
製図（デジタルトレース）：内畠万喜
遺物写真撮影及び加工：内畠万喜

4　本報告の執筆については秦広之が行った。

5　土層と遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を参考にした。

6　本報告で使用した方位は座標北である。

7　遺構の表記に使用した略号は以下のとおりである。

SA：竪穴住居　SB：土坑

第１章　調査の経過

第１節　調査の経緯

平成 11 年度に西諸広域行政事務組合による西諸広域消防須木分遺所の改築工事が計画されていた。開発予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「宮地遺跡」内であり、平成 10 年度に発掘調査が行われた宮地遺跡１区の隣接地であることから、確認調査を実施したところ竪穴住居等の遺構を確認したため、開発により破壊が予想される 639.16㎡について発掘調査を実施することになった。

現地発掘調査は、村教育委員会が平成 11 年９月７日から同年 11 月１日まで実施した。報告書刊行に向けた整理作業は、平成 22 年度に小林市教育委員会が実施した。

第２節　調査組織

平成 11 年度の組織（発掘調査実施年度）

調査主体　須木村教育委員会

須木村教育委員会教育長　長嶺護

教育総務課長　安竹茂見

生涯学習課長補佐　坂本幹夫

調査担当　嘱託　柏野勝重（発掘調査）

調査指導　宮崎県教育庁文化課

平成 22 年度の組織（報告書刊行年度）

小林市教育委員会教育長　佐藤勝美

社会教育課長　大角良弘

社会教育主幹　芹田直茂

天辰より子（文化財担当）

庶務担当　主査　加藤義和

調査担当　主任主事　増谷理絵

委託職員　秦広之

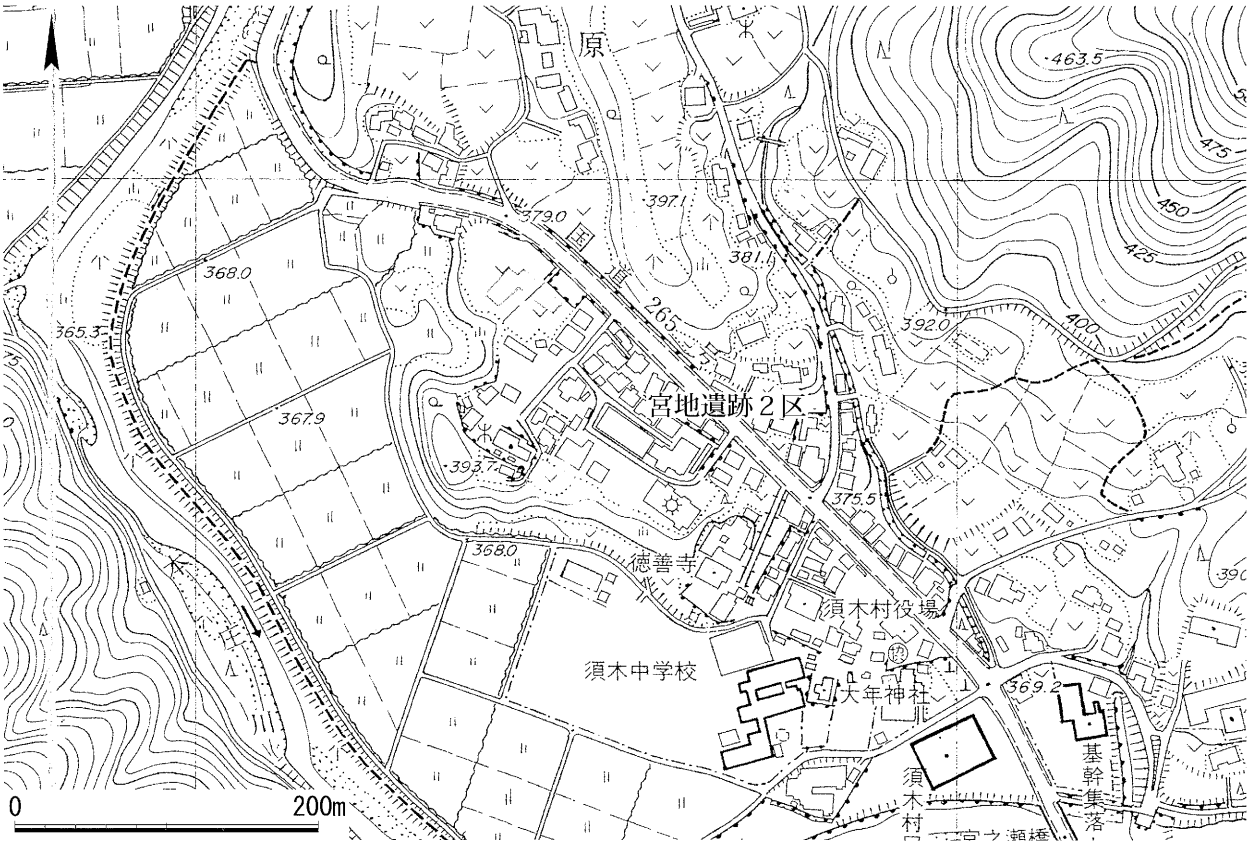


図 3-1　宮地遺跡２区調査位置図（1/5000）

第２章　宮地遺跡２区の成果

第１節　宮地遺跡２区の調査概要（図３－２）

宮地遺跡２区の発掘調査は、平成 11 年９月７日から同年 11 月１日まで行われた。調査を行うに際して、以前存在した工場の整地層である表土を重機で除去し、地表下 0.5m で黒色土を確認した。この黒色土を除去後、地表下 0.7m でアカホヤ火山灰層を確認し、この面で遺構の検出を行った。アカホヤ火山灰層上面の遺構検出の結果、弥生時代後期から古墳時代初頭と考えられる竪穴住居を３棟検出したほか、同時代のものと想定される小穴を多数確認した。アカホヤ火山灰層下位の調査は、調査区北東側の壁際に 20m × 2 m の区画を設定し調査を行った。地表下 1.0 ～ 1.2m で茶褐色粘質土を確認し、この土層から縄文時代早期の遺物を少量出土したが、遺構は検出されなかった。

第２節　第１面（弥生時代後期～古墳時代初頭）の調査

竪穴住居

SA01（図３－３）

SA01 は調査区中央部北側に位置し、アカホヤ火山灰層上面で検出した。平面形は直径 2.5m 前後の不整円形で、深さ 0.1m を測る。床面は平坦で、南側の壁はしっかりと立ち上がるが、北側は不鮮明な部分もある。小穴は５基確認され、中央部の１基は床面からの深さが 0.4m とやや深い。遺物は弥生時代後期～古墳時代初頭と考えられる土器・土師器・磨製石鏃・石包丁が出土した。

SA01 出土遺物 (図３－５)

１は頸部が「く」の字状に屈曲する甕の小破片で、外面はナデ調整、内面にはハケ目調整が観察される。２は胴部で屈曲し立ち上がる高坏の小破片である。３は頁岩製の磨製石鏃の完形品で、鎬は明瞭である。４は頁岩製の石包丁で径 3mm 程の穿孔が２つある。形状は外彎刃直線背形となる。

SA02（図３－４）

SA02 は調査区中央部に位置し、アカホヤ火山灰層上面で検出した。平面形は直径 5.3m 前後の不整円形で、深さ 0.4m を測る。東側には突出部も認められ花弁状住居となる可能性もある。床面の中央部が長軸 3.2m、短軸 2.6m の不整方形気味に二段掘りとなる。床面から小穴は確認されていない。遺物は中央部の二段掘り部分より、弥生時代後期の土器や石包丁が出土したほか、炭化物（木炭）や磨製石鏃等が出土した。

遺跡の空中写真では、SA02 の南東側に遺構らしき黒色土が確認できるが、掘り込みの深い所でも 0.2m 程度と浅く、内部の撹乱も著しかったため調査時において遺構とは認めなかった。

SA02 出土遺物（図３－５）

５は複合口縁壺で、２cm 程の口縁部文様帯には櫛描波状文を施文する。口唇部は平坦になるように面取りが施される。６は頸部で「く」の字状に屈曲する壺で外面にはハケ目調整が認められる。７は内外面に丁寧なミガキ調整が行われ、口縁部が直線的に立ち上がる壺である。

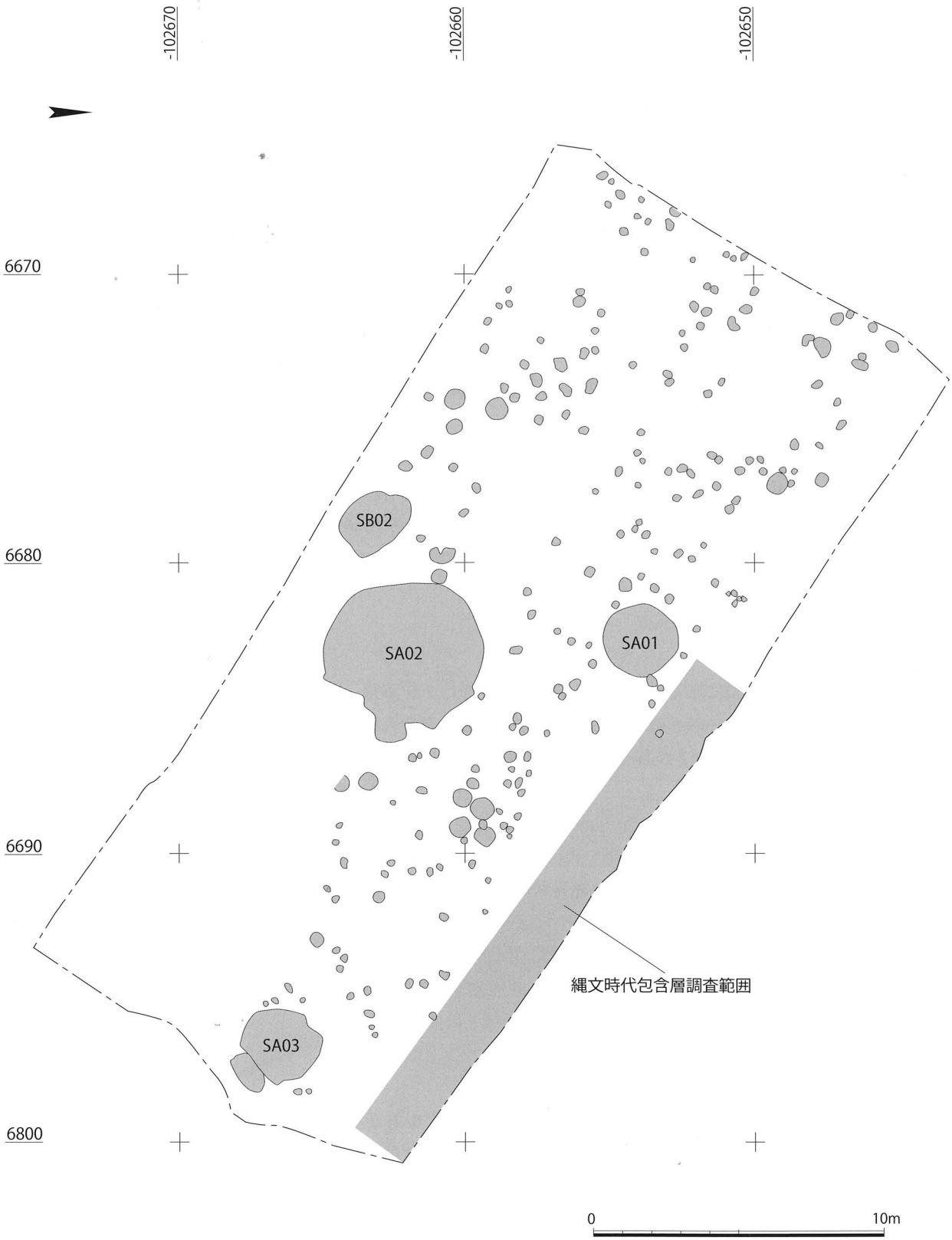
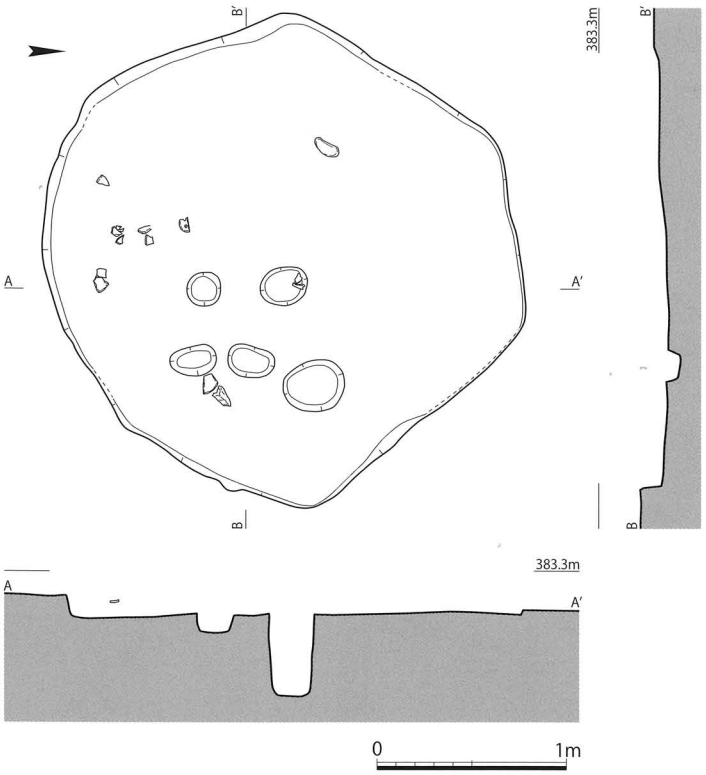


図 3-2　宮地遺跡２区遺構配置図（1/200）

SA01



SB02

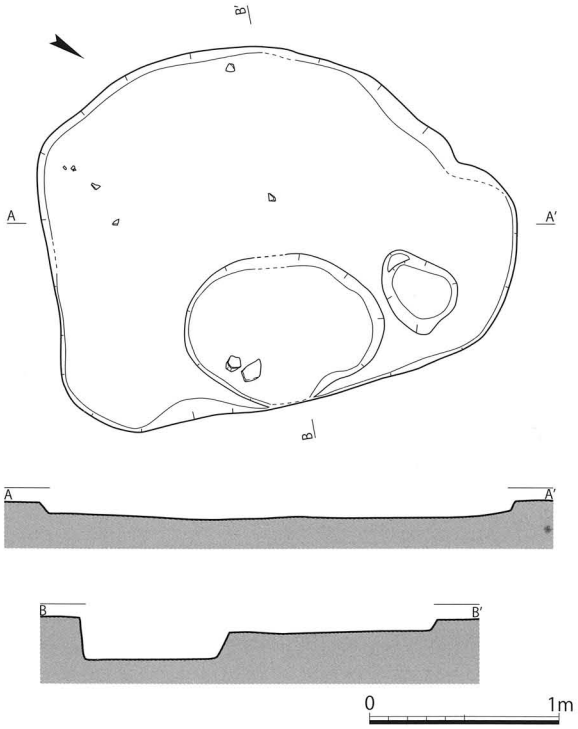
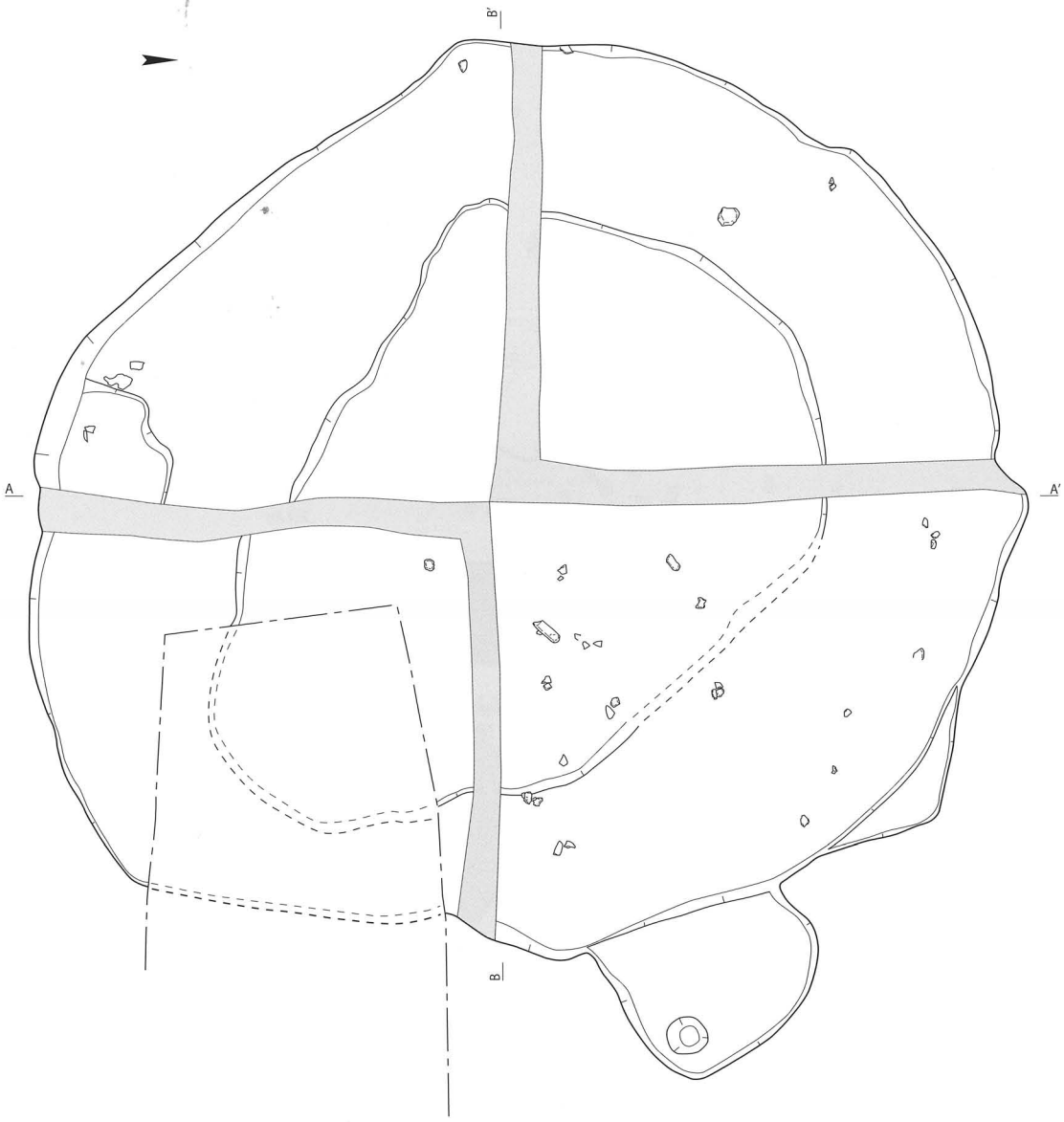
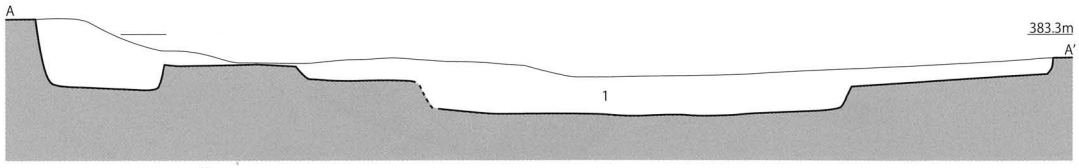


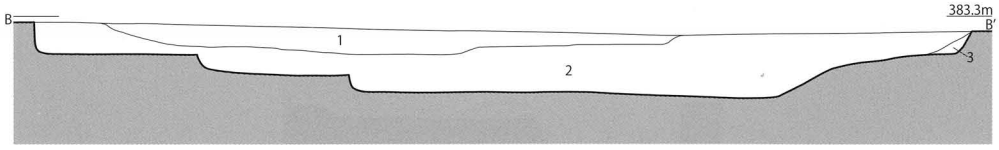
図 3-3　SA01・SB02（1/40）

SA02





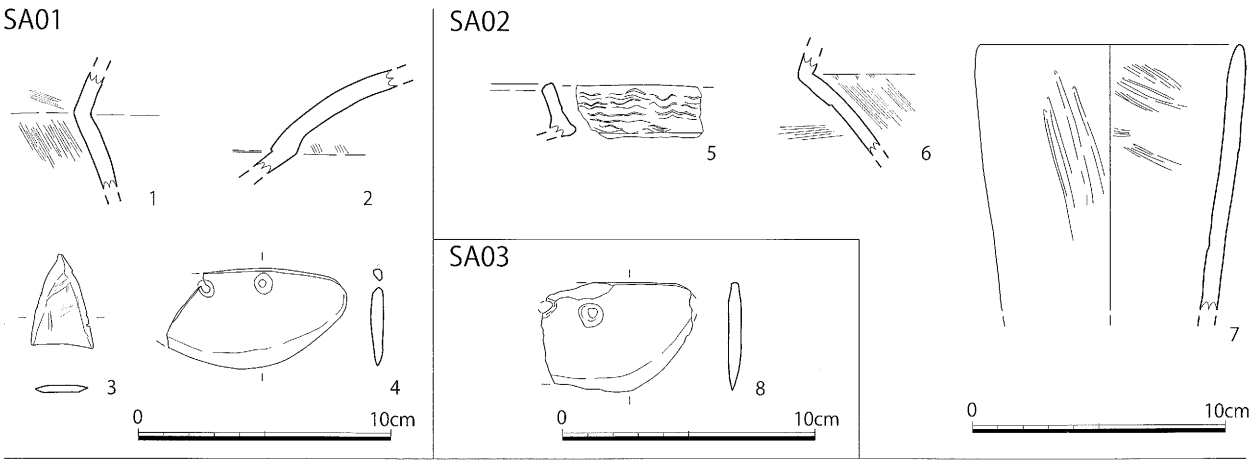
1 黒色砂質土　アカホヤブロックを含む



1 撹乱
2 黒色砂質土　アカホヤブロックを含む
3 黄橙色土　アカホヤ火山灰層

0　2m

図 3-4　SA02（1/40）



縄文時代遺物包含層出土遺物

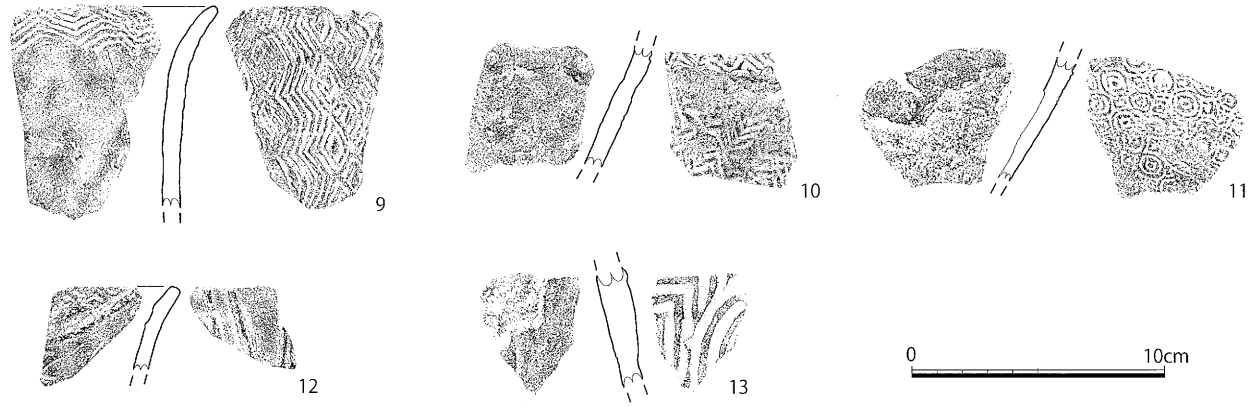


図 3-5　SA01・02・03 及び縄文時代包含層出土遺物（1/3）

表 3-1　宮地遺跡２区出土遺物観察表（土器）

遺物番号	出土位置	種別 器種	寸法(cm)			調整	色調	備考
			口径	底径	器高			
1	SA01	弥生土器 甕	-	-	-	外:ナデ 内:ハケ目	外:7.5YR5/4にぶい褐 内:7.5YR5/4にぶい褐	-
2	SA01	弥生土器 高坏	-	-	-	外:ナデ 内:ナデ	外:5YR6/6橙 内:7.5YR4/3褐	-
5	SA02	弥生土器・土師器 壺	-	-	-	外:櫛描波状文 内:ナデ	外:7.5YR6/4にぶい橙 内:7.5YR6/4にぶい橙	-
6	SA02	弥生土器・土師器 壺	-	-	-	外:ハケ目 内:ナデ	外:7.5YR6/4にぶい橙 内:10YR6/4にぶい黄橙	-
7	SA02	弥生土器 壺	-	-	-	外:ミガキ 内:ハケ目	外:5YR4/4にぶい赤褐 内:5YR5/6明赤褐	-
9	-	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:菱形押型文（縦方向） 内:ナデ→山形押型文(横方向)	外:10YR3/2黒褐 内:10YR5/4にぶい黄褐	-
10	-	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:山形押型文(斜方向) 内:ナデ	外:10YR6/4にぶい黄橙 内:7.5YR6/4にぶい橙	-
11	-	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:回心円押型文(斜方向) 内:ナデ	外:10YR6/4にぶい黄橙 内:10YR3/2黒褐	-
12	-	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:ナデ→微隆起線文 内:ナデ→微隆起線文	外:7.5YR6/4にぶい橙 内:7.5YR5/4にぶい褐	-
13	-	縄文土器 深鉢	-	-	-	外:ナデ→沈線 内:ナデ	外:5YR6/6橙 内:5YR6/4にぶい橙	-

表 3-2　宮地遺跡２区出土遺物観察表（石器）

遺物番号	出土地区	層位	器種	石材	寸法（mm）			重量（g）	備考
					長さ	幅	厚さ		
03	SA01	-	磨製石鏃	頁岩	35.0	25.0	2.5	3.0	-
04	SA01	-	石包丁	頁岩	40.5	63.5	5.5	19.3	-
08	SA03	-	石包丁	粘板岩？	44.0	59.5	5.0	19.1	-

SA03（図３－２）

SA03は調査区南東端に位置し、アカホヤ火山灰層上面で検出した。平面形は直径2.5m前後の不整円形であるが、南東部分に張り出し部を持ち、これが付属施設であるならば全体的には帆立貝状の平面形を呈する。遺構内部の状況についての詳細は不明な点が多いが、張り出し部において小穴を１基検出したものの、円形部分の床面からは小穴は確認されなかった。遺物は石包丁や土器が出土した。

遺跡の空中写真では、SA03の南側にSA03と同様の形態の一回り大きい黒色土が確認できるが、掘り込みが0.1m程度と浅く遺物も出土しなかったため、調査時において遺構とは認めなかった。

SA03出土遺物（図３－５）

SA03から出土する土器は胴部無文の小破片が多く、図示できるものはなかった。８は石包丁で、径５mm程の穿孔が２つある。形状は半分を欠損しているが、外彎刃直線背形となるものと考えられる。

SB02（図３－３）

調査区の中央部南側、SA02の南西に位置し、アカホヤ火山灰層上面で検出した。長軸2.5m、短軸2.0mの不整円形で、深さ0.1mを測る。埋土は隣接するSA02に類似するが遺物が出土しておらず詳細は不明である。竪穴住居の可能性も考えられるが、土坑として報告する。

第３節　第２面（縄文時代遺物包含層）の調査

縄文時代遺物包含層の調査は、調査区東側の壁際に南北20m×東西２mの区画を設定し掘削を行った。地表下1.0～1.2mで茶褐色粘質土層を確認し、この層より縄文時代早期の手向山式が少量出土した。集石遺構等の遺構は確認されなかった。

９は口縁部が外反気味に立ち上がる器形で、外面に縦方向に施文する菱形押型文、内面口縁部には幅の広い山形押型文を横位に展開する。10は外面に山形押型文が斜方向に施文する。11は外面に楕円押型文を施文し、内面はナデ調整が認められる。12は外反気味に立ち上がる器形で、外面に縦方向の微隆起線文、内面口縁部には微隆起線文を弧状に施文する。13はやや太目の沈線文土器で、渦文と方形の文様が組み合わされる文様構成が観察される。

第３章　まとめ

宮地遺跡２区では、弥生時代後期から古墳時代初頭頃と考えられる竪穴住居３棟や土坑、小穴を検出した。竪穴住居は円形もしくは不整円形で、方形基調の宮地遺跡１区とは異なっており、宮地遺跡１区に先行する集落の可能性がある。出土遺物についても、宮地遺跡１区に比べると若干古い様相を示している。縄文時代包含層は、調査区の北東部に設定した区画のみの調査であり、遺跡の全容を示すものではないが、縄文時代早期の手向山式がやや纏まって出土した。これらの遺物の周囲には、熱を受けたと考えられる赤化した礫が出土しており、付近に縄文時代早期の集石遺構が存在するものと思われる。

奈佐木城跡

奈佐木城址公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

例言

1　本報告は、奈佐木城址公園整備に伴い須木村教育委員会が平成 12 年度に実施した小林市須木奈佐木字上奈佐木所在の奈佐木城跡の発掘調査報告である。

2　発掘調査は、須木村教育委員会が調査主体となり実施した。

3　奈佐木城跡の現地調査から報告書作成までの作業に従事したものは下記のとおりである。

発掘作業：

遺構実測・写真撮影：柏野勝重
空中写真撮影：株式会社スカイサーベイ
遺物整理：内畠万喜　下野やす子
遺物実測：下野やす子　秦広之
製図（デジタルトレース）：内畠万喜
遺物写真撮影及び加工：内畠万喜

4　本報告の執筆は秦広之が行った。

5　本報告で使用した方位は磁北である。

6　陶磁器類の分類については、下記の分類を参考にした。

森田分類：森田勉 1982「14 ～ 16 世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁器研究 No.2』日本貿易陶磁研究会
小野分類：小野正敏 1982「15 ～ 16 世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁器研究 No.2』日本貿易陶磁研究会
上田分類：上田秀夫 1982「14 ～ 16 世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁器研究 No.2』日本貿易陶磁研究会

第１章　調査の経過

第１節　調査の経緯

奈佐木地区では、平成12年度に須木村商工企画課により奈佐木城址公園整備事業が計画されていた。公園整備予定地の奈佐木城跡は、宮崎県教育委員会が実施した中近世城館跡緊急調査により曲輪や堀切・土塁などの遺構が良好に残されていることが報告されており（宮崎県1999）、県教育委員会文化課・村教育委員会・村商工企画課の３者で事業の進め方について協議を行った。協議の結果、事前に奈佐木城跡の範囲や遺構の有無の確認が必要であるとの結論に至り、整備予定地内383.51㎡の発掘調査を平成12年12月６日から平成13年２月26日にかけて村教育委員会が主体となり実施した。報告書刊行に向けた整理作業は、平成22年度に小林市教育委員会が実施した。

第２節　調査組織

平成12年度の組織（発掘調査実施年度）

調査主体　須木村教育委員会

須木村教育委員会教育長　長嶺護

生涯学習課長　安竹茂見

調査担当　柏野勝重（発掘調査）

調査指導　宮崎県教育庁文化課

平成22年度の組織（報告書刊行年度）

小林市教育委員会教育長　佐藤勝美

社会教育課長　大角良弘

社会教育主幹　芹田直茂

天辰より子（文化財担当）

庶務担当　主査　加藤義和

調査担当　主任技師　増谷理絵

委託職員　秦広之

第２章　遺跡の立地と環境

奈佐木城跡は小林市の北部、岩瀬川に注ぐ谷ノ木川左岸の丘陵上に所在する。城下を東西に走る県道奈佐木高岡線は、須木と紙屋・高岡を結ぶ交通路であり、この道路によって通じる南東の紙屋城跡までは約14km、北東の須木城までは約４kmである。奈佐木城を含むこの３城は戦国時代伊東氏が配置した所謂「伊東四十八城」に数えられており、一時期は日向の大半を支配した伊東氏にとり小林城などと共に、真幸口経略の拠点となった。付近に所在するこの他の中世城館としては、平成15年度に県営中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査が行われた尾殿第一遺跡がある。この遺跡は、奈佐木城跡の北9kmの須木下田に所在し、発掘調査では城館に関する明確な遺構を確認することができなかったが、中世後半の青磁碗等が出土しており、調査区の周辺の尾根には堀切が確認されるなど、中世城館の可能性が高いものと考えられる。奈佐木集落の北東６kmの内山集落内の小台地上には内山城跡（須木）が所在する。

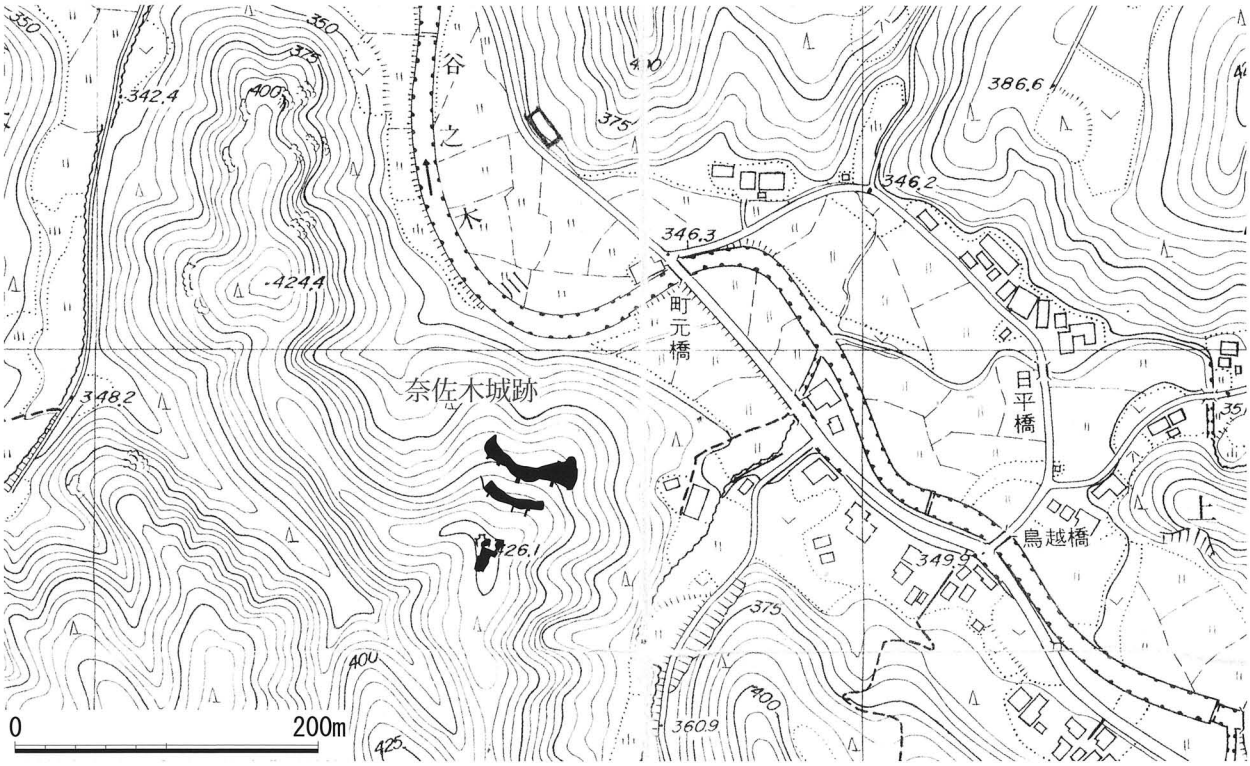


図 4-1　奈佐木城跡調査位置図（1/5000）

第３章　調査の成果

第１節　曲輪１〈主郭〉の遺構と遺物

曲輪１〈主郭〉（図４－３）

曲輪１〈主郭〉は、奈佐木城跡を形成する尾根の頂上部（標高 424m）に位置し、南北 14.5m、東西 6.4 ～ 11.2m を調査区として設定した。調査区を含むこの曲輪全体の範囲は、南北 48m ×東西 5 ～ 21m を測り、今回はその 1/3 程度を調査したことになる。調査区中央部の西側を中心に、掘立柱建物の柱穴と考えられる小穴を検出した。小穴の深さは検出面から 0.1 ～ 0.2m と浅いものが多い。北東－南西方向を軸とした小穴の配列を想定することもできるが、その範囲が調査区外へと延びるため、報告書作成段階において掘立柱建物の組み合わせを復元することは出来なかった。

調査区の南側には、長軸 3.5m ×短軸 2.7m を測る方形の窪地が検出されているが詳細は不明である。

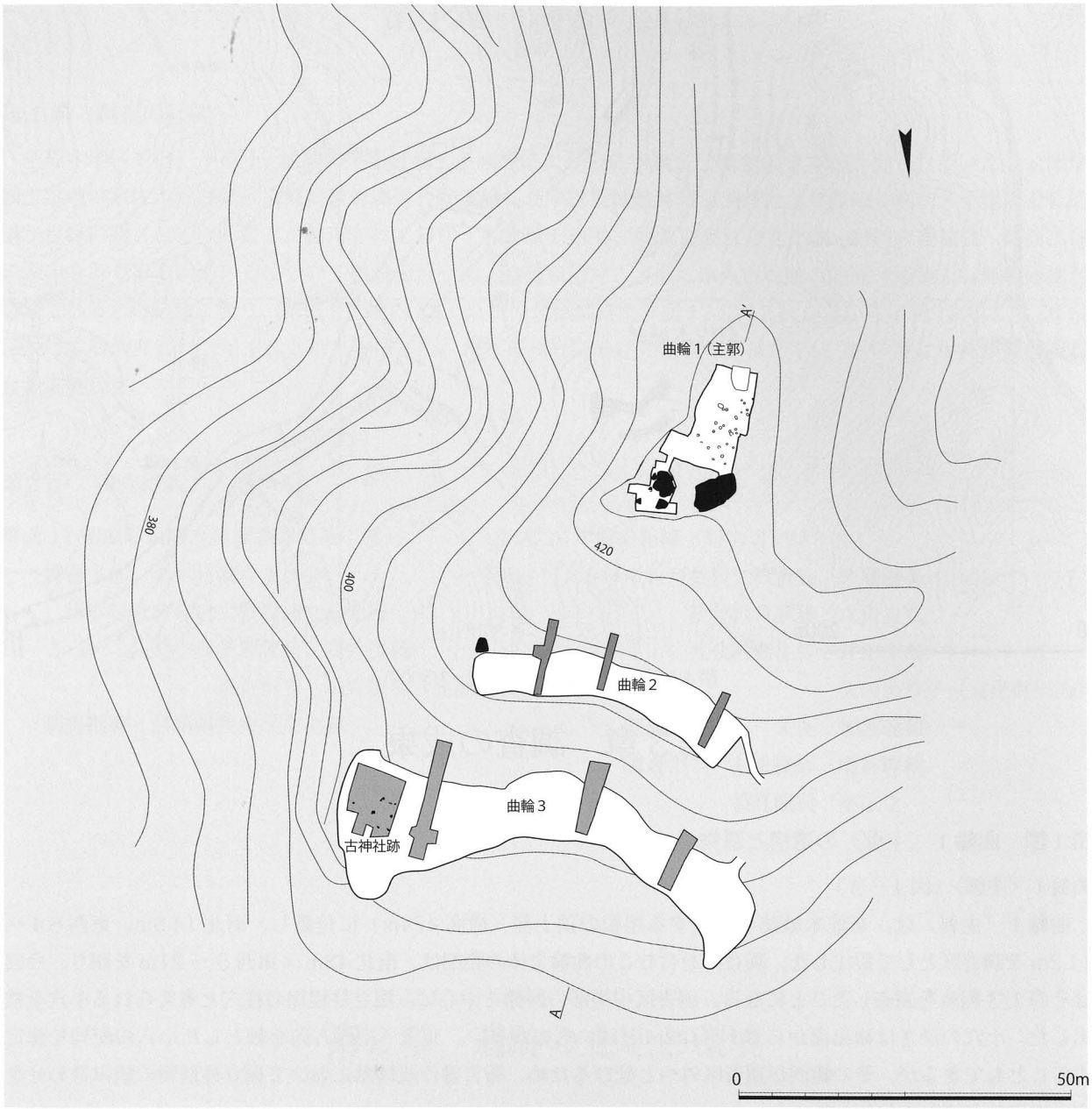
調査区北側には直径 2.0 ～ 7.5m 前後の巨石（自然石）が３箇所確認されている。調査区北東部分の２つの巨石に挟まれた部分からは、洪武通寶や大中通寶などの銭貨 66 枚が纏まって出土した。出土した銭貨の内訳は、洪武通寶 54 枚・大中通寶２枚・永楽通寶３枚・光順通寶と読めるものが１枚・錆着のため銭種を確認できなかったものが６点であった。また、この付近からは底部糸切の土師器皿（18 ～ 20）や香炉（21）なども出土している。

調査区中央西端からは熱を受けた痕跡が認められる礫が纏まって出土し、炉跡の可能性もある。

曲輪１〈主郭〉から出土した遺物は、中世後期の陶磁器のほか、香炉・笄・銅銭などが出土した。

曲輪１〈主郭〉出土遺物（図４－５・６）

１は端反りの碗で、外面に唐草文を描き、内面口縁部には四方襷文を描く。小野分類染付碗 B 群。２・３は広



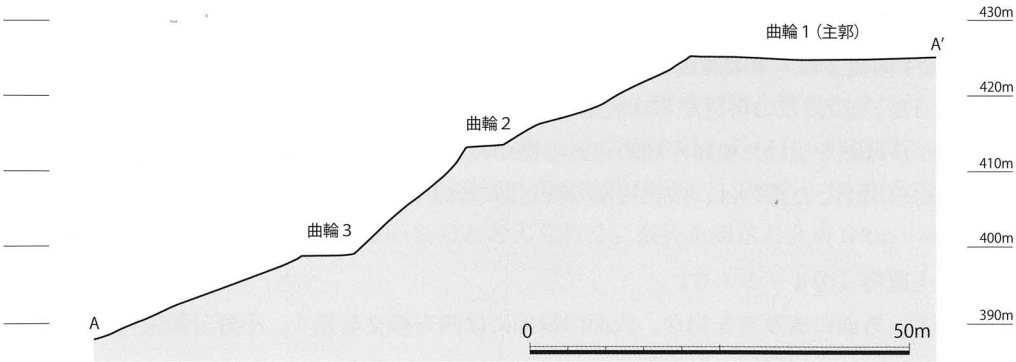


図 4-2　奈佐木城跡遺構配置図（1/1000）

く開いた胴を持ち、見込みが広台内に窪む特徴を持つ碗で、３の外面には丸を３つ組み合わせた文様を描き、見込みには同様な文様と渦文を描く。小野分類染付碗Ｃ群。４は見込みに玉取獅子文を描く染付皿で、小野分類染付皿Ｂ群。５～７は端反りの染付皿で、小野分類染付皿Ｂ群。８は口縁が内碗気味に立ち上がる染付皿。９は口縁部が外反する青磁碗で、上田分類Ｄ類。10は線描蓮弁文が施される青磁碗で、上田ＢⅣ類。11は口縁部に線描で草文を描き、胴部には線描蓮弁文を描く青磁碗。12は青磁碗の底部。13は青磁稜花皿で、口縁部内面に沿って部分的に途切れる沈線文が廻り、内面胴部には箆描きの花文様を施す。外底部の高台内を蛇の目状に釉剥ぎを行う。14は青磁小皿。15・16は白磁皿で、森田分類Ｅ群。ともに高台畳付部分のみを露胎とするもので、16は畳付部から外底部にかけて砂が付着する。17は内碗気味に立ち上がる無文の陶器碗。18～20は土師器皿で、不明瞭であるが底部糸切が認められる。18は口縁部の先端が尖り気味となり、僅かに外反する。21は瓦質土器香炉で、口縁部外面が外反し、外面胴部には３帯の陰印刻を施す。脚部の断面は三角形状となり、付け根には円形の印刻を２箇所施す。22は銅製の笄で、湾曲した状態で出土した。23～27は銅銭で、23は大中通寶、24は洪武通寶、25は不鮮明であるが「光順通寶」とも読める。26～27は永楽通寶である。

第２節　曲輪２の遺構と遺物

曲輪２（図４－２）

曲輪２は標高412m前後の位置にあり、曲輪１〈主郭〉との比高差は約12m、曲輪３との比高差は約13mで、曲輪１〈主郭〉から曲輪２までの傾斜は、曲輪２から曲輪３までの傾斜に比べて緩やかである。曲輪２の範囲は、南北５～８m、東西41mで東西に弓形状に細長く形成され、この範囲に３本の試掘坑を設定し調査を行った。試掘坑内からは小穴や土坑を確認している。曲輪２からは、染付碗などが少量出土した。

曲輪２出土遺物（図４－６）

28は畳付部分のみを露胎とする比較的高い高台を持つ染付碗で、見込みには蓮花文的な文様を施す。

第３節　曲輪３〈古神社跡〉の遺構と遺物

曲輪３（図４－２・４）

曲輪３は、標高400m前後に位置する。曲輪１〈主郭〉までの比高差は約25mである。曲輪は、南北８～21m、東西65mと東西方向に弓形状に細長く形成されている。この範囲に３本の試掘坑を設定し調査を行った。曲輪３からは、染付碗や皿などが少量出土した。

曲輪３出土遺物（図４－６）

29は口縁部が外反する染付碗で、見込みには蛇の目釉剥ぎが認められる。30は口縁部が外反する染付皿で、外面に唐草文を施す。小野分類染付皿Ｂ群。

古神社跡（図４－４）

曲輪３の東端部分において、礫が列を成して確認できたことから、この礫の配列に注意しながら調査区を設定した。奈佐木城跡を形成する尾根は「荒神山」とも呼ばれ『須木村誌』には「奈佐木の「荒神社」は、奈佐木城跡に祭られていたと伝えられるが、御神体は西南戦争の折いずれかの兵士に持ち去られた」と紹介されている。嘉永６（1853）年に須木の社寺を纏めた「須木神社方堂寺院調帳」（『宗方家文書』）でもその存在を確認するこ

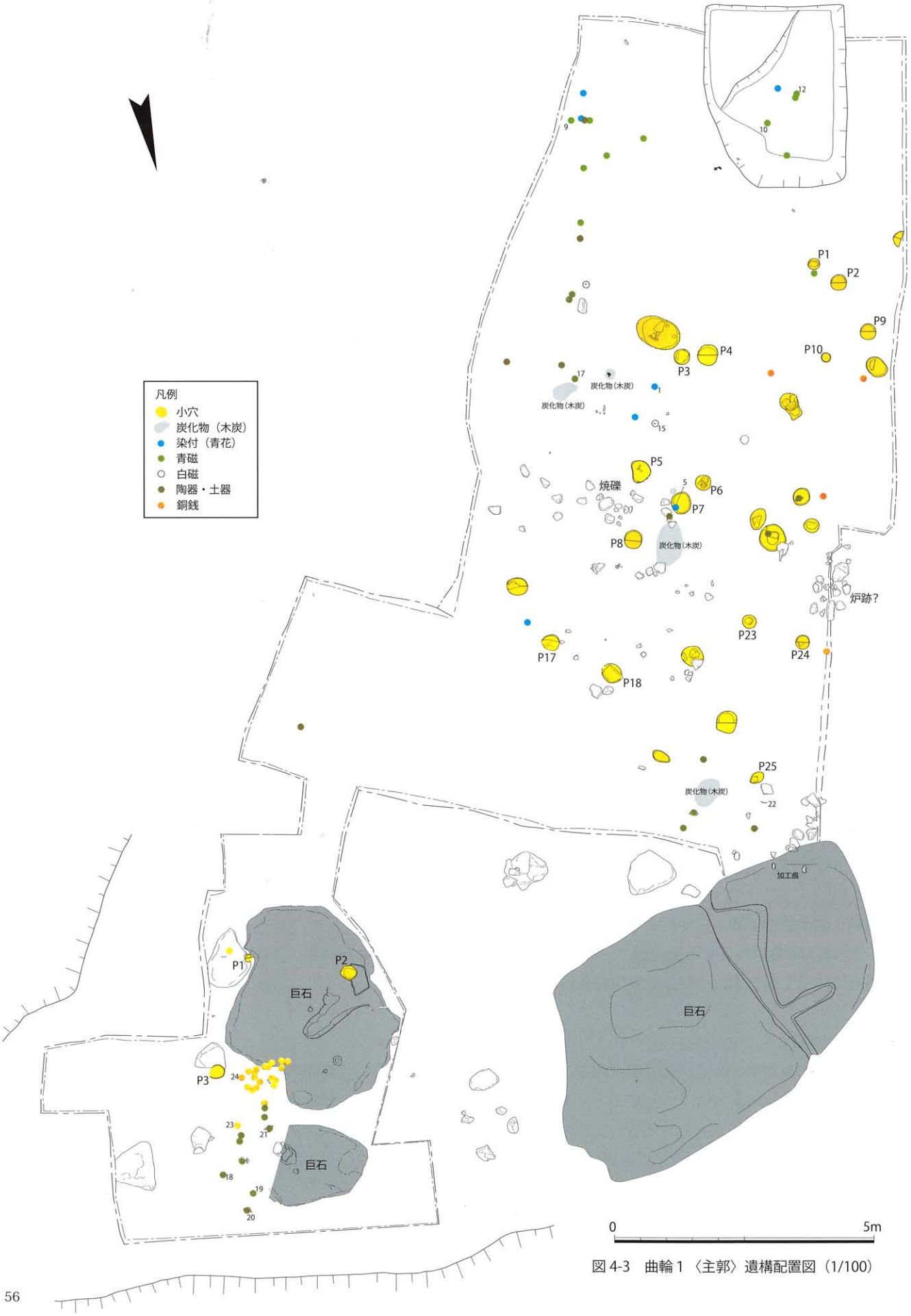
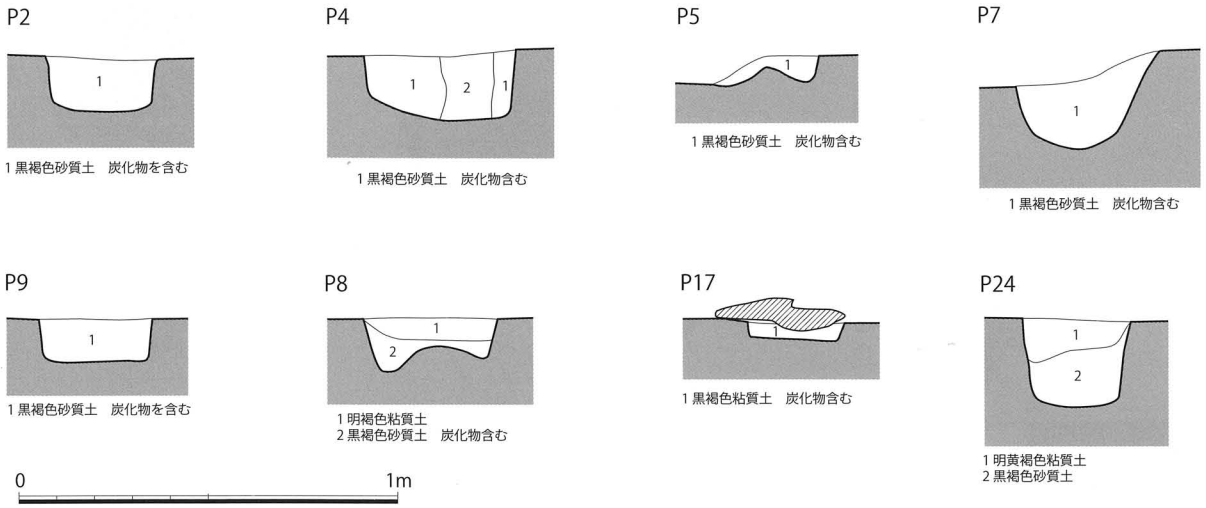


図 4-3　曲輪 1〈主郭〉遺構配置図（1/100）

曲輪１〈主郭〉小穴



古神社跡

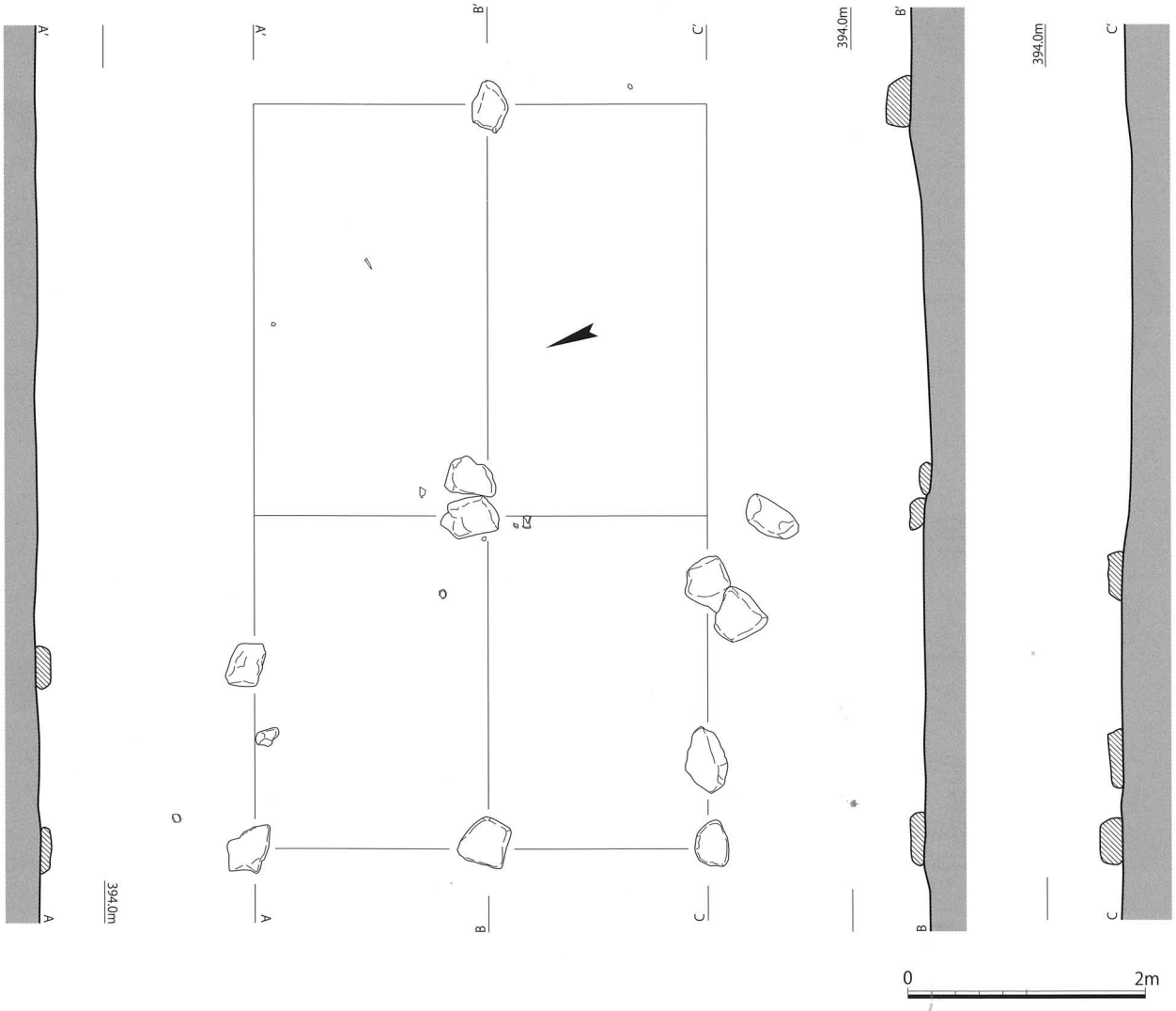


図 4-4　曲輪１〈主郭〉小穴（1/20）及び古神社跡（1/60）

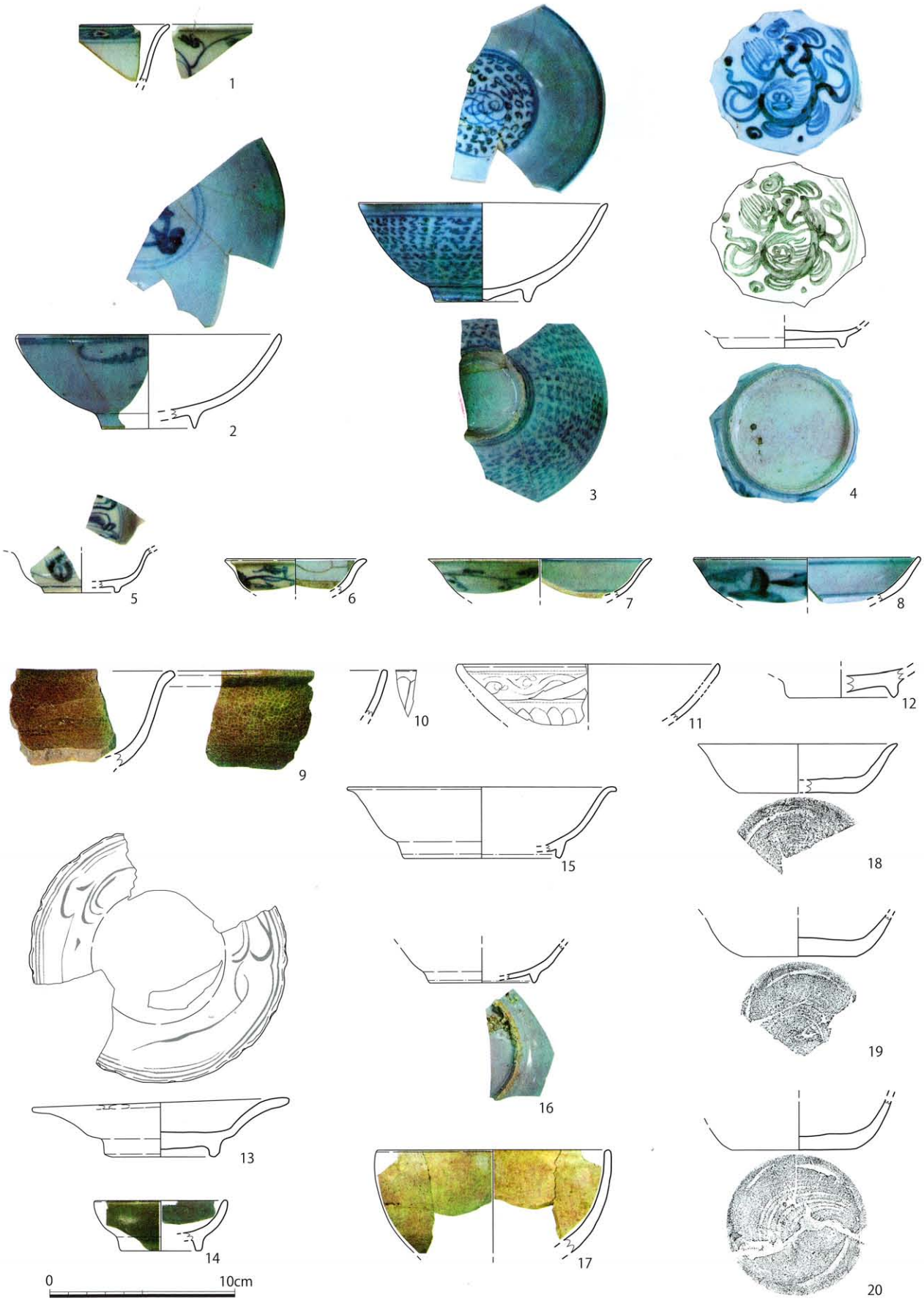
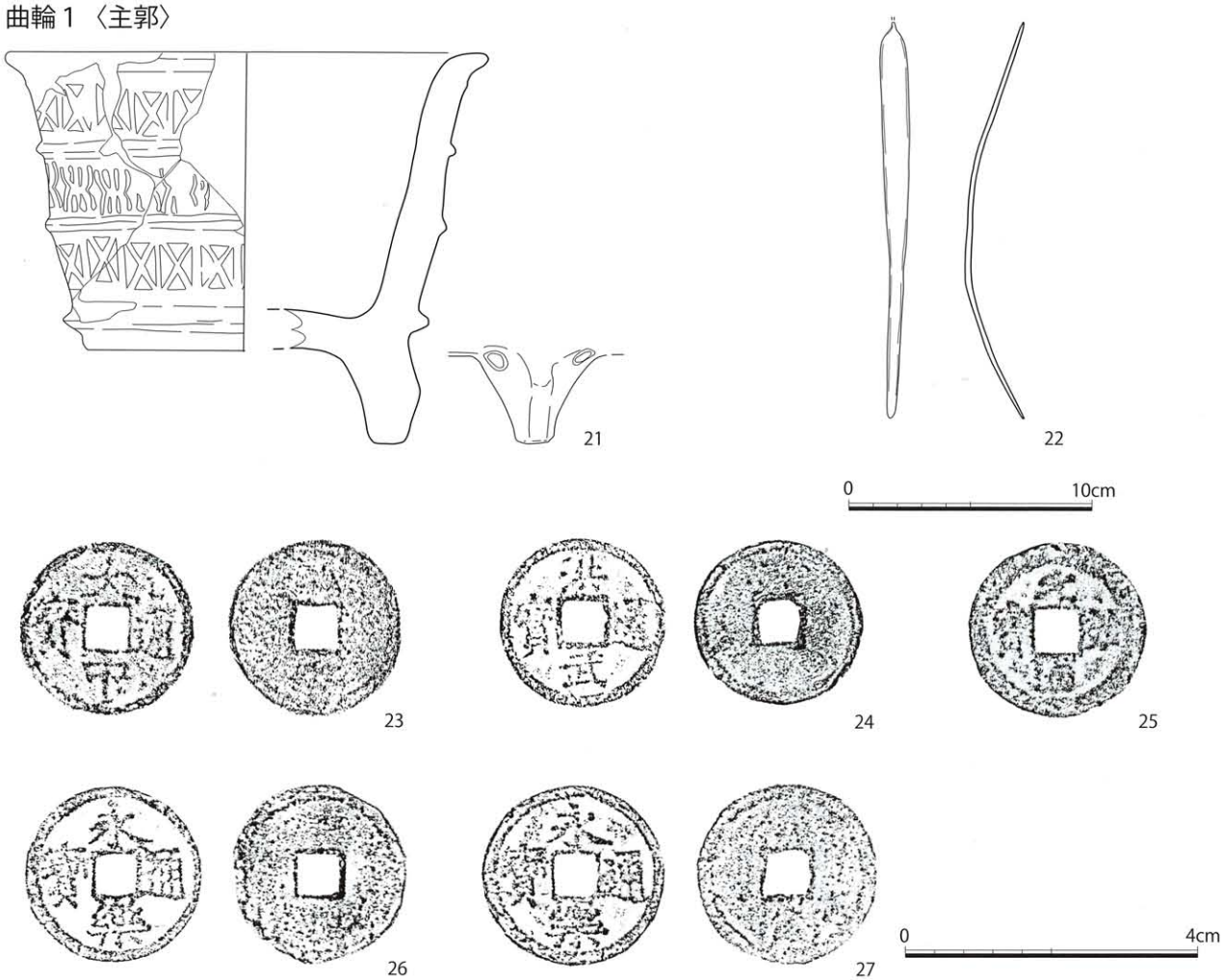
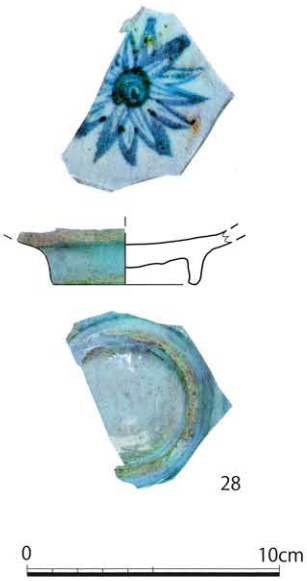


図 4-5　曲輪 1〈主郭〉出土遺物 1（1/3）

曲輪1〈主郭〉



曲輪2



曲輪3・古神社跡

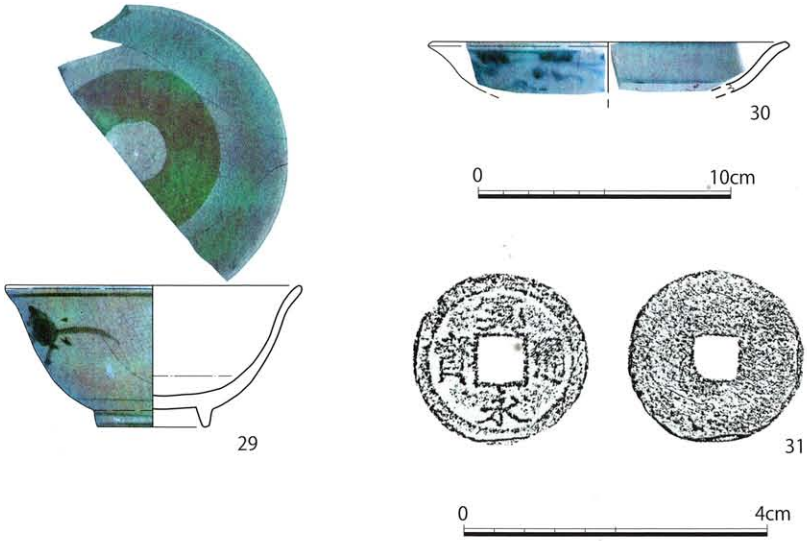


図4-6　曲輪1〈主郭〉出土遺物2、曲輪2・曲輪3・古神社跡出土遺物（1/3）

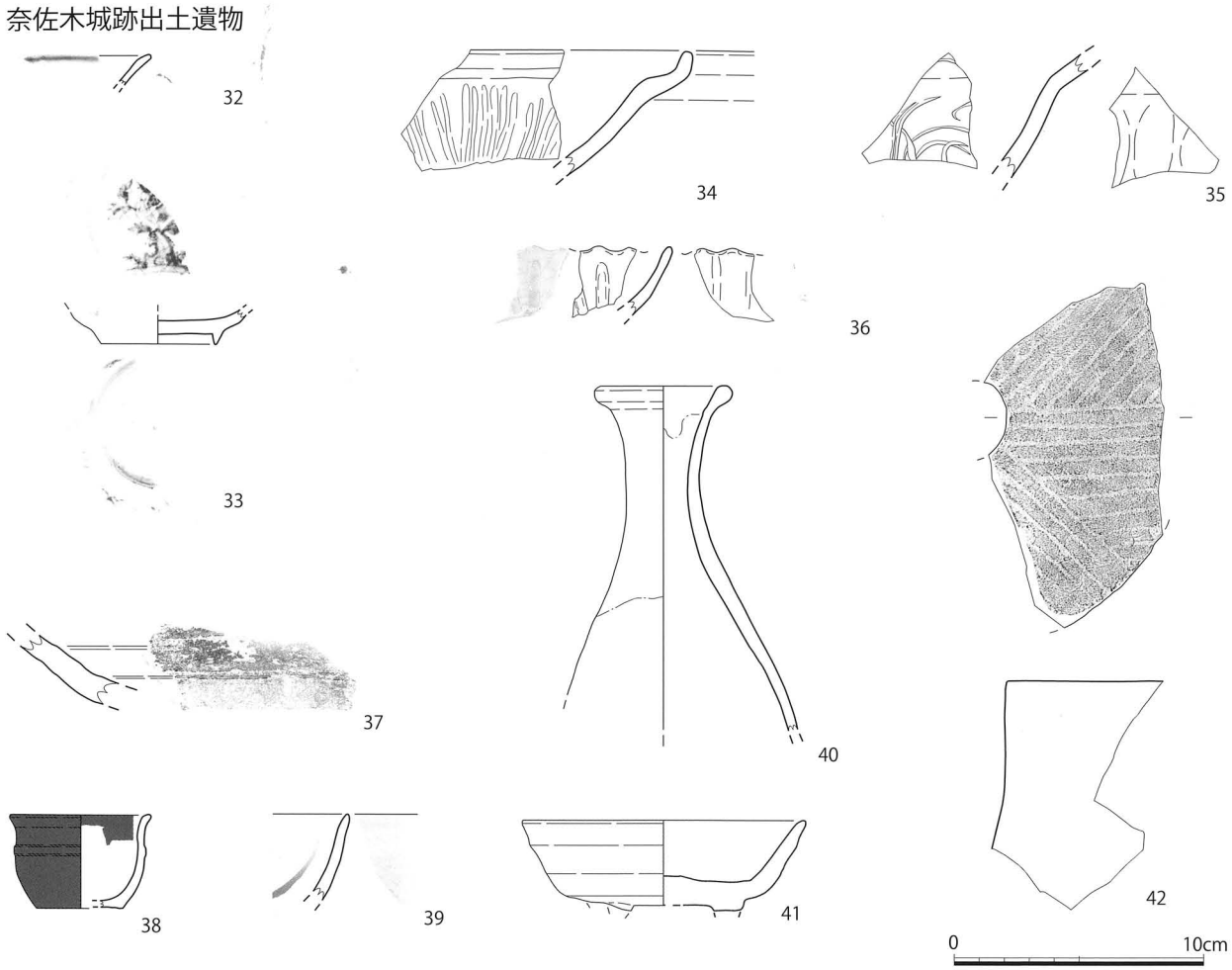


図 4-7　奈佐木城跡出土遺物３（1/3）

とができる。今回確認された礎石の配列が、伝承や文献史料で知ることができる「荒神社」跡と考えられたことから、この区画を「古神社跡」として調査を行った。

古神社跡では、0.3 ～ 0.4m 程度の礫が 11 個確認でき、いずれも平坦な面を上にして設置されていた。それぞれの礫が原位置を保つか不明な部分もあるが、西端の３個の礫は当初の位置を保つと思われ、それぞれの礫の間隔は 2.0m とほぼ均等である。古神社跡から出土した遺物は、青磁花生、寛永通寶など江戸期の遺物が出土した。

古神社跡出土遺物（図４－６）

31 は寛永通寶である。

第４節　奈佐木城跡出土遺物

奈佐木城跡出土遺物（図４－７）

32 ～ 42 は奈佐木城跡発掘調査で出土した遺物であるが、出土位置が不明なものである。32・33 は小野分類染付皿 B 群。33 は畳付部分のみに釉剥ぎが認められる。34・35 は青磁盤もしくは皿で、34 は口縁部を「く」の字状に折り曲げ、先端をさらに摘み上げるように形成し、内面胴部には浅い沈線文が観察される。36 は白磁稜花皿で、口縁部は波形に作り、内外面を花弁状にヘラ切り彫りする。37 は黒釉陶器の小破片で、壺の肩部付近と

思われる。38 は黒釉陶器の小碗。39 は陶器碗。40 は陶器瓶で、外面鉄釉の上に外面肩部から内面口縁部まで藁灰釉を施している。41 は土師器皿の底部３箇所に方形の脚が付き、脚部は貼り付けではなく削り出して形成した痕跡を持つ。42 は粉引き臼の下臼で、目は八分画と推定される。

第４章　まとめ

第１節　文献にみる奈佐木城

奈佐木城に関する文献史料は必ずしも多くはないが、『日向記』には「那佐木城主　肥田木三郎兵衛尉」（『日向記巻第７』「７分国中城主揃事」）とあり、伊東氏が領国内に配置した「伊東四十八城」の一つに数えられている。また永禄４（1561）年の出来事を伝える史料の中には「真幸口ニハ野尻・三ッ山・須木・奈佐木、彼四ヶ所ヲ固テ手堅番ヲナス上ハ真幸口・飫肥口双方ニ働玉フ」（『日向記』「犬追物并長善寺破事」）とあり、伊東氏にとって奈佐木の地が重要な拠点の一つであったことが伺える。このころの伊東氏は、飫肥攻略と同時に真幸院への進出を目論んでいた時期であり、この地を治めていた北原氏が衰退する中で、真幸方面において島津氏と直接的に対峙するようになる。

元亀３（1572）年の木崎原合戦で敗れた伊東氏は、さらに天正４（1576）年８月に高原城が島津氏により攻略されると「同日三ノ山・須木・名左木、彼三ヶ所伊東捨られ候」（『旧記雑録後編』1-901「北郷時久日記」）、「高原・高崎・三ノ山・内木場・岩牟禮・須木・須師原・奈崎共八箇所忽爲我用土、同廿四日、使鎌田尾張守警衛三ノ山、宮原筑前守警固須木也」（『旧記雑録後編』1-861「義久公御譜中」）とあるように、奈佐木（「名左木」「奈崎」）の地も周辺地域と同じく島津氏の領有することとなり、須木へは宮原筑前守景種が配置された。このように文献史料における「奈佐木城」あるいは「奈佐木」は、真幸方面で伊東氏と島津氏が対峙するようになる永禄年間から天正の始め頃の記事に、その存在を確認することが出来るようになる。

第２節　出土遺物からみる奈佐木城

奈佐木城の主郭と想定される曲輪１〈主郭〉では、13 世紀から 14 世紀前半頃の指標となる鎬蓮弁文を持つ竜泉窯系青磁碗や口禿の白磁小皿等は出土していない。今回の発掘調査で古く位置づけられそうなのが、口縁部が外反する青磁碗（上田分類Ｄ類：９）で、14 世紀後葉から 15 世紀前葉頃と位置づけられている。中国産染付の多くは、15 世紀後葉から 16 世紀中葉頃のものが主体を占めており（小野分類染付碗Ｃ群・皿Ｂ群）、白磁皿や青磁椀なども同様な年代の資料が出土している（森田分類Ｅ群、上田分類ＢⅣ類）。以上のような曲輪１〈主郭〉における出土傾向により、奈佐木城は少なくとも 15 世紀代には築城されていた可能性が高く、出土遺物の多くなる 15 世紀後葉から 16 世紀中頃にかけて城として活発に利用されたものと考えられる（註１）。一方で、16 世紀後葉（1570 年代から 80 年代）に量的増加をみせる小野分類碗Ｅ群（饅頭心タイプ）や皿 B2 類・Ｅ類は出土しておらず、天正４（1576）年の島津氏領有後は、拠点としての城の役割を終えている可能性が高い。

今回の発掘調査において興味深い事例としては、曲輪１〈主郭〉北東部の巨石（自然石）周辺の限られた範囲から、銭貨が纏まって出土したことである。多量の銭貨が纏まって出土した事例は、中世城館では備前焼の壺・甕に入れられた坂本城跡（五ヶ瀬町）や塩見城跡（日向市）などがあり、これらは備蓄銭と考えられている（北郷 1998）。その他の事例としては、中世城館の調査ではないが、笠下遺跡（延岡市）や鵜戸ノ前遺跡（小林市）などで報告されており、いずれも祭祀的意味合いを持つものと想定されている。今回の事例においても、他の中

世城館の事例で指摘されている備蓄銭の可能性も否定することは出来ないが、銭貨が纏まって出土した場所が、奈佐木城の主郭と考えられる曲輪１の北東隅であるという点を重視するならば「鬼門」を意識した祭祀儀礼の可能性も想定することが出来るのかもしれない。

今回の発掘調査は、公園整備事業に伴う事前の発掘調査であり、限られた範囲の調査であったが、文献史料が必ずしも多いとは言えない奈佐木城の築城時期と利用期間についての情報を得たことは大きな成果であった。

註１　この時期の須木の情勢を探る史料に下記の２点がある。

①「須木より明日十五日仕事之由、申候之間、我々彼堺目へ可打出候之處、米良美濃・比田木次郎太郎一日之合戰へ手負候間、明日之仕事者延候」（『旧記雑録前編』2-1486「載本田兼親譜」）永井哲雄氏はこの資料を文明４～５（1472～73）年頃のものとし「米良美濃及び比田木次郎太郎は島津方と入魂の間柄であり（中略）境目の須木を本拠にしている様子がうかがえるが、確かなことはわからない。恐らくは、このころ、伊東氏との争奪の地となっていたのではないかと思われる」と指摘している（永井 1994）。

②文明 16（1484）年の飫肥出兵に際し、伊東祐邑が率いた地域に「祐邑ハ清武・田野・石塚・穆佐・倉岡・飯田・内山・綾・紙屋・守永・須木此人数召供シテ」（『日向記巻第３』「17　飫肥御発向事」）とあり、このころの伊東氏の勢力範囲が伺える。

引用参考文献

永井哲雄 1994「第二編　第四章　中世」『須木村史』須木村史編さん委員会

宮崎県 1999『宮崎県史　叢書　日向記』

鹿児島県維新史料編さん所編 1980『鹿児島県史　旧記雑録前編　第２巻』

鹿児島県維新史料編さん所編 1981『鹿児島県史　旧記雑録後編　第１巻』

北郷泰道 1998「第四章　第四節　考古学からみた中世社会」『宮崎県史　通史編　中世』宮崎県

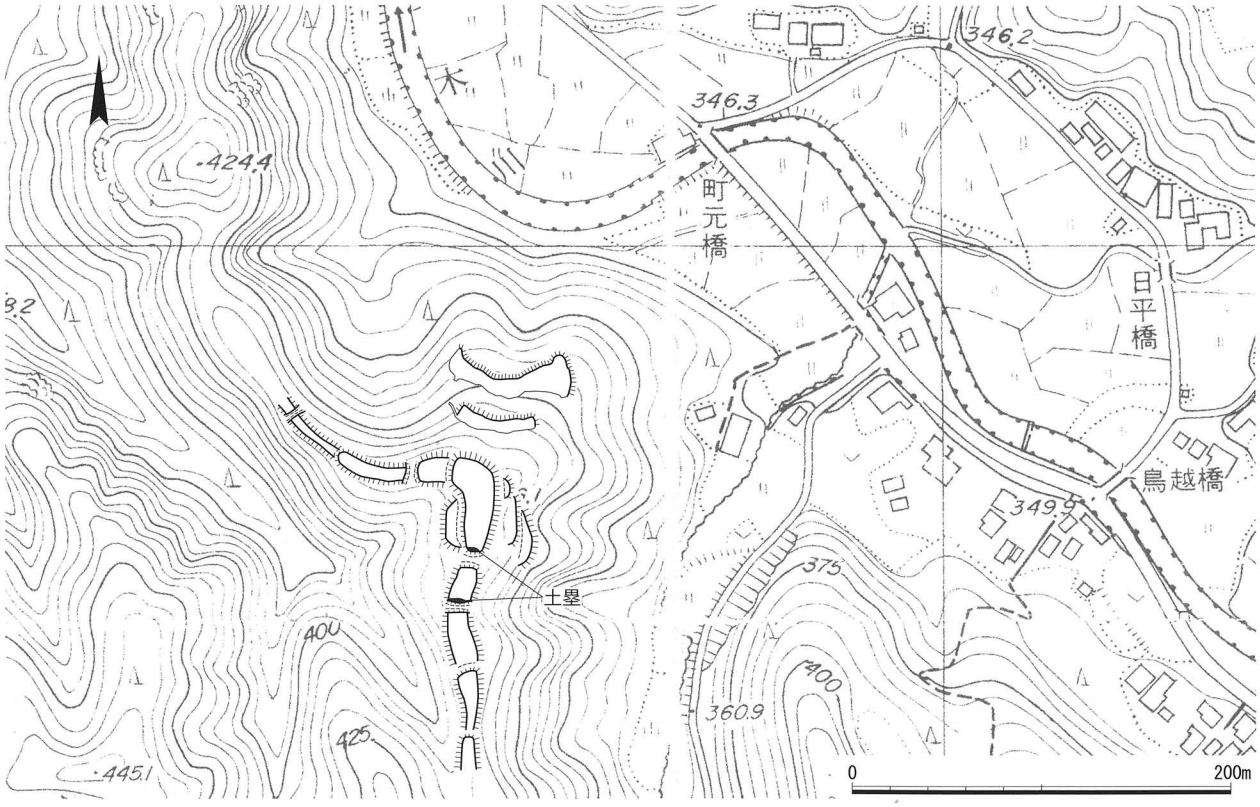


図 4-8　奈佐木城縄張り図（1/4000：宮崎県 1999 作図を基に加筆及び製図）

SI01（東から）

SI01（東から）

SI02（西から）

SI03 と遺物出土状況（北から）

SI04（西から）

SI04（南東から）

SI05（西から）

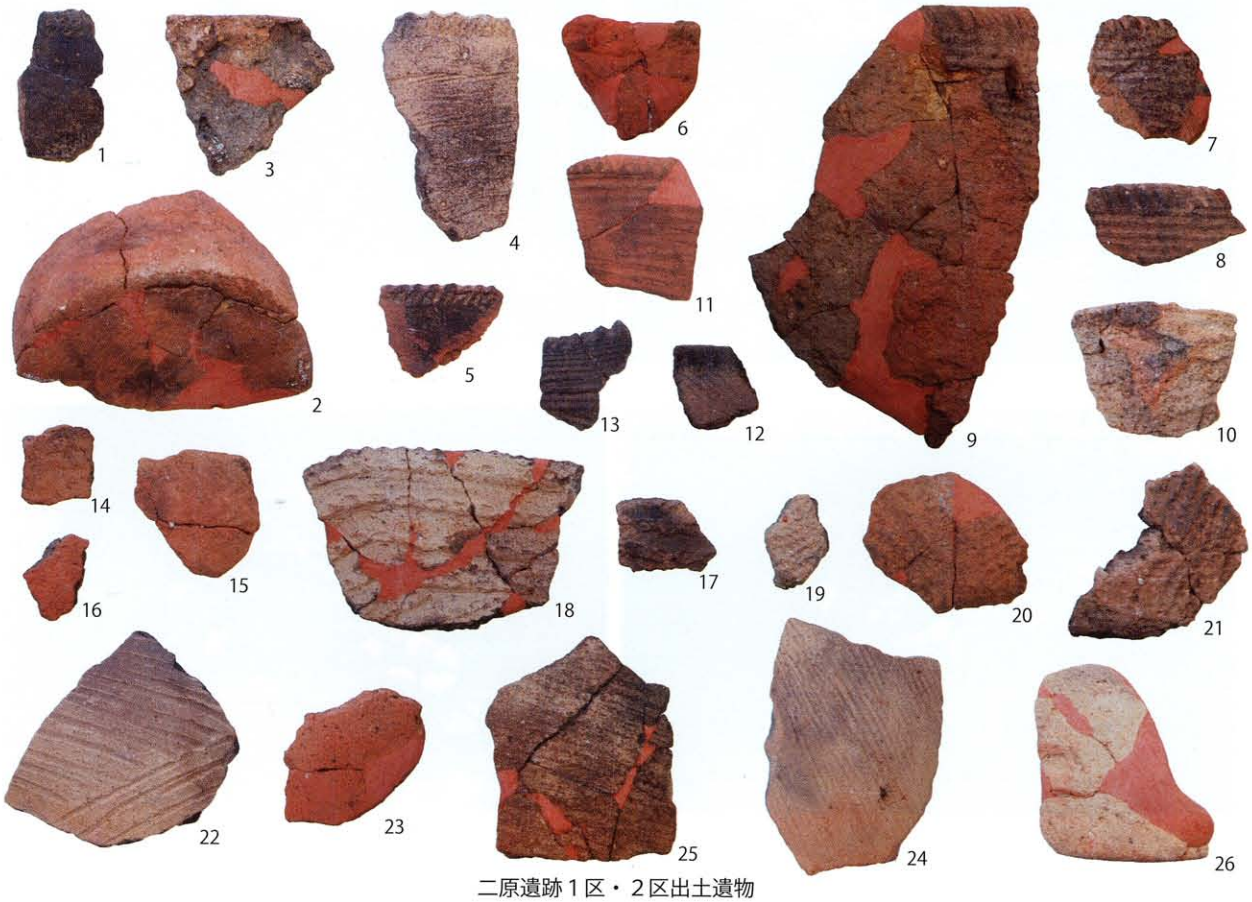
SI06・07（東から）

SI08（北から）

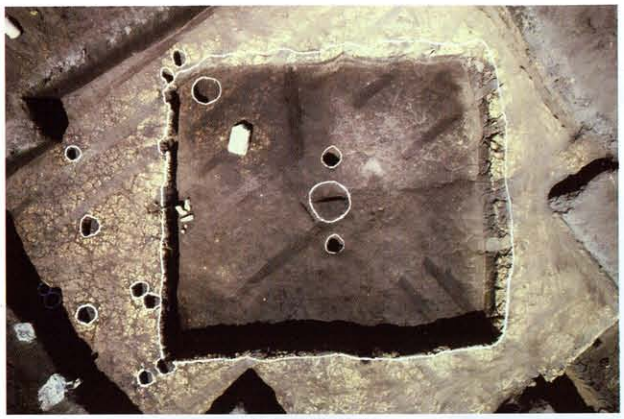
SI09（西から）

SC01（北から）

SX01（東から）



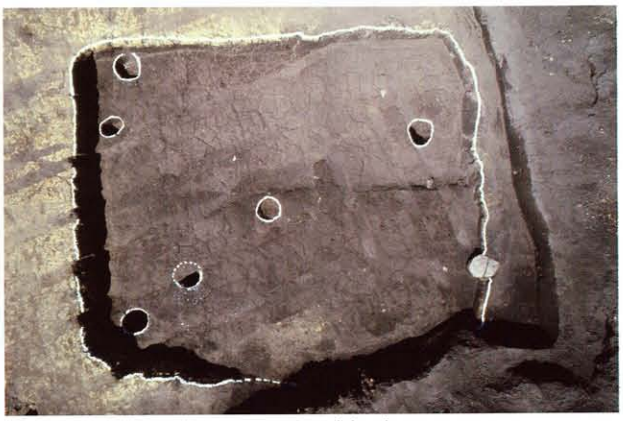
二原遺跡１区・２区出土遺物



SA01（上が西）

SA01（南から）

SA03（南から）



SA04（上が南西）

SA04（北東から）

SA04 出土埋甕

縄文時代早期礫群出土状況（上が北西）

縄文時代早期礫群出土状況（西から）

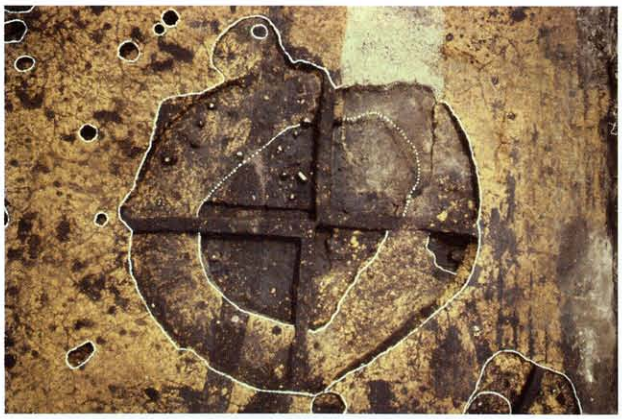
1
2
3
4
7
6
10
8
9
11
5
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
48
47
49
51
50
52
53
54
55
56

宮地遺跡２区（南から）

宮地遺跡２区（南から）

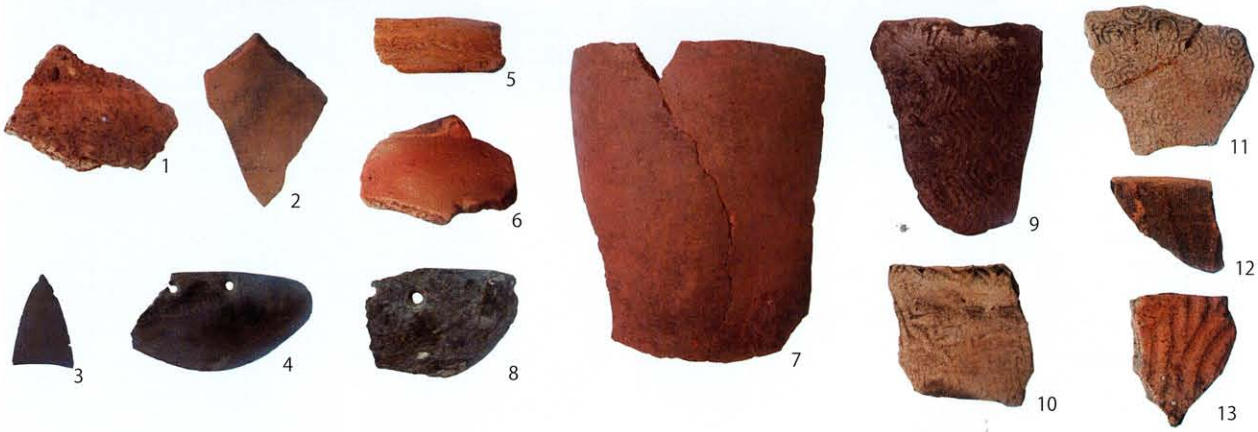
宮地遺跡２区（上が北東）

SA01（上が南東）



SA02（上が東）

SB02（上が北東）



奈佐木城跡遠景（北から）

奈佐木城跡（上が南）

奈佐木城跡曲輪１〈主郭〉（右が北）

奈佐木城跡曲輪１〈主郭〉（北から）

奈佐木城跡曲輪１〈主郭〉（南から）

奈佐木城跡曲輪２（東から）

奈佐木城跡曲輪３（東から）

奈佐木城跡曲輪３〈古神社跡〉（南から）

奈佐木城跡に現存する空堀

曲輪１〈主郭〉南端部に現存する土塁

奈佐木城跡遠景（北から）

奈佐木城想像図「奈佐木城址公園案内図」より

報告書抄録

ふりがな	にわらいせき1く・2く　みやじいせき1く　みやじいせき2く　なさきじょうあと
書名	二原遺跡1区・2区　宮地遺跡1区　宮地遺跡2区　奈佐木城跡
シリーズ名	小林市文化財調査報告書
シリーズ番号	第6集
編著者名	秦　広之　増谷理絵
発行期間	小林市教育委員会
所在地	宮崎県小林市細野300番地
発行年月日	平成23(2011)年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		㎡	
二原遺跡1区・2区	小林市真方字東二原	45205	4002	32° 1′ 41″	131° 0′ 2″	2010.8.28 ～ 2010.9.18 2010.8.28 ～ 2010.9.18	780	市道二原・下津佐線拡幅工事
宮地遺跡1区	小林市須木中原字上ノ原	45205	213	32° 4′ 41″	131° 4′ 7″	19980506 ～ 19980812	1,500	村立中央保育園改築工事
宮地遺跡2区	小林市須木中原字上ノ原	45205	213	32° 4′ 9″	131° 4′ 9″	19990907 ～ 19991101	639.16	西諸広域消防須木分遣所改築工事
奈佐木城跡	小林市須木奈佐木字上奈佐木	45205	416	32° 2′ 31″	131° 3′ 34″	20001206 ～ 20010226	383.51	奈佐木城址公園整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二原遺跡1区・2区	集落	縄文時代	集石遺構 土坑	縄文土器 石鏃	縄文時代草創期から早期の遺物が出土
宮地遺跡1区	集落	縄文時代 弥生時代 古墳時代	集石遺構 竪穴住居 土坑 小穴	縄文土器 石鏃 異形石器(トロトロ石器) 弥生土器・土師器 石包丁	弥生時代終末から古墳時代前期の竪穴住居を確認
宮地遺跡2区	集落	縄文時代 弥生時代 古墳時代	集石遺構 竪穴住居 土坑 小穴	縄文土器 弥生土器・土師器	弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居を確認
奈佐木城跡	城館	中世 近世	曲輪 古神社跡	在地系土器 国産陶磁器 中国陶磁器 青銅製品 銭貨	戦国期に伊東氏が配置した「伊東四十八城」の一つ

小林市文化財調査報告書第６集

二原遺跡１区・２区　宮地遺跡１区　宮地遺跡２区　奈佐木城跡

平成 23 年３月 31 日

編集・発行　宮崎県小林市教育委員会

宮崎県小林市細野 300

印　　刷　金子印刷所